

相續ニ關シ親戚等カ協議ヲ爲スノ慣習又ハ相續屆書ニ連署スヘキ法則ハ相續ニ付テノ要件ニ非ス故ニ此慣習又ハ法則ニ背戾スルモ既ニ爲シタル相續ヲ取消スニ足ルヘキ瑕疵トナラス名義上ノ相續人即チ仲次相續人ナルモノハ嫡子ノ存在スルニ拘ハラズ便宜上之ヲ設クルヲ得ヘキコトハ我邦慣習ノ認ムル所ナリ

遺言ニ依リ相續人ノ選定ヲ他人ニ委任スルハ一般ニ無効ナリト云フヲ得ス
女戸主カ養子ヲ爲シタルトキト雖モ直チニ其養子ニ相續ヲ讓ラサルヘカラサルノ慣例ナシ
明治六年第二十八號及ヒ同年第二百六十三號布告ハ華士族ノ家督相續ニ關スルモノナルニ依リ平民ノ家督相續ニ適用スルコトヲ得ス

戸主退隱シ新戸主之ニ代リタル場合ニ於テ戸籍取扱官吏カ戸籍簿中前代戸主ノ名稱身分年齢ヲ抹消シ其後ニ更ニ後代戸主ノ名稱身分年齢等ヲ挿入スルハ各地方一般ノ慣例ニ非ス故ニ之ヲ是認セル判決ハ不法ナリ

第二節 家督相續人

○民法實施前ノ法則ニ於テハ養嗣子ニ非サル養子カ養親ノ家督相續ヲ爲スヘキヤ否ハ養親ノ意思如何ニ因リテ定マルヘキ事實上ノ問題ナリ
○廢嫡ヲ爲スニハ被廢嫡者ノ承諾ヲ要スヘキモノニ非ス

○法定又ハ指定ノ家督相續人ナキ場合ニ於テハ被相續人ノ父母又ハ親族會ハ民法第九百八十二條規定ノ順序ニ從ヒ家族中ヨリ家督相續人ヲ選定スヘシ若シ其家族中ノ者ニシテ相續人ト爲ルコトヲ欲セス豫メ相續

三〇	四	三〇	六	三〇	九	三〇	八	三〇	七	三〇	五	三〇	四
三〇	一	三〇	九	三〇	六	三〇	八	三〇	七	三〇	五	三〇	四
三〇	一	三〇	九	三〇	六	三〇	八	三〇	七	三〇	五	三〇	四
三〇	一	三〇	九	三〇	六	三〇	八	三〇	七	三〇	五	三〇	四

人ニ選定セラル、コトヲ辭スル者アルトキト雖モ苟モ右規定ノ順序ヲ變更シ又ハ全ク選定ヲ爲サ、ラントスルトキハ必ス先ツ裁判所ノ許可ヲ得サルヘカラス

○民法施行前ニ於テ推定家督相續人アルニ關セテ親族協議上ノ出願ニ因リ當該官吏カ他人ヲ以テ相續セシムルコトヲ許可シタルトキハ家督相續回復ノ訴ヲ提起スルヲ得サルモノトス

(參照)

本邦ノ習慣ニ於テ直系ノ卑屬親ヲ相續セシムルハ戸主死亡シ相續者未定ノ場合ニ於テコソ適用スヘキモノナレ先戸主死亡ノ際其實子ヲ措キテ傍系親ナル妹ヲシテ相續セシメタルコト既ニ三十餘年ノ星霜ヲ經過シタル後ニ在テハ此習慣ヲ適用スルヲ得ス

戸主死亡セシトキ其嗣子相續ヲ爲サシテ傍系親其跡ヲ相續シタル後ニ出生シタル嗣子ノ實子ハ相續上何等ノ權利ヲモ繼承スルコト能ハス

私生子モ相續權ヲ有スル場合ナキニ非スト雖モ既ニ他姓ヲ名乘リ戸籍上某ノ庶子ト編入セラレタル以上ハ某家現戸主ニ代リテ其權利ヲ取得スルヲ得ス

相續ハ男子ヲ先ニシテ女子ヲ後ニスルハ古來ノ慣例ナレトモ當然相續スヘキ卑屬親ナキ時ハ親族協議ノ上其家ニ適當スル女子ヲ選定スルモ亦慣例ノ許ス所ナリ

甲者籍ヲ其生家ニ有シ且ツ其家ヲ相續スヘキ權利アリト決スル上ハ縱令一時離縁トナリシ父ノ實家ニ養育セラレ、モ爲メニ相續權ヲ失却スヘキモノニ非サレハ原裁判カ此等ノ陳述ニ對シ説明ヲ與ヘサルモ不當ニ非ス

三三	四	三三	二〇	三三	五	二七	〇	二七	〇	二七	〇	二七	〇
三三	四	三三	二〇	三三	五	二七	〇	二七	〇	二七	〇	二七	〇
三三	四	三三	二〇	三三	五	二七	〇	二七	〇	二七	〇	二七	〇
三三	四	三三	二〇	三三	五	二七	〇	二七	〇	二七	〇	二七	〇

戸主死亡シ家族中他ニ相續人ナキトキハ戸主ノ遺妻ニ於テ相續スルノ權利アリ而シテ遺妻カ其相續ヲ拋棄シタルトキ始メテ親族會ノ議決ニ依リ他家ヨリ相續人ヲ選定スルコトヲ得ルハ本邦慣習ノ認ムル所ナリ

他家ニ入りテ當然法定ノ推定家督相續人タラントスルニハ其家ノ戸主ノ養嗣子タルカ又ハ其家ノ法定ノ推定家督相續人タルヘキ女子ト結婚シ培養子タル身分ヲ取得セサルヘカラス
家督相續權ハ戸主ノ最近卑屬親ナル其子ニ屬スヘク直チニ其孫ニ屬スヘキモノニ非ス故ニ長女ノ培養子カ離縁トナリ其家ヲ去リタルトキハ縱令其婚姻中ニ生マレタル子女アリト雖モ家督相續權ハ其配偶者ニ復歸シテ其子女ニ移轉セス
家督相續權アル長女ノ培養子トナリタル者ハ戸籍ノ名稱ハ培養子タルト養嗣子タルトニ論ナク其家ノ法定家督相續人タルヘキモノトス

第三節 家督相續ノ效力

○戸主カ隱居ヲ爲ス場合ニ於テ特ニ不動産ノ一部ヲ留保シテ依然自己ノ所有ト爲シ得ルハ民間ノ慣行ニシテ裁判例ニ於テモ之ヲ是認ス

○戸主カ隱居ヲ爲ス場合ニ於テ特ニ其財産ノ一部ヲ留保シテ依然自己ノ所有ト爲シ得ルハ本邦ノ慣例ナリ

○相續人カ前戸主ノ行爲ニ付キ責任ヲ負フヘキ場合ハ其相續以前ニ係ルモノニ止マリ其以後ニ於ケル行爲ニ付テハ責任ナシトス

○先代カ隱居後ニ受ケタル裁判ノ效力ハ其相續人ニ及ハサルモノトス

三	三	三	三	三	三	三
一	二	二	二	二	二	二
三	一	二	二	二	二	二

○隱居者カ隱居後ニ爲シタル法律行爲ハ其家督相續人ニ對シテ效力ナク及ホサ、ルコトハ一般ニ認メラレタル慣習法ナリ

○戸主カ隱居ヲ爲スニ當リ其財産ノ幾部ヲ相續人ニ移サスシテ之ヲ自己ニ留保セントスルニハ特ニ其意思表示アルコトヲ要ス

○前戸主ニ於テ特ニ財産ヲ留保セサル以上ハ家督相續ニ依リテ前戸主ノ有セシ財産ハ總テ相續人ニ歸屬スヘキモノニシテ所有名義ヲ更正セサルモ之カ爲メ前戸主ノ留保セルモノト謂フヲ得ス

○隱居ニ因ル家督相續人ハ被相續人ノ死亡セシ場合ト同シク隱居者ノ訴訟手續ヲ受繼セサルヘカラス

(參照)

債務ヲ負ヒシ後退隱シテ戸籍ヲ移動スルモ依然其地ニ在テ從前ノ業務ニ從事スルトキハ爲メニ辨償ノ義務ヲ免カルコトヲ得ス
戸主カ前戸主ノ債務ノ爲メニ家實分散ノ處分ヲ受ケ其債務ヲ盡シシ能ハサル場合ニ於テ債權者ハ其保證人ヲ措キ前戸主ニ係リ復更ニ之カ償還ヲ求ムヘキモノニ非ス
原院カ某者ヲ以テ相續ノ權アルモノト認定シタル以上ハ某者ハ縱令成規ノ手續(官廳ヘノ届出)ヲ經テ相續ヲ爲サルモ其家ノ財産ニ付キ權義ノ關係ヲ有スルコト論ヲ俟タス
金員ノ預リ主カ我家ノ財産ヲ長男ニ讓渡シ隱居シタルモ預リ主タルノ義務ヲ免カルヘキモノニ非ス

三	三	三	三	三	三	三
四	四	二	二	二	二	二
四	四	二	二	二	二	二
四	四	二	二	二	二	二

貸借ノ當時甲者ニ於テ既ニ乙者ノ乙家ヲ退隱スヘキ事情ヲ知悉シ特ニ乙者其人ヲ信用シ其隱居財産ヨリ辨濟ヲ受クヘキ意思ヲ以テ貸與シタル上ハ退隱後乙者ノ死亡シタルト否トニ論ナク其本家ノ相續人タル者ニ此債務ヲ負擔セシムヘキ條理ナシ

家族ト雖モ記名ノ財産ヲ所有スルコトハ法律ノ許ス所ナリ乃チ戸主カ其相續人タルヘキ者ニ家督ヲ讓リテ隱居ヲ爲スニ當リ不動産ノ全部又ハ一部ニ付キ名義ヲ改メスシテ其所有ヲ留保シタルトキハ家族タル隱居ハ其記名財産ノ所有者ト云ハサルヘカラス家督相續人ハ其家ノ財産ヲ相續スルノ權利ヲ有スルコト論テ疎タスト雖モ隱居ノ所有スル財産ハ其家ノ財産即チ戸主ノ財産ト云フヘカラス

一旦戸主トシテ負擔シタル義務ハ爾後戸主ノ身分ヲ脫退スルモ當然其義務ノ免脱ヲ得ヘカラス
戸主中ノ債務ニ付テハ隱居後ト雖モ尙ホ責任アリ

相續人ハ特別ノ事情ナキ限りハ前戸主ノ有セル一切ノ權義務ヲ繼承スヘキモノナレハ死亡者カ其財産ヲ他人ニ遺贈シ又ハ退隱者カ之ヲ持續シタル等ノ事蹟存セサル限りハ前戸主ノ財産ハ當然相續人ニ歸スルヲ以テ一般ノ通義トス
戸主退隱スルトキハ一切ノ權利義務ハ家名ト共ニ跡相續人ニ移轉スルヲ以テ普通ノ慣例ト爲ス

第二章 遺産相續

第二節 遺産相續人

(參照)

死亡者ノ遺産ハ其尊屬ナル戸主ニ屬スヘキモノニ非ス死亡者ノ卑屬ナル長男ニ於テ相續スヘキモノトス

一家ノ戸主死亡シ相續人タルヘキ子孫ナキトキハ繼令家ヲ異ニスルモ其子カ父母ノ財産ヲ相續スヘキハ當然ナリ

同居家族ノ遺産ハ戸主ノ支配權ニ屬スルモ分家ノ家族死亡シ獨リ其者ノ遺棄存在セルトキハ遺棄ニ於テ右遺産ヲ相續スルハ當然ナリ

第三章 相續ノ承認及ヒ拋棄

第一節 總則

(參照)

家督相續權ハ之ヲ拋棄スルヲ許サトル法則ナキニ依リ其拋棄ヲ認メタル裁判ハ違法ニ非ス

第六章 遺言

第二節 遺言ノ方式

○遺言ヲ爲スニ際シ親族アル者ハ多シハ皆之ヲ立會ハシムヘシト雖モ遺言書ニハ必スシモ親族ノ立會連署ヲ要スルモノニ非ス

三	二九	二六	二六	二六
六	一〇	四	二	二
七一	三〇	一	九四	二二

三〇	三〇	二九	二六	二六	二六	二六
一〇	五	四	三	三	〇	〇
六	七	六〇	二〇	七九	四〇	二九

第一款 普通ノ方式

(參照)

遺贈證書ハ必ス本人ニ於テ之ヲ自署シ又ハ證人ノ連署ヲ要スルノ條理ナシ殊ニ德川氏政府百
个條及ヒ寛保追加ノ如キハ現行法ノ效力ナキハ勿論裁判上慣例トシテモ亦當然認知セラレハ
キモノニ非ス

第二節 遺言ノ效力

(參照)

遺言ハ單獨行爲ニシテ受遺者ハ遺言者ノ死亡後何時ニテモ遺贈ノ拋棄又ハ承認ヲ爲スコトヲ
得ルモノナレハ遺言者死亡後承認ノ意思ヲ起訴前ニ表ハスト又ハ起訴ト同時ニ表ハストニ因
リテ遺言ノ效力ヲ異ニスルコトナシ

遺言ハ遺言者ノ死亡ノ時ヨリ其效力ヲ生ス從テ遺言者ハ其生存中何時ニテモ隨意ニ之ヲ取消
スコトヲ得

二八	〇	五二〇
三一	四	四五
三二	三	三七

商

法

商 法

第一編 總則

第一章 法例

○舊商法ノ施行中滿期日ノ到來シタル約束手形ニ關スル時効期間ノ計算ニ付テハ民法第四百十條ノ規定ヲ適用スヘキモノナレハ滿期日ヲ算入スヘキモノニ非ス

第二章 商人

○酒類製造業ヲ廢止シタル後ニ於テモ依然酒類販賣業ヲ持續スル事實アルニ於テハ其商人タル身分ヲ存續スルモノト云ハサルヘカラス

第三章 商業登記

○商法第五十三條ハ同第五十一條ニ依リ登記シタル事項ニ異動ヲ生シタルトキニ於テ其異動ノ單ニ變更ニ係ルト將タ廢止ニ係ルトヲ問ハズ總テ之ヲ變更登記トシテ登記スヘキ法意ニシテ同法第十五條ノ所謂消滅

三四	三四
二	一〇
二八	三五

登記トハ登記シタル事由ノ全ク無用ニ歸シ消滅シタル場合ニ適用スヘキ法意ナリ

第四章 商號

○運送其他ノ營業ヲ讓渡スルニ當リテハ店舖貨物債權債務得意先及ヒ商業帳簿等ハ總テ之ヲ讓渡スナ通常トス故ニ其反證アラサル限りハ總テ讓渡アリタルモノト推定セサルヘカラス

○一箇人ノ商號ハ民事訴訟法第九十條ノ規定ニ依リ當事者ヲ表示スヘキ名稱ト爲スヲ得サルモノトス

第二編 會社

第二章 合名會社

第一節 設立

○商法第五十三條中第五十一條第一項ニ掲ケタル事項中ニ變更ヲ生シタルトキトハ地名改稱ノ場合ヲ包含セス單ニ事項其モノ即チ本支店ノ位置ニ變更ヲ生シタル場合ヲ指スモノトス

三三	三四	三三	三三
二二	六	一〇	四
一三	七	四二	七〇

○商法第五十三條ニ所謂「第五十一條第一項ニ掲ケタル事項中ニ變更ヲ生シタルトキ」トハ單ニ事項其モノ、變更ノ場合ノミヲ指シタルモノト狹義ニ解釋スヘキモノトス

○商法第五十三條ノ規定ハ其第五十一條ニ依リ登記シタル事項ニ異同ヲ生シタルトキハ其異同ハ單ニ變更ニ係ルト將タ廢止ニ係ルトナ間ハス總テ變更登記トシテ登記スヘキ律意ナリト解セサルヘカラサルモノトス

(附註)

商法第五十三條ハ同第五十一條ニ依リ登記シタル事項ニ異動ヲ生シタルトキニ於テ其異動ノ單ニ變更ニ係ルト將タ廢止ニ係ルトナ間ハス總テ之ヲ變更登記トシテ登記スヘキ法意ニシテ同法第十五條ノ所謂消滅登記トハ登記シタル事由ノ全ク無用ニ歸シ消滅シタル場合ニ適用スヘキ法意ナリ

○商法第四百四十一條及ヒ第五十三條ノ二週間ノ期間ハ監査役ニ當選シタル者ノ承諾ヲ竣テ後始メテ起算スヘキモノニ非ス決議ノ日ヨリ起算スヘキモノトス

第五節 解散

○商法第八十一條ニ會社カ合併ヲ爲シタルトキハ云々トアルハ同法第七

三四	三三	三四	三四
七	四	六	二
三七	七〇	五三	二四

十八條ニ會社カ合併ノ決議ヲ爲シタルトキハ云々トアル其決議ヲ爲シタル時ヲ指スノ法意ニ非スシテ決議ヲ爲シタル後實際合併ヲ爲シタル時ヲ意味スル規定ト解釋セサルヘカラス

第六節 清算

○商法第九十二條ニ所謂會社ニ現存スル財産トハ會社財産中ヨリ社員ヲシテ出資ヲ爲サシムヘキ債權ヲ取除キタルモノヲ指稱スル文字ニシテ其動産タルト不動産タルト債權タルト將タ又其他ノ財産タルトナ問ハス會社カ現ニ有スル總テノ財産ヲ包含スルモノトス

第四章 株式會社

第一節 設立

○株式會社設立ノ登記ヲ爲スニ當リ各株式ニ付キ少クモ四分ノ一ノ金額ヲ拂込マサレハ其登記ハ適法ナラス然レトモ之カ爲メ當然無効ニ歸スヘキモノニ非サレハ苟モ登記ノ取消サレサル間ハ會社ノ法人資格ハ他人ニ對抗スルコトヲ得

○商法第四百十一條及ヒ第五十三條ノ二週間ノ期間ハ監査役ニ當選シタル者ノ承諾ヲ竣テ後始メテ起算スヘキモノニ非ス決議ノ日ヨリ起算ス

ヘキモノトス

○同一ノ者カ監査役ニ再選セラル、モ是レ全ク改選ノ結果ニシテ即チ監査役ニ變更アリタルモノニ該當スルニ因リ更ニ之ヲ登記スヘキモノトス

第三節 會社ノ機關

第一款 株主總會

○舊商法施行中ニ提起シタル訴訟ニ對シ商法第六十三條第三項ノ規定ヲ適用シタル裁判ハ不法ナリ

○株主總會ニ於テ出席株主カ其權利數以外ノ投票ヲ爲シ又ハ正當ノ委任狀ヲ有セサル者カ投票ヲ爲シタル場合ニ於テ此等ノ投票ヲ無効トシ又ハ除却シタリトテ株主權ノ行使ヲ妨害スルモノニ非サレハ之カ爲メ總會ノ決議ヲ無効トスヘキ理由ナシ

○投票ハ其記載明確ナラス又ハ誤記アル場合ニ他ノ證據ニ依リ何人ノ投票ナルヤチ明確ニ知り得ルニ於テハ其投票ヲ無効トスヘキ條理ナシ

第二款 監査役

○株式會社ノ監査役ハ會社ノ機關ニシテ會社ノ雇人ニ非ス
○株式會社ノ監査役ハ取締役差支ノ場合ニハ其代理ヲ爲シ且取締役ニ對

三四	三七
三四	二
三四	九
三四	九
三四	九
三四	一六
三四	一六
三四	一七

スル訴訟ニ付キ會社ヲ代表スルコトアルモ會社ニ關スル訴訟ノ成績ニ直接ノ利害關係ヲ有スル者ニ非ス

第四節 會社ノ計算

○商法第九十八條ノ株主ノ請求ニ因リ會社ノ業務及ヒ會社財產ノ狀況ヲ調査セシムルコトニ付テハ法律上別ニ何等ノ制限アラサルヲ以テ獨リ現在ノコトニ止マラス必要アルニ於テハ既往ニ遡リテ調査セシムヘキモノト解セサルヘカラス

第八節 清算

○解散シタル株式會社ト雖モ其清算ノ目的ノ範圍内ニ於テハ尙ホ存續スルモノト看做サ、ルヘカラス

第三編 商行為

第一章 總則

○銀行及ヒ商人間ニ信用ヲ開ク爲メ汎ク行ハル、根抵當ハ有效ナリ

第六章 問屋營業

○委託販賣トハ當事者ノ一方ヨリ他ノ一方ニ對シ商品ヲ委託シ之カ販賣

三三
三
一三七

三三
七
四

三四
五
一四九

三四
九
一三七

ヲ委任スルヲ云フ故ニ其販賣ノ時機及ヒ直段ニ付キ別ニ商習慣又ハ特約ノ存セサル限りハ受託者ニ於テ相當ト思料スル時機及ヒ直段ヲ以テ適宜ニ之カ販賣ヲ爲シ得ルモノトス

○取引所仲買人カ取引所ニ於ケル賣買ノ委任ヲ受ケ賣建又ハ買附ヲ爲シタル以上ハ其轉賣買等取引ノ變更ニ關シテハ一ニ委任者ノ意思ニ從フヘシ自己ノ意思ヲ以テ委任者ノ意思ヲ阻碍シ得ヘカラサルハ委任ニ關スル一般ノ法理ナリトス

○仲買人ハ取引所ニ於テハ自己ノ名ヲ以テ取引スヘキモノナレトモ仲買人ト注文者トノ間ニハ委任關係存スルヲ以テ取引所ニ於ケル取引直段ト注文者ニ報告シタル直段トハ同一ナラサルヘカラス

○取引所仲買人カ委任者ノ承諾ヲ得スシテ爲シタル轉賣若クハ買戻ハ委任者ニ對抗スルコトヲ得ス

○取引所仲買人カ爲シタル轉賣若クハ買戻ヲ委任者カ承諾セサル場合ニ於テ仲買人カ更ニ委任者ノ爲メニ賣建若クハ買建ヲ爲シ之ヲシテ初ヨリ轉賣若クハ買戻セサリシ地位ニ在ラシムル商慣習ハ法令ニ違背スル所ナシ又委任ノ本旨ニ背反スル所ナシ

三三
四
一二五

三三
六
一四三

三三
一〇
一六

三四
五
九

三四
五
九

第九章 寄託

第二節 倉庫營業

○債務者カ商法上ノ預證券等ニ裏書ヲ爲シ之ヲ讓渡シタルトキハ縱令其讓渡ハ虛偽ナルニモセヨ其裏書ヲ取消スニ非サレハ債權者ニ於テ之ヲ處分スルヲ得サルニ付キ其裏書ハ所謂詐害行爲ニシテ民法第四百二十四條ニ依リ之ヲ取消ヲ求メ得ヘキモノトス

第十章 保險

第一節 損害保險

○商法第四百二十七條ニ所謂生死トハ死亡ト生存トノ二者ヲ云フモノニシテ出生ヲ包含スルモノニ非ス又妊婦ハ其胎兒又ハ自己ノ身體ニ就キ金錢上ノ利益ヲ有スルモノト言フコトヲ得サレハ出生ヲ條件トシテ多數ノ契約者ヨリ報酬ヲ醸出セシメ會社ヨリハ之ニ對シテ保護料ヲ支拂ヒ其差額ヲ利得セントスル會社事業ハ生命保險ニモ非ス損害保險ニモ非サルナリ

第二節 生命保險

三四
九
七

三七
七
三四

○商法第四百二十七條ニ所謂生死トハ死亡ト生存トノ二者ヲ云フモノニシテ出生ヲ包含スルモノニ非ス又妊婦ハ其胎兒又ハ自己ノ身體ニ就キ金錢上ノ利益ヲ有スルモノト言フコトヲ得サレハ出生ヲ條件トシテ多數ノ契約者ヨリ報酬ヲ醸出セシメ會社ヨリハ之ニ對シテ保護料ヲ支拂ヒ其差額ヲ利得セントスル會社事業ハ生命保險ニモ非ス損害保險ニモ非サルナリ

三七
七
三四

第四編 手形

第一章 總則

○手形ノ支拂地ニ支拂人カ營業所住所及ヒ居所ヲ有セサル場合ニ於テ商法第四百四十二條ノ手續ヲ爲サスシテ當然支拂請求ノ手續ヲ爲シタルモノト看做シタルハ違法ナリ

三三
八
四

○手形ヲ取得セシ原因カ消滅シタル場合ニ於テハ其取得者ハ手形取戻ノ請求ニ應セサルヘカラス

三三
一〇
一三

○拒絕證書カ拒絕者ノ營業所又ハ住所以外ニ於テ作成セラレタルモノナルヤ否ヤヲ爭フトキハ被拒絕者ニ於テ其場所ハ拒絕者ノ營業所又ハ住所ナルモノトシテ證明スルノ責任アルモノトス

三四
一
三

- 執達吏カ當該官署若シハ公署ニ間合チ爲サスシテ振出人ノ住所ナリト判断シタル事項ハ裁判所チ羈束スル效力ナシ
- 支拂ノ場所チ記載シタル手形ニ付テハ該場所ニ於テ其呈示及ヒ拒絕證書ノ作成チ爲スコトチ得ルモノトス
- 法律ニ於テ振出地ト稱スル地域ハ市町村若シハ北海道(沖繩)ノ區ノ如キ行政區劃中獨立シタル最小地域ノ謂ナリトス
- 舊商法ノ施行中滿期日ノ到來シタル約束手形ニ關スル時効期間ノ計算ニ付テハ民法第四百十條ノ規定チ適用スヘキモノナレハ滿期日チ算入スヘキモノニ非ス

第二章 爲替手形

第一節 振出

- 手形ニ振出人數名アルモ其效力ノ妨トナラス
- 支拂擔當者ナルモノハ支拂地カ支拂人ノ住所地ト異ナル場合ニ於テノミ定ムヘキモノトス
- 手形ノ所持人ニ於テ擅ニ裏書讓渡チ抹消シタル上之チ償還義務者ニ返

第二節 裏書

- 還スルモ法律上償還ノ義務チ盡シタル效力チ生セス隨テ償還義務者カ其手形チ握手スルモ爲替法上所持人ノ地位チ有セサルモノトス
- 手形ニ裏書人又ハ被裏書人トシテ商事會社ノ支店チ記載シタルモノハ該支店ニ於テ商行爲チ爲ス所ノ法人チ指示シタルニ外ナラサルモノトス
- (同五三三)
- 商事會社ハ其本店若クハ支店ニ於ケル商行爲ノ人格ナルチ以テ手形ノ裏書チ會社支店宛ト爲シタル場合ニ於テ其裏書讓受人ハ法人タル會社ナリトス
- 手形ノ裏書ニ某株式會社支店チ裏書讓受人ト爲シタル場合ニハ某株式會社チ以テ裏書讓受人ト爲シタルモノト看做スヘキモノトス
- 本店ト支店トノ間ニ於ケル手形ノ裏書ハ同一人間ニ爲シタル裏書ニシテ手形上何等ノ效力ナシ其裏書ハ始メヨリ記載チキモノト同一ナリトス
- 手形ノ裏書チ爲スニ付キ之ニ附箋シテ裏書人カ署名シタルハ商法第四百五十七條ニ所謂補箋ニ外ナラサレハ裏書ノ方式ニ背反スル所ナシ
- 商法第四百五十七條ニ規定セル二種ノ裏書ハ孰レモ指圖式手形ニ付キ之チ爲スコトチ得ヘキハ勿論記名式ノ手形ニ付キテモ之チ爲スコトチ得ヘキハ商法ノ解釋上毫モ疑チ容レヌ

三四	三四	三四	三四	三四	三四	三四
二	八	七	五	四	七	一
一	四	五	七	五	五	六

第六節 償還ノ請求

- 手形ノ所持人ニ於テ擅ニ裏書讓渡ヲ抹消シタル上之ヲ償還義務者ニ返還スルモ法律上償還ノ義務ヲ盡シタル效力ヲ生セス從テ償還義務者カ其手形ヲ握手スルモ爲替法上所持人ノ地位ヲ有セサルモノトス
- 償還請求ノ通知ハ拒絕證書作成ノ翌日マテニ發スレハ足ル其期間内ニ到達スルヲ要セス
- 執達吏カ償還請求ノ通知ヲ送達スル場合ニ於テ其手續ハ民事訴訟法ノ規定ニ依ルヲ要セス

第三章 約束手形

- 後見人カ被後見人ニ代リテ約束手形ヲ振出ス場合ニハ民法ノ規定ニ依リ親族會ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス
- 約束手形ニ被裏書人トシテ某銀行何々出張所殿ト記載シアルハ某銀行カ被裏書人ナルコトヲ示スモノニシテ何々出張所ナル記載ハ無用ノ文字ナルコト文面上自ラ明カナリトス
- 約束手形振出人ノ肩書ノ地ハ之ヲ手形ノ要件ナラサル住所地ナリト解釋セヨリハ寧ロ其要件タル振出地ナリト解釋シテ手形ヲ有效ナラシムルハ當然ナリ

三四	三六	三四	三四	三三
九	六	一〇	一〇	一
一八	一七	七	七	三

第五編 海商

第一章 船舶及船舶所有者

- 船舶沈没ノ場合ニ於テ船舶所有者ノ責任ハ船舶ノミナラス其保険金ニ及フヘキコトハ舊商法施行前ニ於テモ是認シタル法理ナリ

第三章 運送

第一節 物品運送

第一款 總則

- 船舶ノ全部ヲ以テ運送契約ノ目的ト爲シタル場合ニ積荷カ其船舶ト共ニ不可抗力ニ因リテ沈没シタルトキニ於テ商法第六百十三條第二項ニ所謂運送品ノ價格ヲ超エサル限度トハ滅失シタル積荷ノ價格ヲ控除シ

三四	三四	三四
五	一〇	九
三	一〇	三

タルモノナラサルヘカラス

第二款 船荷證券

○船荷證券ハ荷積前ニ於テ作成授受スルモ違法ニ非ス然レトモ其作成授受ヲ荷積後ニ於テシ其效力モ亦荷積後ニ發生スルヲ以テ通例トス

○運送契約ニ付テハ船長ハ船舶所有者ノ代理人ニシテ船荷證券ヲ發行スルコトモ亦其代理權限内ニ在ルモノトス

三 四 七 四

三 二 七

三 五 一 四

商 法 (明治二十三年法律第三十二號)

注 本法中第一編第六章第十二章及第二章第四章(商事會社ニノミ)ハ明治二十六年七月一日ヨリ同三十二年六月十五日マテ第三編ハ同二十六年七月一日ヨリ現時ニ至ル

意 上掲ノ部分ヲ除ク殘部ハ同三十一年七月一日ヨリ同三十二年六月十五日マテ施行セラル

總 則

(參照)

商習慣ハ當事者ヲシテ證明セシムルカ又ハ裁判所ノ職權ニ依リ調査ヲ爲シタル上ニ非サレハ漫然其存在ヲ認ムルヲ得ス

二 六 三 一 〇 一

第一編 商ノ通則

第一章 商事及ヒ商人

(參照)

一ノ取引ニシテ其大體ノ目的商事上ノ取引ヲ爲スニアルトキハ縱令其取引ニ係ル物件ノ一部

○ 求シタルヲ以テ不當ト爲シタルハ法則ヲ不當ニ適用シタルモノトス
 ○ 會社ノ無限責任社員ハ該社ノ債務ニ付キ縱令形式上訴訟ニ於テ共同被告ノ地位ニ立タスト雖モ實體上義務共通ノ關係アルモノナレハ該社員ノ一人カ會社ノ債權者ヨリ訴ヲ受クルニ當リ他ノ無限責任社員ニ對シテ訴訟參加ノ告知ヲ爲スヲ得ヘシ縱令其告知ヲ爲サスシテ訴訟終了シ未ダ債權者ニ對シ其債務ヲ辨濟セサル前ト雖モ尙ホ共同シテ其債務ノ負擔ヲ請求スル權利アリ

○ 商法實施以前ニ在テハ特別ノ條例ニ依テ設立セラレタル會社社團ノ外ハ法律上法人ノ資格ヲ有セス故ニ其當時ニ於ケル某會社トハ取モ直サズ社員全體ヲ合シテ指稱スル所ノ假名ニ過キス會社即チ社員ニシテ會社ト社員トハ各獨立ノ權利主體タルヘキ者ニ非ス從テ會社ノ解散スルト否トハ社員ノ義務ニ消長ヲ來スノ理ナシ但シ法人タラサル會社社團ノ名義ヲ以テ訴ヲ起シ又ハ訴ヲ受クルコトヲ得タル事例アリト雖モ這ハ畢竟訴訟手續上ノ簡便ヲ圖リテ之ヲ許スノミ

○ 商法實施以前ニ於ケル特別條例外ノ會社ハ會社存續中ハ社長又清算中ハ清算人ニ於テ訴答ヲ爲シ得ルモノトス

○ 商法實施前ニ於ケル銀行ノ頭取副頭取ハ慣例上訴訟ニ付キ銀行ヲ代表

スル權利アルモノトス

○ 商法實施前ニ解散シタル會社ノ殘務委員ハ商法ニ於ケル法人會社ノ清算人ト同一ノ任務アルモノニ付キ其社團代表ノ權利ハ之ヲ許認セサルヘカラス

○ 會社法施行以前ニ行政廳ノ聽許ニ依リ設立シタル會社ハ法人ニ非サルモノノ團體ナリ故ニ其團體カ其資産ヲ限度トシテ債務ヲ起シ債權者カ之ヲ承諾シタルトキハ其義務ハ團體ノ資産ニ止マリ社員一個人ノ財産ニ及ハス

○ 商法實施前ニ於ケル會社社團ハ特別ノ條例ニ依リ設立セラレタルモノノ外法人ト看做サルヲ以テ一般ノ法則ト爲ス

○ 法人ノ資格ヲ有セサル會社社團ト雖モ公然會社ト稱スルモノハ其定款又ハ社則ニ基キ選定セラレタル役員ノ名義ヲ以テ法律行爲ヲ爲シ又之ト取引スル者モ之ヲ以テ會社ノ法律行爲ト看做スハ商法實施前ニ於テ普通認知セラレタル慣例ナリ

○ 倉敷料等ヲ受取り物品ノ寄託ヲ營業ト爲ス倉庫會社カ其倉庫ノ失火ニ因リ滅失セシ物品ニ對スル損害賠償ノ義務ヲ免カル、ニハ自己ノ過失ニ原因セサル火災ノ爲メ委託物品ノ滅失シタル事實ヲ證明セサルヘカ

二七〇一四

二〇五

二〇二六

二二七

二八三

二五九

二九五

二六一

三〇二

三二

三〇四

三六

三〇二

三七

會社ノ約款ニ有限責任タルコトノ規定アルモ其效力ヲ社外人ニ及ボスコトヲ得ス縱令其規約ヲ所轄地方廳ニ届出ルモ世上一般ニ對シ公示シタルモノト爲スニ足ラス

第一節 合名會社

第五款 社員ノ退社

○商法第二百十條第二項ハ總社員ノ承諾ヲ要スル場合ト任意ニ退社スル場合トヲ論セス豫告及ヒ時期ノ二條件ヲ具備セサレハ退社ヲ許サハル法意ナリ

第六款 會社ノ解散

○會社解散ノ申請ヲ棄却シタル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲シ得ヘキ法律ノ規定ナキニ依リ其裁判如何ニ不審ノ廉アルモ之ニ對シ抗告ヲ爲スノ權ナシ

第三節 株式會社

第一款 總則

○定款解釋ノ如キモノニ付テハ其解釋上ニ違法ノ廉アラサレハ不服ヲ唱フルヲ得ス

○商事會社法施行以前ノ無限責任株式會社ニシテ第三者ニ對スル負債ヲ償還シ能ハサルトキハ出資者各自ハ共同一體無限ノ責任ヲ免カル、チ

得ス故ニ特約ヲ要セス其會社ノ負債ニ對シ各自連帶シテ義務ヲ負フモノトス

○米穀取引所ハ商法ノ規定ニ依リ株式組織ヲ以テ設立セル商事會社タリ故ニ之ニ對スル爭訟ハ原因ノ何タルヲ問ハス司法裁判所ノ管轄ニ屬ス
○株式會社ノ訴訟ニ於テ社長カ訴訟委任ヲ爲スニ當リ其委任狀ニ社印ヲ用ユヘキ規定ナキニ依リ社長ノ實印押捺アル訴訟委任狀ヲ是認セル裁判ハ相當ナリ

○株式會社ハ第三者ニ對シ其定款ニ羈束セラルヘキモ組合ノ規約ハ組合員カ相互ニ遵守スヘキコトヲ定メタルニ止マルヲ以テ組合員ハ第三者ニ對シ其規約ニ羈束セラルヘキモノニ非ス

第二款 會社ノ發起及ヒ設立

○凡ソ有限責任會社タルニハ政府ノ認可及ヒ登記ノ手續等ヲ要スヘキハ現行商法ノ規定スル所ナリ而シテ同法施行前ニ於テ其認可ヲ地方官ニ請フ者アルモ相對ノ取引ニ任ストノ指令ヲ付シ來リタルハ一般著明ノ慣例ナリ故ニ當時ニ在テハ會社ノ性質及ヒ其責任ノ範圍ハ凡テ會社設立者ト取引者ノ合意ニ一任シ其合意ナク會社ノ性質ヲモ知ラスシテ取引ヲ爲シタル者ニ對シテハ一般契約履行ノ法理ニ依ルヘキモノトス

三六	二	二六	五	二六	一
〇	二	三	四	三	一
二六	二	三	四	三	一
〇	二	三	四	三	一

○舊商法第八十條ニ所謂株式トハ申込ヲ爲シタル權利ヲモ包含スルモノト解釋スルヲ相當ナリトス

○舊商法ニ於ケル株券ノ賣買ハ株券其物ノ賣買ニ非スシテ株主權タル債權ノ賣買ニ外ナラサルモノトス

(同法)

株券ノ賣買トハ株式ノ賣買即チ一種ノ權利ノ讓渡ニシテ株券ト稱スル特定物ノ賣買ニ非ス

(參照)

記名ノ株券ハ普通ノ動産ト同視スヘカラス其名義書換等ノ手續ヲ爲サルトキハ他人ニ對シ所有移轉ノ效力ヲ有セス

未タ獲得セサル株券ノ賣買金ヲ以テ自己ノ負債ヲ償却シタルハ他人ノ立換ヲ受ケタルト一般

甲者カ會社株券ノ名前入タルノ故ヲ以テ既ニ配當金ヲ受領シタリシト雖モ是ヨリ先キ其株券

ノ所有權ハ乙者ニ移リナカラフ甲者ノ故障ニ依リ名前書換ヲ爲シ能ハサルカ爲メ甲者ノ受領シ

タル配當金ノ取戻ヲ請求シタルトキハ甲者ハ之ヲ引渡ス義務アルモノトス

總テ株券ノ賣買ハ一般ノ商慣習ニ於テ先ツ相場ヲ立テ、之ヲ爲スモノトス利落賣買ハ或場合

ノ變例ニ過キス故ニ利落賣買ノ證據ナキ以上ハ相場ヲ立テ、賣買シタルモノナルニ依リ未タ

支拂ハサル配當金ハ賣買前ノ時期ニ係ルモノモ株券ト共ニ讓受人ノ取得スルチ一般ノ商慣習

ナリトス

第五款 取締役及ヒ監査役

(參照)

會社取締役ノ資格ヲ以テ發付セシ書面タルモ社印ナキカ爲メ會社ニ責メナシト爲サンニハ他

ヲ網束スルニ足ルヘキ約束ナカルヘカラス然ラサレハ概シテ其社印ナキカ爲メ取締役ノ爲シ

タル行爲モ會社ニ責メナシト云フヲ得ス

銀行ノ取及ヒ株主總代兼ノ肩書ヲ附シテ取締役支配人ノニ連署シ銀行ノ印章ヲ押捺シタル

證書ハ完全ナル契約書ナリト認メナカラ之ヲ無効ノ契約ト認定スルニハ確實ナル反證ヲ舉ク

ルカ又ハ他ニ相當ノ理由ナカルヘカラス然ルニ該銀行ノ考課狀ニ該契約ヲ締結スヘキ議決ノ

記載ナキヲ唯一ノ理由トシテ該契約ハ株主總會ノ議決ヲ經サルモノト爲シ該證ノ契約ヲ無効

ナリト認定シテ判決ヲ下シタルハ探證ノ法則ニ違背シテ事實ヲ確定シタル違法ノ裁判ナリ

第六款 株主總會

○株式會社ノ株主カ他ノ資格ヲ以テ其會社ニ對シ債權ヲ請求スルトキハ會社ノ議決録ニ拘束セラル、コトナシ

○各株主カ株主總會ノ決議ニ依リ負擔スヘキ義務ハ其所有スル株式ノ金額ヲ限度トスルモノニシテ之ヲ超過シテ該決議ノ結果ヲ受クルモノニ

非ス隨フテ株主總會カ株券ノ金額ヲ増加シ又ハ新株式ヲ發行シ現在ノ株主ヲシテ其所有スル株式ニ應シ之ヲ引受ケシムヘキコトヲ決議スル

モ各株主ハ之ヲ承諾スルニ非サレハ其引受ヲ爲スノ義務ナシ

○株式會社ニ於ケル株主總會ノ決議ハ會社タル法人ノ意思ニシテ法人自體ノ利害ニ關スル重要ノ事項ヲ定ムルモノタルニ外ナラス而シテ株主

三四	三四	二六	二五	二五	二六
四	五	四	三	三	四
八二	一〇六	七	二〇	二〇	三六

二六	二六	二六	二六
二	二	二	二
二四	二二	二二	二二

其所有株式ノ金額ヲ限度トシテ總會ヲ組成スル株主ノ法定多數ノ意思ニ服從スルキコトヲ豫諾シタルニ過ギス

○株主總會ノ決議ニ付キ株主カ服從ノ義務ナキ以上ハ會社カ決議事項ヲ登記スルモ株主ニ對シテ其效チ有セス

○株式會社ハ總會ノ決議ニ依リ定款ヲ變更シ株券金額ヲ増シ新株券ヲ發行スルヲ得ルモ其決議ハ株式會社タル法人ノ意思ニ過キサレハ株金額増加ノ引受ヲ承諾セサル株主ニ對シ増加株金ノ拂込ヲ強要スルヲ得ス
○舊商法施行中ニ提起シタル訴訟ニ對シ商法第百六十三條第三項ノ規定ヲ適用シタル裁判ハ不法ナリ

第七款 定款ノ變更

○株式會社ノ資本ノ増減ハ其定款ノ變更ナリ而シテ定款ノ變更ニ必要ナル株主總會ノ決議ハ各株主ヲ羈束スト雖モ各株主カ其決議ニ服從ノ義務アルハ其所有株式ノ金額ヲ以テ限度トスヘシ株主總會ノ決議ノ爲メ右金額ヲ超過シ新ナル義務ヲ負擔スヘキモノニ非ス

○株式會社ハ總會ノ決議ニ依リ定款ヲ變更シ株券金額ヲ増シ新株券ヲ發行スルヲ得ルモ其決議ハ株式會社タル法人ノ意思ニ過キサレハ株金額増加ノ引受ヲ承諾セサル株主ニ對シ増加株金ノ拂込ヲ強要スルヲ得ス

第八款 株金ノ拂込

○株式會社カ資本ヲ増加スル場合ニ於テ其新株ノ應募者ハ總新株ノ引受アルヘキコトヲ豫想シテ其募集ニ應スルモノナルヲ以テ會社ハ定款ニ別段ノ定メアル場合ノ外總新株ノ引受アリタル後ニ非サレハ引受ヲ爲セシ者ニ對シ拂込ヲ催告スルヲ得ス

(參照)

會社定款ヲ以テ拂込未済ノ株ヲ公賣ニ附シ不足金ノ追徴ヲ爲スコトヲ許シ而シテ必ス一回ノ拂込未済毎ニ其處分ヲ結了スヘキコトヲ限ル明文ナキ以上ハ其會社ニ於テ二回以上ノ拂込未済ニ對スル處分ヲ併セテ同時ニ爲スコトヲ得

第九款 會社ノ義務

○銀行ノ考課狀ハ銀行カ其株主ニ對シテ爲シタル報告書ナレハ其記載事項ニ付キ株主以外ノモノニ對シテ直接ニ其責ヲ負フモノニ非ス
○會社ノ新株ト舊株ト性質ヲ異ニシ利益配當上優劣アル場合臨時總會ニ於テ新株一株ト舊株ニ株半ヲ同等ト爲シ新株ノ特權ヲ將來ニ向テ廢止セシコトヲ議決スルモ商法第二百二十一條ノ規定ニ違背シタルモノニ非ス

第十一款 取締役及ヒ監査役ニ對スル訴訟

三	二九	二四	三
一	二	一	一
三〇	一	二六	六

三	三	三	三
二	〇	〇	〇
六	五	六	五

品ノ處分ヲ爲サスシテ直チニ荷主タル債務者ニ對シテ辨濟ヲ請求スルコトヲ得ルモノトス

○運送人ニ於テ同業者カ引受ケタル貨物ヲ引受ケ遞次運送ヲ爲ストキハ各運送人ハ荷主ニ對シテ連帶シ運送ニ付テノ責任ヲ負擔スルヲ以テ一般ノ慣行ナリトス

○運送營業ニ關スル債務ト雖モ其債務證書ヲ作成シテ第三者ニ交付シ又ハ金額ヲ借入ル、カ如キ行爲ハ單純ナル運送業務使用人ノ受任權内ニ屬スヘキモノト非ス

(參照)

通常荷爲替ナルモノハ其證文ノ明文ニ依リ債主タル者ノ隨意處分スルヲ得ヘキモノナレハ其處分上ニ付キ負債主ノ承諾ヲ經サルモ荷爲替代金ニ不足ヲ生スル時ハ負債主ニ於テ之ヲ償却スル義務アルモノトス

荷爲替ナルモノハ性質ハ貸借ト留置權トノ法理ニ基キシモノニテ荷受主カ荷物ヲ拒絕シ爲替金ヲ支拂ハサル場合ニ於テハ貸主ハ荷物ヲ其儘荷主ニ組戻シテ單ニ爲替金ノ返還ヲ請求スルコトヲ得必スシモ保證物賣却ノ後ヲ俟タズ

甲者乙者ト運送契約ヲ爲シ乙者ニ於テ運送中其貨物ノ喪失シタルニ依リ甲者其價額ノ賠償ヲ求ムルトキハ乙者ニ過失アルコトヲ證明スルノ責任ナシ而シテ乙者ハ運送ノ責任ヲ負擔シタルモノナレハ貨物ノ喪失カ甲者ノ過失ハ貨物ノ性質又ハ不可抗力ニ基因シタルニ非サル以上

三	一	四
三	二	二
三	五	一六
二五	一	八
二五	三	一六

ハ縱令喪失カ第三者ノ所爲ニ係リ乙者ノ自己ノ過失ナキモ甲者ニ對シ賠償ノ責ヲ免カルコト能ハス

運送中貨物ノ喪失ニ付テハ運送營業者ニ於テ自己ノ過失ニ原因セサル事ヲ立證スルニ非サレハ貨物引渡ノ義務ヲ免カレンス

第九章 賣買

第二節 供給契約

(參照)

供給契約ハ特約アルニ非サレハ物ヲ引渡スニ由テ所有權始メテ買主ニ移轉スルモノナレトモ物ヲ運送人ニ委託シタルノミニテハ未タ以テ賣主ノ所有權ヲ移轉スト云フヲ得ス

第十章 信用

第三節 寄託

(參照)

倉庫會社カ火災ニ因リ受託物品ヲ滅失シタルトキハ其火災ハ自己ノ過失ニ非サルコトヲ立證シ初メテ賠償ノ義務ヲ免カルコトヲ得

第十一章 保險

第一節 總則

商法 第一編 第九章 第二節 第十章 第三節 第十一章 第一節 一五七

二六	二	四七
二九	二	三四
二九	五	四七
二六	二	四七
二九	二	三四

○保險契約ヲ爲スニ際シ不實ノ告示ヲ爲シタル場合ニ於テ其事實ノ輕重ヲ較量シ保險契約ノ效力如何ヲ判定スヘキハ當事者間ニ其特約ナキ場合ニ限ルモノトス

第二節 火災及ヒ震災ノ保險

(參照)

被保險者ハ若シ火災防禦ノ手段ヲ盡サルトキハ保險金ヲ受領スルノ權ヲ失フモノタルコトハ保險規則ノ條文ニ於テ明カナリ則チ本訴ノ曲直ヲ定ムルニハ先ツ上告人ニ於テ火災ノ當時被保險物ニ防禦ノ手段ヲ盡サリシハ果シテ怠慢ニ出テタルヤ否ヲ確定セサルヘカラス否ラサレハ該則ノ制裁ヲ受クヘキモノナルヤ否ヲ判然セサル筈合ナルニ原院ハ直チニ該則ノ制裁ヲ受クヘキモノトシタルハ不法ノ裁判ナリ

第五節 生命保險、病傷保險及ヒ年金保險

(參照)

生命保險契約ハ財産上ノ關係ナシト雖モ親屬故舊ノ因由情誼ヨリ甲者乙者ノ爲メニ保險金ノ義務ヲ負擔スルハ法律ノ禁スル所ニ非サルヲ以テ保險金負擔者ト被保人ト其人ヲ異ニスレハトテ公安ヲ害スルモノトシテ無効ト論斷スルコトヲ得ス

第十二章 手形及ヒ小切手

總則

○送金手形カ所持人證券ナル場合ニ在テハ縱令之ヲ讓渡シタル者ト支拂人トカ相互ニ債權者アリ債務者アリシコトアルモ法律上相殺ヲ以テ第三者タル所持人ニ對抗シ得ルトスルニ於テハ取引上ノ信用ヲ害シ融通ヲ妨クルコト必然ナリ則チ法律ニ於テ明カニ之ヲ許サル限ハ第三者タル所持人ニ對抗スルヲ得ルカ如キ相殺ハ生セサルモノトセサルヲ得ス

○送金手形カ所持人證券ナルトキハ其手形ヲ支拂フヘキ者ニ告知ヲ爲シ又ハ其承諾ヲ得ルカ如キ手續ヲ要セサルハ論チ竣タヌ況ヤ「コルレスボンデンス」ノ契約アルニ於テチヤ抑「コルレスボンデンス」ノ契約ハ其當事者タル銀行ノ一方ヨリ他ノ一方ニ對シ手形ヲ受取ルヘキ手形所持人ノ何人タルヲ問ハス其命令ニ從ヒ支拂ヲ爲スヘシトノ契約ニ外ナラス

○手形ハ要式證券ナルヲ以テ無期限ノ延期手形ト云フ如キ不完全ノモノニハ手形ノ名稱ヲ附與スルコトヲ得ス手形トシテハ手形面ニ記入アル支拂期日ノ延期ヲ許スコトヲ得ス當事者間ノ合意ヲ以テ約束手形面ノ支拂期日ヲ延期セシコトノ事實ヲ認メタル上ハ普通法ニ依テ其合意ヨリ生スル所ノ責任如何ヲ判定セサルヘカラス

三
八
一

三
〇
四三

三
二
四

三
〇
二七

三
〇
二七

三
〇
二〇

○約束手形ノ但書ニ「本件金額ハ某銀行拙者當座勘定ヨリ支拂可申候也」ト記載セル文言ハ手形所持人ニ一ノ便利ヲ與ヘタルニ過キサレハ商法ニ所謂重要ナラサル附記ト看做スヘキモノトス

○約束手形成立ノ後別ニ契約ヲ以テ満期日ヲ定メタルトキハ手形面ノ満期日ハ外觀ノ爲メニノミ記入シタルモノトナリ其約束手形ハ商法第七百二條ノ規定ニ依リ其情ヲ知リタル者ニ對シテ手形ト看做スヘキモノニ非ス

○差圖證券ノ債務者ハ其證券ニ記載シタル事項又ハ其證券ヨリ當然生スル抗辯ニ由ルニ非サレハ其債權者ニ對抗スルヲ得ス

○有效ノ手形ハ融通證券ナルヲ以テ當然合法ノ原因ヲ含有スルモノト推定セラレ之ニ署名捺印シタル者ヲシテ其手形上ノ文言ニ從ヒ責任ヲ負ハシムルノ效力アリト雖モ失效ノ手形ニ至リテハ唯其所持人ヲシテ支拂人振出人又ハ裏書讓渡人ニ對シ此等ノ者カ支拂ハサリシ爲替資金若クハ取戻シタル爲替資金ニ因リ己ヲ利シタル限度ヲ特ニ證明シタル上其限度内ニ於テノミ償還請求ヲ爲スヲ得セシムルコトハ舊商法ノ規定スル所ナリトス

○時効ニ因リ約束手形上ノ請求權ヲ失ヒタル者ハ其爲替權利ヲ失ヒタル

ニ拘ハラス振出人カ爲替資金ニ因リ不當ニ己ヲ利シタル限度ニ於テ不當利得ノ取戻ヲ請求シ得ヘキモ振出人ハ常ニ其手形面ノ金圓ヲ利得シタルモノト推定スヘキニ非ス

第一節 爲替手形

第一款 振出

○舊商法第八百一十一條第一ニ所謂振出ノ場所トハ市町村等一定ノ區域ヲ指稱スルモノナルカ故ニ其手形カ何レノ市町村等ニ於テ振出サレタルモノナルヤ一定シ居レハ足レルモノニシテ大字等ノ如キハ敢テ之ヲ記載スルノ要ナシ

(同三三)

舊商法第八百一十一條ニ所謂振出ノ場所トハ市町村等一定ノ區域ノ謂ニシテ市町村内ノ區町字等ノ謂ニ非ス故ニ單ニ東京市内ノ區名ヲ記シタル手形ハ振出ノ場所ヲ記載セサル手形ニシテ無効ナリ

第二款 裏書

○手形ニ裏書讓渡人ノ住所記載ナキトキハ其裏書讓渡人ト裏書讓受人トノ間ニ讓渡ノ效ナキニ止マリ其瑕疵ハ手形ノ效力ニ影響ヲ及ホスモノニ非ス

二元	三四	三四	三五
一一	一	三	五
一六	一三	三〇	二二

三	三	三〇	二九
五	四	八	二
六	六	一	七

○舊商法第七百二十五條ニ依レハ裏書讓渡人ノ署名捺印ノミニテ裏書讓渡ヲ爲シタル手形ハ爾後交付ノミナリ以テ轉付スルコトヲ得ヘキモノナリ故ニ此手形ニ付キ再三裏書人ノ署名捺印ノミナリ以テ爲シタル裏書讓渡ヲ有效ト認メタル判決ハ相當ナリ

○民法第四百二十三條舊商法第七百六十五條同第四百條及ヒ民法第四百七十條ハ約束手形ノ讓受人カ讓渡人ヲ強迫シ裏書讓渡ヲ爲サシメタルヲ原因トシテ而カモ其手形ノ振出人ヨリ讓渡人ト讓受人トニ對シ讓受渡ノ取消ヲ求ムル場合ニ適用スヘキ法條ニ非ス

○舊商法ニ依レハ手形ノ裏書ニハ二種アリテ其第一種ハ年月日場所裏書讓渡人ノ署名捺印及ヒ裏書讓受人ノ氏名アルコトヲ要シ第二種ハ裏書讓渡人ノ署名捺印ノ外ニ裏書讓受人ノ氏名ヲ記載シタル手形ハ第一種ノ裏書トシテ無効ナルノミナラス第二種ノ裏書トシテモ其效ヲ有セス

○舊商法第七百二十四條ハ裏書ノ日附ハ裏書讓渡合意ノ日ヨリ前ノ日附ト爲スコトヲ得サル旨ヲ規定シタルモノニシテ必スシモ手形交付ノ日ヨリ前ノ日附ト爲スコトヲ得スト爲シタルモノニ非ス

○舊商法第七百二十五條ノ法意ハ一度讓渡人ノ署名捺印ノミナリ以テ裏書

三二〇元

三七六元

三七五元

三三六元

讓渡ヲ爲シタル手形ハ特ニ通例ノ裏書若クハ讓渡人ノ署名捺印ノミナリ以テスル裏書ノ方法ニ依ラスシテ交付ノミナリ以テ讓渡スルコトヲ得ヘシトノ趣旨ニシテ讓渡ノ方法ヲ交付ノ一事ニ限定シタルモノニ非ス

第六款 支拂

○舊商法ニハ縱令新商法第四百六十一條及ヒ第四百六十四條但書ノ規定ト同一ナル明文ナシト雖モ讓渡人ノ署名捺印ノミナリ以テ裏書讓渡シタル手形ノ所持人ハ自己ヲ被裏書人ト爲スコトヲ得ルノミナラス同種ノ裏書數次アル場合ニ於テハ後ノ裏書人ハ前ノ裏書ニ因リテ手形ヲ讓受ケタルモノト看做スヘキハ當然ナリ

第八款 償還請求

○手形ノ償還請求ニ付キ爲ス所ノ通知ハ民事訴訟法ニ依リ任命セラレタル特別代理人ニ爲スモ有效ナリトス

三四六元

三四六元

三七二元

二元五七五元

○裏書讓渡人ニ對シ爲スヘキ償還請求ノ通知ハ權利發生ノ條件ニ過キス
 シテ請求ノ原因ニ非ス故ニ二个ノ訴訟カ其償還請求ノ通知ヲ爲シタル
 日時ニ差異アルモ前訴後訴共ニ其請求ノ原因カ振出人ニ於テ支拂ヲ拒
 絶シタルニ因リ償還請求ヲ爲スニ在ルトキハ後訴ハ一事不再理ノ原則
 ニ反スル不當ノ訴訟ナリ

○手形所持人カ裏書讓渡人ニ對シ償還請求ヲ爲スニハ支拂拒證書ヲ作り
 タル日ノ翌日書面ヲ以テ其請求及ヒ拒證書作成ノ通知ヲ爲スコトヲ要
 ス又拒證書作成ノ義務免除ノ場合ニ於テハ拒證書ヲ作ルヘキ日ノ翌日
 書面ヲ以テ償還請求ノ通知ヲ爲スコトヲ要ス

○手形上ノ償還請求ハ所持人ニ在テハ拒證書ヲ作りタル日ノ翌日裏書讓
 渡人ニ在テハ通知書ヲ受取りタル日ノ翌日其請求及ヒ支拂拒證書作成
 ノ通知ヲ爲スニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

○約束手形支拂滿期日ニ於テ拒證書ノ作成及ヒ償還請求ノ通知ヲ發シタ
 ル以上ハ爾後該手形ノ所持人ニ於テ振出人ニ對シ一時支拂ノ猶豫ヲ與
 フルモ之ヲ以テ手形上ノ權利義務ノ關係ヲシテ民事上ノ權利義務ノ關
 係ニ變更シタルモノト謂フヲ得ス

○舊商法ニ於テ手形ノ裏書讓受人ハ支拂期日後ニ其裏書讓渡ヲ爲シタル

各人ニ對シ償還請求權ヲ有ス

○手形所持人カ裏書讓渡人ニ對シ償還請求ヲ爲サント欲セハ必ス滿期日
 ニ支拂ノ爲メ之ヲ支拂人ニ呈示スルヲ要ス若シ其呈示ヲ爲サ、ルトキ
 ハ原因ノ如何ヲ問ハス償還請求ノ權ヲ喪失スルコトハ舊商法ノ法意ナ
 リ

○凡ソ手形ハ例外ノ場合ヲ除クノ外ハ縱令契約者間ノ目的如何又ハ權義
 ノ起因如何ニ拘ハラス專ラ手形面ニ記載セラレタル文詞ニ依リテ直接
 ニ其效力ヲ生セシムヘキモノトス從テ償還請求ノ通知モ亦手形上ニ記
 載セラレタル裏書讓受人タル所持人ニ於テ舊商法第七百八十三條ノ規
 定ニ基キ之ヲ爲スニ非サレハ其效力ヲ有セサルモノトス

○手形權利者カ裏書人ニ對シ既ニ適法ニ償還請求權ヲ得タル上ハ其後ニ
 至リ縱令振出人ニ對シ支拂猶豫ヲ與フルコトアリトスルモ之カ爲メ振
 出人ニ對シテハ格別裏書人ニ對シテ其既ニ得タル償還請求權ヲ失フヘ
 キモノニ非ス

○舊商法第七百八十六條ニ依リ償還ヲ請求シ得ヘキ利息金ハ付遲滯ノ手
 續ヲ要セス滿期ノ翌日ヨリ起算シタル年百分ノ十ノ利息ヲ請求シ得ヘ
 キモノトス

三三	三三	三三	三三	三三
七	七	六	六	五
二	二	二七	六〇	六一

- 舊商法第七百八十一條ニ於ケル償還請求通知ノ日カ一般ノ休日ニ當ルモ必ズ其日ニ於テ之カ通知ヲ爲サハルヘカラス
- 舊商法ニ於ケル拒證書作成義務ノ免除ハ其作成ニ直接ノ關係ヲ有スル義務ノミヲ免除スルニ過キスシテ之ニ關係ヲ有セサル他ノ手續上ノ義務ヲモ免除スルモノニ非ス
- 拒證書作成ノ義務ヲ免除シタル者ノ後者カ免除者ニ對シ償還請求ヲ爲スニハ拒證書ヲ作成スヘキ業日ノ次日ニ償還請求ノ通知ヲ爲サハルヘカラス

(參照)

手形裏書人ニ對スル償還ノ要求ハ支拂ノ請求ト其場合異ナルヲ以テ拒證書ノ作製ヲ要スル規定モナク隨テ嚴格ナル手續ニ依ラサルモ現ニ本人又ハ本人ノ住所ニ就キ要求ヲ爲シタルコトヲ認めヘキ確證アレハ其效アルモノトス

第二節 約束手形

- 約束手形ノ裏書カ無效タルトキハ其讓渡ノ效ナキニ止マリ其手形ハ依然效力ヲ保有シ未ダ裏書ヲ爲サハル原狀ニ復スヘキモノトス
- 約束手形ハ其裏書讓渡ノ方式ニ違背シタルカ爲メ手形タルノ效力ヲ失ハス

三六	二六	三四	三四	三六
一〇	二	一〇	一〇	六
一	一一	一	一	五
二九	二九	四	四	二七
四	二七	二七	二七	二七

- 手形ニ其振出ノ場所ヲ記載セザルトキハ手形トシテ效力ナシ
- 手形振出ノ場所ハ其町村番地等詳細ニ明示スルヲ要セス其何レノ場所ニ於テ振出シタルヤヲ知リ得レハ充分ナリトス
- 約束手形ノ所持人カ其満期日ニ當リ振出人ニ對シ支拂ノ猶豫即チ恩惠期日ヲ承諾スルハ公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ反スルモノニ非サルニ依リ其支拂猶豫ノ契約ハ當事者間有效ナリ
- 手形所持人ト振出人ノ間ノ支拂猶豫ノ契約ハ其當事者間ニ於ケル手形上ノ權義關係ヲ變シテ民事上ノ權義關係ヲラシムル效果ヲ生ス
- 約束手形ノ所持人ハ其振出人ニ對シテハ時効ノ經過セサル間ハ何時ニテモ其支拂ヲ求ムルコトヲ得ヘシ
- 舊商法第八百一十一條第五號ノ所謂振出人ノ署名トハ振出人ノ氏名又ハ商號ヲ書スルヲ謂ヒシモノト解釋スルヲ相當トス
- 無記名式ノ約束手形ニシテ所持人ニ支拂フヘキ旨ノ記載ナキハ適式ノ手形ニ非ス
- 約束手形ノ振出地ハ法律上一定シタル地域ニシテ事實上ノ問題ニ非ス
- 數人同一ノ約束手形ヲ振出スモ其振出シタル手形ハ一行爲ヲ爲スニ過ス

二九	二九	三三	三三	三三	二九	二九
二	二	一〇	一〇	一〇	二	二
一六	一六	四	四	四	一六	一六
三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
七三	七三	七三	七三	七三	七三	七三
四	四	四	四	四	四	四
二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七
二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七

キスシテ各振出人ニ於テ各別箇ノ手形ヲ作成シタルモノト看做スヘキニ非ス唯其手形ニ依リ各自獨立ノ債務ヲ負擔スルノミ故ニ其手形ノ記載要件ニ欠缺アル場合ニ於テハ總振出人ニ對シ要件欠缺アルモノト謂ハサルヲ得ス

(參照)

約束手形振出入ト直接ニ之ヲ受ケタル者トノ間ニ於テハ「合法ノ原因ハ當然券面ニ包含スルモノナリ」ト云フ手形上ノ原則ハ之ヲ適用スルコトヲ要セス債權成立ノ原因ニ依テ權利義務ヲ定ムヘシ

現金ヲ以テ授受スヘキ賣買代價ノ一部ニ對シ授受シタル約束手形ノ支拂期日カ物品授受ノ期日以前ニ係リ受取人之ヲ他ヘ流通セサル場合ニ在テハ法理上一概ニ現金ヲ授受セシト同視スルヲ得サルモノトス

第二編 海商

第二章 船舶所有者

(參照)

船舶所有主ハ他ニ法律ノ規定ナキ限りハ船長ノ行爲ニ付キテハ代理法ニ基キ其責任ヲ負擔セサルヘカラス

自己ノ過失ニ對スル責任ハ契約ヲ以テ免カルコト能ハサルモノトス故ニ船舶所有主カ船長

三四	一〇	二九
三五	一	一〇
三五	五	九三
二六	二	一五二

即チ代理人ニ過失アルコトヲ認メナカラ他ノ契約ニ依リテ其責任ヲ免カルコトヲ得ス船長ノ試験規則ハ船長ノ行爲ニ付キ船主ノ責任有無ヲ論スル場合ニ援引スルコトヲ得ス船主ハ船長ノ職務履行上生シタル過失ニ付キ第三者ニ對シ其責任ヲ負フモノトス船舶沈没ノ爲メ生シタル損害ニ對シ船主ニ於テ其船舶限り賠償ノ責任ヲ負フヘキコトハ顯著ナル慣例ナリ

第四章 船長及ヒ海員

第一節 船長

(參照)

船長カ船主ノ委任ヲ受ケスシテ船主代理ノ名義ヲ用ヒ第三者ヲシテ船中ノ需用品ヲ供給セシムルノ契約ヲ爲シタルハ本件ノ場合ニ於テハ越權ニ屬ス無期限ニテ雇傭契約ヲ締結シタル以上ハ經令船舶カ航海不能トナリ雇人タル船長其職務ヲ行フコト能ハサルモ契約ニ基ク權利義務ハ直チニ消滅スルモノニ非ス

第五章 運送契約

第一節 船舶貸借契約

(參照)

積荷ノ喪失ニ付キ荷主ニ對スル賠償責任如何ノ問題ニ於テ明治二十五年法律第五號ヲ適用セントノ論擬ハ其當ヲ得サルモノトス

二六	二	一五二
二九	一〇	二二
二九	一〇	二二
二九	一〇	二二
二九	一〇	二二
二九	一〇	二二
二八	〇	一三三

第二節 船荷證書

(參照)

船荷證書ハ裏書ニ依リ自由ニ轉讓シ得ヘキ流通ノ性質ヲ有スルモノナレハ證書所持人ハ何時ニテモ其貨物ノ引渡ヲ求ムル權利ヲ有ス
船主カ船荷證書ト引換ニ渡スヘキコトヲ約シタル貨物ヲ其約ニ背キ他ニ交付シタルトキハ荷主ハ船荷證書ノ所持人ニ對シ未タ貨物ノ引渡ヲ爲ササル地位ニアルヲ以テ之カ責ハ免カラルヲ得ス從テ其貨物ノ換價格ハ荷主ノ損害トナリタルモノト看做スヘキモノトス

第四節 旅客運送

(參照)

汽船ノ乗客カ汽船仲次營業者ノ報知ニ依リ發航日時ヲ信用スルハ普通ノコトナレハ之カ爲メ懈怠ノ責ヲ生セス

第六章 海損

(參照)

原裁判カ海損ノ慣例ヲ認メテ船主ノ責任無限ナラサルコトヲ判定シタルハ本院カ議キニ與ヘタル判決責任ノ有限ナルコトハ條理上當然然ルモノニ非スレテ躊躇シタリト云フヲ得ス

第八章 保險

第二節 保險者及ヒ被保險者ノ權利義務

○海上保險者ハ特約ヲ取結フニ非サレハ航海ニ關スル不測ノ事故ニ因リ

テ生スル一切ノ損害ヲ填補スルノ責任ヲ負擔スヘキモノトス

○被保險物ノ性質瑕疵若クハ荷造ノ不完全ヨリ生シタル損害ノ如キハ航海ニ關スル不測ノ事故ヨリ生シタル損害ニ非サルヲ以テ海上保險者ノ負擔ニ屬スヘキモノニ非ス

○船舶ヲ保險ニ付シタル場合ニ於テ其保險金ハ乗客若クハ荷主ニ對スル損害ノ賠償ニ充テシムヘキモノトス

第三編 破産

第一章 破産宣告

○商法第九百七十八條第一項ハ破産者トシテ宣告セラレタル債務者カ其決定ニ對シ抗告シ得ル規定ニシテ債權者カ申請ヲ却下セラレタル場合ニ適用スヘキモノニ非ス〔同一判例二八年五四二頁〕

○民事訴訟法第四百五十五條ノ規定ハ商法破産ニ關スル訴訟手續ニ準用スヘカラス

○商法第九百七十八條ハ債務者カ破産者トシテ宣告セラレタルトキ其決定ニ對シ抗告ヲ爲スヲ得ルノ規定ニシテ債權者カ破産宣告ノ申請ヲ却

三二	三一	三五
三二	三二	三五
三三	三六	四〇
二六	三三	三三
二六	三三	三三

下セラレタル場合ニ適用スヘキモノニ非ス〔同一判例二九年一〇卷一
五七頁〕

○支拂停止ノ事實アル以上ハ其支拂ヲ停止セラレタル債權者ト他ノ債權
者ト共同シテ破産宣告ノ申請ヲ爲スヲ得ルモノトス

○約束手形ニ付キ督促手續ニ依リ支拂命令ヲ發シタル場合ニ於テハ其命
令ノ送達ヲ遂ケタル時ニ於テ支拂ノ請求アリタルモノト認メ而シテ右
命令記載ノ期間經過後仍ホ支拂ヲ爲サ、ル時ニ於テ支拂ノ停止アリタ
ルモノト認ムヘキモノナリ

○破産事件ニ付テハ商法及ヒ商法施行條例ニ特ニ民事訴訟法ノ規定ニ依
ルヘキ旨ノ明文アルモノ、外同法ノ規定ヲ適用スヘキモノニ非ス

○商取引ヨリ生シタル債權ト雖モ民事上ノ請求トシテ訴ヲ提起シ其結果
強制執行ヲ爲スニ當リ債務者カ辨濟ヲ爲スコト能ハサルカ如キハ商
爲スニ當リテ支拂ヲ停止シタルモノト云フヲ得ス

○破産宣告ノ申立ヲ却下シタル裁判ニ對シテハ抗告ヲ許スノ規定ナシ
〔同一判例二八年四卷一〇二頁、三二年六卷五一頁〕

○手形ハ單ニ満期日ニ支拂ヲ拒絶シタルノミヲ以テ支拂停止ト看做スヘ
キモノニ非ス

三〇	五	三	七	三	七	三
三二	九	三	七	三	八	三
三三	二	三	七	三	六	三
三三	二	三	七	三	六	三

○破産決定ノ申請ニ對シ債務者ハ債權者ニ對シテ有スル債權ト相殺セシ
コトヲ求メタルカ爲メ支拂ヲ爲サ、リシモノニシテ支拂ヲ停止シタル
モノニ非ストノ抗辯ヲ提出スルコトヲ得

○商法第九百七十八條第二項末段ノ規定ハ破産ノ宣告ナルト申立ノ却下
ナルトナ間ハス汎ク破産宣告ノ申立ニ關スル裁判ニ對シテ即時抗告ヲ
許スノ法意ナリ

(同三三)

商法第九百七十八條第二項ニ所謂此裁判中ニハ破産宣告ノ申立ヲ却下シタル裁判ナルト破産
ヲ宣告シタル裁判ナルトナ間ハス總テ之ヲ包含スルモノトス

○破産宣告ノアリタル後ニ至リ破産宣告申立ノ取下ヲ爲シタリトテ其既
ニ爲シタル破産宣告ヲ取消スヘキモノニ非ス

○支拂停止トハ支拂ヲ停ムルノ意義ニシテ單ニ期日ニ支拂ヲ爲サ、リシ
事實ノミニテハ未ダ以テ支拂ヲ停止シタリト爲スヲ得ス

○破産裁判所ハ單ニ債務者カ支拂ヲ停止シタルヤ否ヲ判斷シ得ルニ止マ
リ債權ノ有無及ヒ其成立原因等ヲ審判スルノ職權ヲ有セス

(同三四)

破産宣告ニ關スル事件ハ其性質非訟事件ナルカ故ニ破産裁判所ハ債務者カ支拂ヲ停止シタル

三三	二	三	三	三	三	三
三三	二	三	三	三	三	三
三三	二	三	三	三	三	三
三三	二	三	三	三	三	三

ヤ否ヤテ審理スルニ止マリ其申請ノ基本タル債權ノ存否ヲ判斷スヘキモノニ非ス

○商法ニハ破産ノ決定ニ付テハ抗告ヲ爲スヲ得ヘキ規定アルモ其辯論中止ノ申請ヲ却下シタル裁判ニ付テハ商法及ヒ商法施行條例中抗告ヲ許ス規定アルコトナシ

○破産裁判所ニ於テ破産事件ノ口頭辯論中ニ言渡シタル證據決定ニ對シテハ抗告スルヲ得ス

第二章 破産ノ效力

○破産ノ宣告ハ其宣告後ニ在リテ最初破産ノ申立ヲ爲シタル債權者カ其申立ノ取下ヲ爲シタリトモ他ノ債權者ニ對シテ影響ヲ生スルモノニ非ス

○舊商法第九百九十條ニ所謂從來負擔シタル債務トアル中ニハ民法第五百八十八條ノ如キ法律ノ擬制ヲ以テ消費貸借ト看做スヘキモノト雖モ事實從來負擔セル債務ナル以上ハ總テ之ニ包含スルモノトス

○舊商法第九百九十條ノ規定ハ破産ノ場合ニ於ケル特別ノ制裁ニシテ支拂停止後又ハ支拂停止前三十日以内ニ爲シタル行爲ハ受益者カ他ノ債權者ヲ害スル事實ヲ知ルト否トヲ論セス法律上總テ之ヲ知レルモノト

看做シ當然無効タルヘキモノト爲シタルナリ

第五章 財團ノ管理及ヒ換價

○商法第一千九條第二項ニ「管財人ハ左ニ掲クル行爲ニ付テハ破産主任官ノ認可ヲ受クヘシ第一訴訟ヲ爲スコト」ト記載アルノミニ付キ管財人カ最初訴訟ヲ提起スルニ當リ破産主任官ノ認可ヲ受クルヲ以テ足り上訴ヲ爲シ又ハ其相手人ト爲ル場合ニハ再ヒ其認可ヲ求ムルノ必要ナキモノトス

第六章 債權者

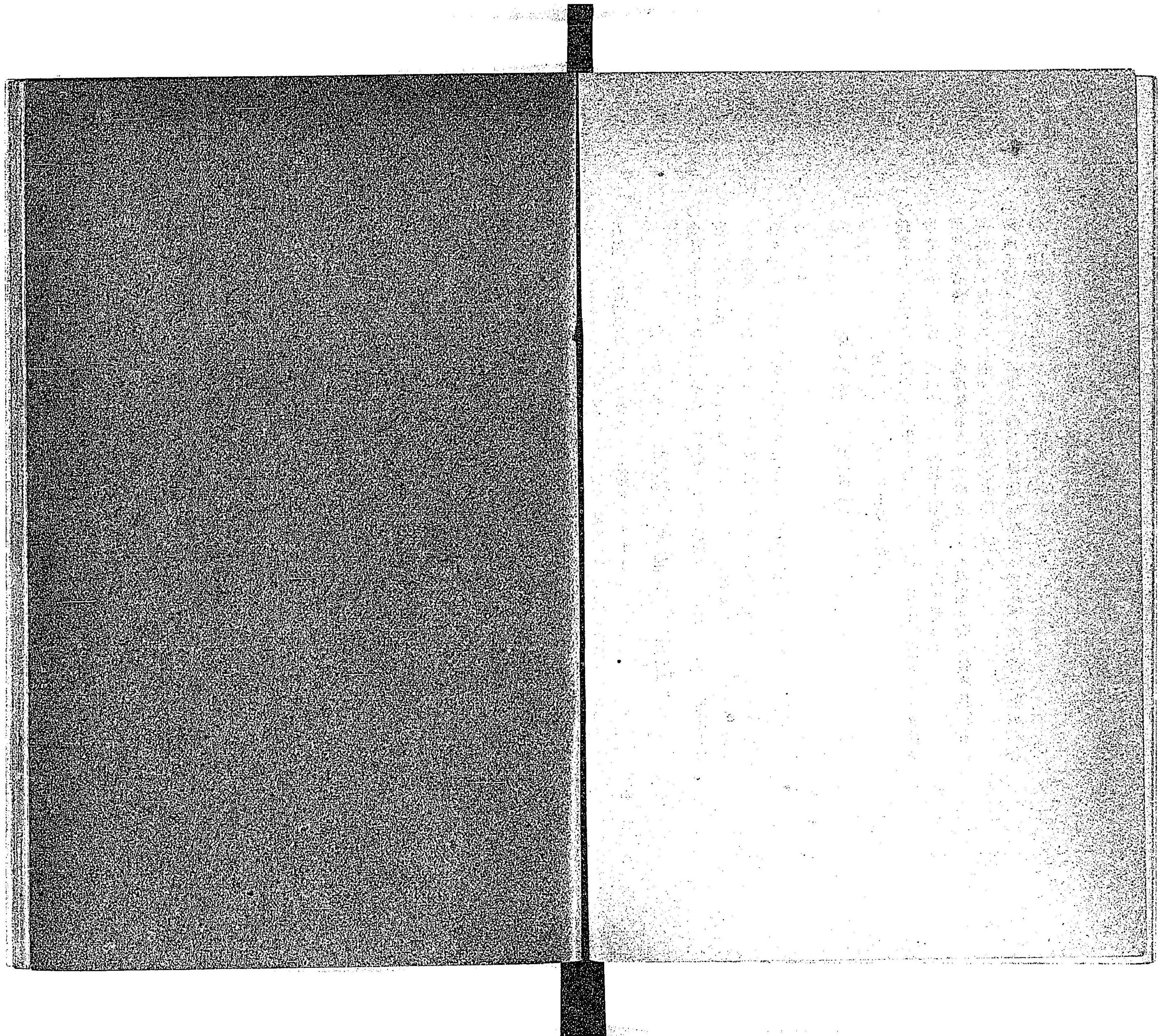
第一節 債權ノ届出及ヒ確定

○破産者ノ債權者カ債權ノ申出ヲ爲シタルニ對シ破産管財人ヨリ異議ヲ申立テタル場合ニ其申立ニハ訴訟用印紙ノ貼用ヲ要セス

○債權調査會ニ於テ破産管財人ヨリ申立テタル異議ニ關シ破産裁判所カ其當否ヲ裁判スル如キハ商事非訟事件ニ屬ス

○破産手續ニ付テハ債權ニ對スル異議ニ原因シテ其争ノ判斷ヲ受クル場合ニ印紙ヲ貼用セシムヘキ規定ナシ

三四	三	八二
三三	九	一〇三
三二	一〇	八二
三一	二	五三
三〇	二	五三
二九	二	五三
二八	二	五三
二七	二	五三
二六	二	五三
二五	二	五三
二四	二	五三
二三	二	五三
二二	二	五三
二一	二	五三
二〇	二	五三
一九	二	五三
一八	二	五三
一七	二	五三
一六	二	五三
一五	二	五三
一四	二	五三
一三	二	五三
一二	二	五三
一一	二	五三
一〇	二	五三
九	二	五三
八	二	五三
七	二	五三
六	二	五三
五	二	五三
四	二	五三
三	二	五三
二	二	五三
一	二	五三



民事訴訟法

民事訴訟法

第一編 總則

第一章 裁判所

第一節 裁判所ノ事物ノ管轄

第一條 裁判所ノ事物ノ管轄ハ裁判所構成法ノ規定ニ從フ

第二條 訴訟物ノ價額ニ依リ管轄ノ定マルトキハ以下數條ノ規定ニ從フ

第三條 訴訟物ノ價額ハ起訴ノ日時ニ於ケル價額ニ依リ之ヲ算定ス

果實、損害賠償及ヒ訴訟費用ハ法律上相牽連スル主タル請求ニ附帶シ一ノ訴ヲ以テ請求スルトキハ之ヲ算入セシ

第四條 一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲ストキハ前條第二項ニ掲クルモノヲ除ク外其額ヲ合算ス

本訴ト反訴トノ訴訟物ノ價額ハ之ヲ合算セシ

第五條 訴訟物ノ價額ハ左ノ方法ニ依リ之ヲ定ム

- 第一 債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權力訴訟物ナルトキハ其債權ノ額ニ依ル但物權ノ目的物ノ價額算キトキハ其額ニ依ル
- 第二 地役力訴訟物ナルトキハ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ニ依ル但地役ノ爲

メ承役地ノ價額ノ減シタル額カ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ヨリ多キトキハ其減額ニ依ル

第三 貸貸借又ハ永貸借ノ契約ノ有無又ハ其時期カ訴訟物ナルトキハ等アル時期ニ當ル借貸ノ額ニ依ル但一ノ年借貸ノ二十倍ノ額カ右ノ額ヨリ寡キトキハ其二十倍ノ額ニ依ル

第四 定時ノ供給又ハ收益ニ付テノ權利カ訴訟物ナルトキハ一ノ年收入ノ二十倍ノ額ニ依ル但收入權ノ期限定マリタルモノニ付テハ其將來ノ收入ノ總額カ二十倍ノ額ヨリ寡キトキハ其額ニ依ル

第六條 訴訟物ノ價額ハ必要ナル場合ニ於テハ第三條乃至第五條ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム

裁判所ハ申立ニ因リ證據調ヲ命シ又ハ職權ヲ以テ檢證若クハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第七條 地方裁判所ノ判決ニ對シテハ其事件カ區裁判所ノ事物ノ管轄ニ屬ス可キ理由ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

○第一審ニ於テ本案ノ裁判ヲ受ケタル以上ハ其事件カ區裁判所ノ事物ノ管轄ニ屬スヘキモノナリトノ理由ヲ以テ更ニ上訴スルコトヲ許サス

(同法第)

事物ノ管轄ニ就テハ民事訴訟法第七條ニ於テ地方裁判所ノ管轄ナリトノ判決ニ對シテハ區裁判所ノ管轄ニ屬スヘキ理由ヲ以テ不服ヲ申立ルコトヲ許サス控訴院ノ同一ナル判決ニ對シテモ亦然リ

第八條 事物ノ管轄ニ付キ區裁判所又ハ地方裁判所カ管轄違ナリト宣言シ其裁判確定シ

三六
二六
一七〇

タルトキハ此裁判ハ後ニ其事件ノ繫屬ス可キ裁判所ヲ羈束ス

第九條 地方裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ原告ノ申立ニ因リ同時ニ判決ヲ以テ原告ノ指定シタル自己ノ管轄内ノ區裁判所ニ其訴訟ヲ移送ス可シ

區裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ同時ニ判決ヲ以テ其訴訟ヲ所屬ノ地方裁判所ニ移送ス可シ

移送ノ申立ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲ス可シ
移送言渡ノ判決確定シタルトキハ其訴訟ハ移送ヲ受ケタル裁判所ニ繫屬スルモノト看做ス

第二節 裁判所ノ土地ノ管轄(裁判籍)

第十條 人ノ普通裁判籍ハ其住所ニ依リテ定マル

普通裁判籍アル地ノ裁判所ハ其人ニ對スル總テノ訴ニ付キ管轄ヲ有ス但訴ニ付キ專屬裁判籍ヲ定メサル場合ニ限ル

第十一條 軍人、軍屬ハ裁判籍ニ付テハ兵營地若クハ軍艦定繫所ヲ以テ住所トス但此規定ハ豫備、後備ノ軍籍ニ在ル者及ヒ兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍屬ニ之ヲ適用セス

第十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使館ノ官吏並ニ其家族、從者ノ裁判籍上ノ住所ハ本邦ニ於テ本人ノ最後ニ有セシ住所ナリトス此住所ナキモノニ付テハ司法大臣ノ命令ヲ以テ豫メ定ムル東京内ノ區ヲ以テ其住所ナリトス

第十三條 内國ニ住所ヲ有セサル者ノ普通裁判籍ハ本人ノ現在地ニ依リテ定マル若シ其現在地ノ知レサルカ又ハ外國ニ在ルトキハ其最後ニ有セシ内國ノ住所ニ依リテ定マル

然レトモ外國ニ住所ヲ有スル者ニ對シテハ內國ニ於テ生シタル權利關係ニ限リ前項ノ裁判籍ニ於テ訴ヲ起スコトヲ得

第十四條 國ノ普通裁判籍ハ訴訟ニ付キ國ヲ代表スル官廳ノ所在地ニ依リテ定マル但訴訟ニ付キ國ヲ代表スルニ付テノ規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

公及ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘラルルコトヲ得ル會社其他ノ社團又ハ財團等ノ普通裁判籍ハ其所在地ニ依リテ定マル此所在地ハ別段ノ定ナキトキハ事務所所在ノ地トス若シ事務所ナキトキ又ハ數所ニ於テ事務所ヲ取扱フトキハ其首長又ハ事務擔當者ノ住所ヲ以テ事務所ト看做ス

第十五條 生徒、雇人、營業使用人、職工、習業者其他性質上一定ノ地ニ永ク寓在ス可キ者ニ對スル財産權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其現在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍屬ニ對シテハ其兵營地若クハ軍艦定醫所ノ裁判所ニ前項ノ訴ヲ起スコトヲ得

第十六條 製造、商業其他ノ營業ニ付キ直接ニ取引ヲ爲ス店舗ヲ有スル者ニ對シテハ其店舗所在地ノ裁判所ニ營業上ニ關スル訴ヲ起スコトヲ得

前項ノ裁判籍ハ住家及ヒ農業用建物アル地所ヲ利用スル所有者、用益者又ハ賃借人ニ對スル訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス但此訴カ地所ノ利用ニ付テノ權利關係ヲ有スルトキニ限ル

○民事訴訟法第十六條ハ特別ノ裁判籍ヲ規定シタルニ止マリ猶豫期間ニ關スル規定ニハ關係ナシ

第十七條 內國ニ住所ヲ有セサル債務者ニ對スル財産權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其財産又

ハ訴ヲ爲シテ請求スル物ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得債權ニ付テハ債務者(第三債務者)ノ住所ヲ以テ其財産ノ所在地トス又債權ニ付キ物カ擔保ノ責ヲ負フトキハ其物ノ所在地ヲ以テ財産ノ所在地トス

第十八條 契約ノ成立若クハ不成立ノ確定又ハ其履行若クハ銷除、廢罷、解除又ハ其不履行若クハ不十分ノ履行ニ關スル賠償ノ訴ハ其訴訟ニ係ル義務ヲ履行ス可キ地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

○民事訴訟法第十八條ニ所謂契約解除ノ訴トハ單ニ契約ノ解除ヲ求ムル訴ノミヲ謂フニ非スシテ契約ヲ解除シタル結果原狀ニ回復スルコトヲ求ムル訴ヲモ包含スルモノトス

第十九條 會社其他ノ社團ヨリ社員ニ對シ又ハ社員ヨリ社員ニ對シ其社員タル資格ニ基ク請求ノ訴ハ其會社其他ノ社團ノ普通裁判籍アル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十條 不正ノ損害ノ訴ハ責任者ニ對シ其行爲ノ有リタル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十一條 辯護士又ハ執達吏ノ手数料及ヒ立替金ニ付キ其委任者ニ對スル訴ハ訴訟物ノ價額ノ多寡ニ拘ハラズ本訴訟ノ第一審裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十二條 不動産ニ付テハ其所在地ノ裁判所ハ總テ不動産上ノ訴殊ニ本權並ニ占有ノ訴及ヒ分割並ニ經界ノ訴ヲ專ラニ管轄ス
地役ニ付テノ訴ハ承役地所在地ノ裁判所專ラニ之ヲ管轄ス

○官有地借地加名願書ニ調印ヲ請求スルハ行爲ノ履行ヲ求ムル人權ノ訴

ニシテ民事訴訟法第二十二條ニ所謂不動産上ノ訴ニ非ス

第二十三條 不動産上ノ裁判籍ニ於テハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權ニ基ク不動産上ノ訴ニ附帶シテ同一被告ニ對スル債權ノ訴ヲ起スコトヲ得

不動産上ノ裁判籍ニ於テハ不動産ノ所有者若クハ占有者ニ對スル人權ノ訴又ハ不動産ニ加ヘタル損害ノ訴ヲ起スコトヲ得

○伐採木材ノ運搬ヲ差留メ其運搬ニヨリ更ニ受クヘキ損害ヲ防止セントスル訴ハ不動産上ノ裁判籍ニ提起スヘキモノトス

第二十四條 相続權、遺贈其他死亡ニ因リテ效果ヲ生スル處分ニ基ク請求ノ訴ハ遺產者死亡ノ時普通裁判籍ヲ有セシ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

相続裁判籍ニ於テハ遺產債權者ヨリ遺產者又ハ相続人ニ對スル請求ノ訴ヲ起スコトヲ得但遺產ノ全部又ハ一分方其裁判所ノ管轄區内ニ存在スルトキニ限ル

第二十五條 第二十二條ノ規定ヲ除ク外原告ハ數箇ノ管轄裁判所ノ中ニ就キ選擇ヲ爲スコトヲ得

第三節 管轄裁判所ノ指定

第二十六條 管轄裁判所ノ指定ハ裁判所構成法ニ定メタル場合ノ外尙ホ不動産ノ裁判籍ニ訴ヲ起スコトキ場合ニ於テ不動産方數箇ノ裁判所ノ管轄區内ニ散在スルトキモ亦之ヲ爲ス

第二十七條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第十條ノ規定ニ從フ

二九 一〇 二六

二六 四 一〇六

第二十八條 管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ其申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

右裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ其申請ヲ決定ス 管轄裁判所ヲ定メタル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ合意

第二十九條 第一審裁判所ハ當然管轄權ヲ有セサルモ當事者ノ合意ニ因リ管轄權ヲ有ス但書面ヲ以テ合意ヲ爲シ且其合意力一定ノ權利關係及ヒ其權利關係ヨリ生スル訴訟ニ係ルトキニ限ル

第三十條 被告カ管轄違ノ申立ヲ爲サスシテ本案ノ口頭辯論ヲ爲ストキハ亦前條ト同一ノ效力ヲ生ス

第三十一條 左ノ場合ニ於テハ第二十九條及ヒ第三十條ノ規定ヲ適用セス

- 第一 財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ係ルトキ
- 第二 專屬管轄ニ屬スル訴ナルトキ

第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

第三十二條 判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除斥セラル可シ

- 第一 判事又ハ其婦カ原告若クハ被告タルトキ又ハ訴訟ニ係ル請求ニ付キ當事者ノ一方若クハ雙方ト共同權利者共同義務者若クハ償還義務者タル關係ヲ有スルトキ
- 第二 判事又ハ其婦カ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ
- 第三 判事カ同一ノ事件ニ付キ證人若クハ鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受クルトキ又ハ訴

設代理人タル任テ受ケルトキ若クハ受ケタルトキ又ハ法律上代理人ト爲ル權利ヲ有スルトキ若クハ之ヲ有シタルトキ

第四 判事カ不服ノ申立アル裁判ヲ前審又ハ仲裁ニ於テ爲スニ當リ判事又ハ仲裁人トシテ干與シタルトキ但此場合ニ於テ判事ハ受命判事又ハ受託判事トシテハ職務ノ執行ヨリ除外セラルルコト無シ

○第一審ノ口頭辯論ニ列席シタル判事ト雖モ其判決ニ干與シタルニ非サル限リハ第二審ニ於テ其職務ノ執行ヨリ除外セラルヘキモノニ非ス

○民事訴訟法第三十二條第四號ニ所謂前審トハ下級審ヲ指シタルモノニシテ同一審級ハ之ヲ包含セサルモノトス

(同審官)

民事訴訟法第三十二條第四號ニ所謂判事カ不服ノ申立アル判決ヲ前審又ハ云々トアルハ不服ノ申立アル裁判ニ下級審ニ於テ干與シタルヲ云ヒ上告ニ因リ破毀セラレタル事件ノ裁判ニ他ノ同級審ニテ干與シタル場合ノ如キハ此中ニ包含セサルモノトス

第三十三條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除外セラルルトキ及ヒ偏頗ノ恐アルトキハ總テノ場合ニ於テ各當事者ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得

偏頗ノ忌避ハ判事ノ不公平ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ事情アルトキ之ヲ爲スコトヲ得

○裁判官ノ命令指揮ニ過失アリトシ之ニ對シテ異議ヲ申立テ其判事自ラ之ヲ判斷スルトキハ勢ヒ其行爲ヲ過失トハ認メサルヘク其結果ハ民事

三六三
三四一〇
三五四

訴訟法ノ所謂偏頗ノ裁判ニ歸着スルノ恐アルカ故ニ之ヲ忌避スルヲ得ト論告スルハ甚々其當テ得ス抑同法ノ「偏頗ノ忌避ハ判事ノ不公平ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ事情アルトキ」トハ判事カ當事者ノ一方ニ親密ナルカ又ハ怨アルカ其訴訟ノ勝敗ニヨリ利害ノ關係アル場合等ヲ指シタルモノナリ

二七〇一〇

第三十四條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除外セラルル場合ニ於ケル判事ノ忌避ハ其訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルナ間ハス之ヲ爲スコトヲ得

偏頗ノ恐アル場合ニ於テハ原告若クハ被告其覺知シタル忌避ノ原因ヲ主張セスシテ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後ハ其判事ヲ忌避スルコトヲ得ス

第三十五條 忌避ノ申請ハ判事所屬ノ裁判所ニ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ説明スルコトヲ要ス忌避セラレタル判事ノ職務上ノ陳述ハ其説明ノ用ニ充ツルコトヲ得

原告若クハ被告カ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後其判事ニ對シ偏頗ノ忌避ヲ爲ストキハ忌避ノ原因其後ニ生シ又ハ之ヲ其後ニ覺知シタルコトヲ説明ス可シ

第三十六條 忌避セラレタル判事合議裁判所ニ屬スルトキハ其裁判所忌避ノ申請ヲ裁判ス但忌避セラレタル判事ハ其裁判ニ參與スルコトヲ得ス

若シ其裁判所右判事ノ退去ニ因リ決定ヲ爲スコト能ハサルトキハ直近上級ノ裁判所其

申請ヲ裁判ス

區裁判所判事忌避セラレタルトキハ上級ノ地方裁判所其申請ヲ裁判ス若シ區裁判所判事方忌避ノ申請ヲ正當ナリト爲ストキハ裁判ヲ要セス

第三十七條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得忌避セラレタル判事ハ先ツ申請ノ理由ニ付キ職務上意見ヲ述フ可シ

第三十八條 忌避ノ申請ヲ正當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス其申請ヲ不當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三十九條 忌避セラレタル判事ハ忌避申請ノ完結スルマテ總テノ行爲ヲ避ク可シ然レトモ偏頗ノ爲ニ忌避セラレタル判事ハ猶豫ス可カラサル行爲ヲ爲ス可シ

第四十條 忌避申請ノ管轄裁判所ハ其申請アラサルモ忌避ノ原因タル事情ニ付キ判事ヨリ申出アルトキ又ハ他ノ事由ヨリシテ判事法律ニ依リ除外セラレル疑アルトキモ亦裁判ヲ爲ス

此裁判ハ豫メ當事者ヲ審訊セスシテ之ヲ爲ス又其裁判ハ之ヲ當事者ニ送達スルコトヲ要セス

第四十一條 本節ノ規定ハ裁判所書記ニモ之ヲ準用ス但其裁判ハ書記所屬ノ裁判所之ヲ爲ス

第六節 檢事ノ立會

第四十二條 檢事ハ左ノ訴訟ニ付キ意見ヲ述フル爲メ其口頭辯論ニ立會フ可シ

第一 公ノ法人ニ關スル訴訟

第二 婚姻ニ關スル訴訟

第三 夫婦間ノ財産ニ關スル訴訟

第四 親子若クハ養親子ノ分限其他總テ人ノ分限ニ關スル訴訟

第五 無能力者ニ關スル訴訟

第六 養料ニ關スル訴訟

第七 失踪者及ヒ相續人虧缺ノ遺産ニ關スル訴訟

第八 證書ノ偽造若クハ變造ノ訴訟

第九 再審

檢事ノ陳述ハ當事者ノ辯論終リタルトキ之ヲ爲ス

當事者ハ檢事ノ意見ニ對シ事實ノ更正ノミニ付キ陳述ヲ爲スコトヲ得

○民事訴訟法第四十二條第八號ニ所謂「證書ノ偽造若クハ變造ノ訴訟」トハ同法第二百五十一條ニ依リ證書ノ眞否ヲ確定セシコトノ申立ヲ爲シ中間判決ヲ爲スヘキ場合ニ適用スヘキモノニシテ單ニ變造ノ抗辯ヲ主張スル場合ニ該當セズ

○離婚ノ訴訟ニ付キ檢事ノ立會ハ裁判所構成ノ要件ニ非ス

(同法四)

民事訴訟法第四十二條ノ場合ニ於テ檢事ノ立會ナキモ單ニ是ノミヲ以テ上告適法ノ理由ト爲スコトヲ得ス

民事訴訟法第四十二條第八號ノ場合ニ於テ檢事ノ立會ナキモ裁判所ノ構成上ニ影響ナキニ付キ其裁判ヲ破毀スル原由ト爲スニ足ラス

三五	二五	三三	三二
二	一	二〇	一六
一四	四	一六	一八

民事訴訟法第四十二條ハ檢事ノ立會ヲ要スヘキ規定ニ非ス偶其立會ナカリシトテ判決ヲ無効ナラシムヘキモノニ非サレハ上告適法ノ理由ト爲スヲ得ス

民事訴訟法第四十二條(無能力者ニ關スル訴訟ニ檢事カ立會フコト)ノ規定ハ裁判所ノ構成ニ關係ナキヲ以テ原院ノ口頭辯論ニ於テ檢事ノ立會ナキモ之カ爲メ原裁判ヲ不法ト云フヲ得

檢事ノ立會ハ裁判所ノ構成ニ關係ナシ故ニ其立會ナキモ判決破毀ノ理由トナラス
婚姻事件養子縁組事件ニ檢事カ立會フヘシトノ規定ハ義務的ノモノニ非ス隨テ其立會ヲ爲ササル判決ハ不法ニ非ス

民事訴訟ニ檢事ノ臨席ナキモ裁判所ノ構成ニ關係ナク又裁判ノ曲直ニ影響ナキヲ以テ上告ノ理由ト爲スニ足ラス
民事訴訟ニ於ケル檢事ノ立會ハ裁判所ノ構成ニ欠クヘカラサル要件ニ非ス又裁判ノ公平ヲ保障スル所以ノモノニモ非ス故ニ口頭辯論ニ檢事ノ立會ナキコトハ其判決ノ效力ニ何等ノ影響ヲ及ボスモノニ非ス

檢事ノ立會ハ民事訴訟ニ於ケル裁判所ノ構成ニ關クヘカラサル要件ニ非ス

第二章 當事者

第一節 訴訟能力

第四十三條 原告若クハ被告カ自ら訴訟ヲ爲シ又ハ訴訟代理人ヲシテ之ヲ爲サシムル能

カト法律上代理人ニ依レル訴訟無能力者ノ代表ト法律上代理人カ訴訟ヲ爲シ又ハ一ノ訴訟行爲ヲ爲スニ付テノ特別授權ノ必要トハ民法ノ規定ニ從フ

○上告人ハ明治十八年中ニ其所有ノ共立商社株式ヲ悉皆他ニ賣渡シタルモノナレハ十九年中該社ニ係リタル訴訟ニ對シテハ社長カ當然上告人ナモ代表シタルモノナリト云フヲ得ス本訴ハ被上告人カ同社ニ預ケ金ヲ爲シタル當時即チ明治十七年中上告人ハ株主タリシト云フ理由ヲ以テ請求ヲ爲ス場合ニ付キ彼是同一ノ當事者ナリト云フヲ得ス則チ一事再訴ニ非サルナリ

○法律ノ結果ニ依リ官廳カ得タル權利ハ其廳ノ存在スル間ハ良シヤ所屬上班官廳ニ變更アルモ爲メニ消滅スルモノニ非ス本件控訴ヲ提起シタル明治二十六年五月二十二日ニ在テハ尙ホ鐵道廳存在セシヲ以テ同廳長官ハ訴訟ニ關シ國ヲ代表スル權利ヲ有スルコト明治二十五年內務省令第四號ニ於テ明カナリ然ルニ原院ハ控訴提起ノ當時ハ既ニ鐵道廳長官ノ國ヲ代表スル權利委任消滅シタルモノトシテ控訴ヲ棄却シタルハ不法ナリ

○私立銀行ハ一ノ組合ニシテ組合解散後ハ組合員全體ノ外訴訟ヲ爲スノ資格ナシト論告スルモ殘務委員ナルモノハ殘務ニ關スル事柄ヲ處理ス

二五	五	二八
二六	二	五
二七	〇	二四
二八	二	五〇
二九	九	七
三〇	三	一八
三一	五	〇
三二	五	〇

二六	〇	二六四
二八	〇	三三五

へキ責任ヲ有スルモノナレハ殘務ニ關係アル訴訟ニ付キ解散シタル銀行ヲ代表スヘキ權アルハ論テ埃タズ

○辯護士會ハ法人ニ非サルモノノ社團ナルヲ以テ其會則中會長ヲシテ代表セシムヘキ條項存スルニ於テハ辯護士會ノ名義ニテ訴答ヲ爲スコトヲ得ヘシ

○本家ニシテ且ツ親族タル關係ヲ有スル者ハ分家ノ秩序ニ關スル事柄ニ付キ容喙ノ權ヲ有スルガ故ニ分家ニ於テ跡相續ヲ爲スヘキ者ノ順位ニ付キ不當ノ處置アリト認ムル場合ハ其相當順位ニ在ル者ヲ保護スル爲メ分家ニ對シ訴訟ヲ起スコトヲ得

○幼者ハ訴訟當事者タル能力ヲ有スルヲ以テ之ヲ對手トシテ起訴スルハ不法ニ非ス

○村長ノ管理セル部落ノ持地ニ對スル訴訟ハ村長ニ係リ訴フヘシ管理權ナキ村民ヲ對手ト爲スヘキモノニ非ス

○法人ニ非サル團體ニシテ其名義ヲ以テ訴訟行爲ヲ爲スハ特例ニ屬ス故ニ舊來裁判上公認セラレタル團體ノ外ハ此能力ナシ

○法律上代理人カ未丁年者ノ爲メニ訴ヲ提起シ其訴訟繫屬中本人カ丁年ニ達シタル場合ニ於テハ本人自ラ訴訟ヲ進行シ得ヘキモノニシテ別ニ

訴訟ノ中斷ヲ爲シ若クハ通知ノ手續ヲ爲スヲ要セス

(同主旨)

未成年者ノ後見ハ未成年者カ成年ニ達スルト同時ニ終了シ後見人ハ其資格ナク隨テ被後見者ヲ代表スル所ノ訴訟能力ヲ有セサルコト論テ埃タズ

未丁年者丁年ニ達スレハ後見ハ當然止ミ訴訟能力ヲ有スルモノナルヲ以テ從令起訴ノ當時後見人ヲ有シタルモ訴訟進行中丁年ニ達スレハ其後ノ訴訟行爲ハ自ラ爲サレハ何等ノ效果ヲ生セシムヘキモノニ非ス

○幼者ノ親族ハ其幼者ニ自然ノ後見人アル場合之ヲ擱キ幼者ノ爲メ自ラ訴訟ヲ提起スル權能ナシ

○郡長ハ民事上國ノ代表者トシテ訴訟ヲ爲スノ資格ヲ有スルモノニ非ス故ニ國ヲシテ賠償ノ責任ヲ負ハシメントスル訴訟ヲ郡長ニ對シ提起シタルハ不當ナリ

○各人民カ使用スヘキ用水路ニ板堰ヲ設ケラレ各其使用ヲ妨害セラル、ヲ以テ之カ取拂ヲ請求スルハ各個人ノ權利ニ屬シ從テ訴訟能力ノ有無ニハ何等ノ關係ナシ故ニ裁判所カ職權ヲ以テ町村長ノ起訴スヘキモノニ非ストシ原告ニ訴訟能力ナシト判定セルハ不法ナリ

○寺ノ代表ハ住職之ヲ爲スモノタリ故ニ寺ノ代表者トシテ住職ト共ニ檀家惣代ヲ相手取リタル訴訟ハ不當ナリ

三〇	八	一六
二七	〇	三九六
二六	〇	四〇六
三〇	二	五
三二	二	二四
三三	六	二
三九	一	

二六	二	二四
二六	三	七
二六	五	三
二九	六	五〇
二九	五	二〇
三〇	二	六

(同前)

寺院ノ權利伸暢ニ關スル行爲ノ代表ニ付テハ法律上反對ノ規定ナキヲ以テ住職ヲ以テ寺院ノ代表ト爲スヲ相當トス

寺院ノ權利伸暢ニ關スル行爲ノ代表ニ付テハ法律上反對ノ規定ナキヲ以テ住職ヲ以テ寺院ノ代表者ト爲スヲ相當トス

寺院ハ訴訟上住職ニ依リ代表セラルヘキモノニシテ檀家總代ニハ代表ノ資格ナシ

寺院ノ訴訟ハ其住職ヲ以テ代表者ト爲スヘキモノニシテ檀中ハ寺院ヲ代表スルノ能力ナシ

寺院ノ權利伸暢スルヲ以テ目的トセル訴訟ハ住職ニ於テ之ヲ代表スヘキモノニシテ檀家又ハ信徒ハ其訴訟ニ附從スルヲ要セス

○檀徒カ自己ノ名義ヲ以テ寺院ノ利益ノ爲メニ訴訟ヲ提起スルコトヲ許サレタル法律ノ規定ナク亦其慣習モ存在セス

○普通水利組合ノ管理者ハ外部ニ對シ其組合ヲ代表スルノ權アリ而シテ外部ニ對シ訴訟ヲ爲スニ付テハ別ニ授權ヲ受クルコトヲ要スヘキ法文ナク唯組合會ノ決議ヲ爲スヘキ事項中ニ其授權ヲモ包含スルモノト看做ス慣例アリト雖モ斯ル決議ノ如キハ其訴訟カ控訴審ニ繫屬ズルトキニ至リ之ヲ爲スモ遡テ以前ノ行爲ヲ追認シタルモノト推定スヘキモノトス

○後見人カ被後見人ノ爲メニ訴訟ヲ爲スニ付キ親族會ノ同意ヲ得ルカ如

三	三	三	二九	二八	二六
六	九	七	一〇	一五	三
八	五	一九	一五	一八	一六

キハ起訴ノ當初其授權ノ欠缺アリトスルモ該訴訟ノ繫屬中又ハ第二審ニ繫屬中ニ於テ親族會カ同意ヲ爲シ之ヲ追認スルトキハ遡リテ其當初ヨリノ訴訟行爲ヲ總テ有效ナラシムルモノトス

(同前)

檀家總代ハ寺ヲ代表スル權利ナキモノトス

○社掌ハ社司ノ缺ケタル場合ニハ神社ヲ代表シ訴訟ノ對手ト爲ルノ權アリ隨テ其訴訟行爲ハ訴訟審理中ニ任命セラレタル社司ニ對シテ效アリ

○信徒總代ハ神社ヲ代表スルノ權ナシ

○未成年者ニ對シテ法律上代理ノ資格ナキ者ハ未成年者ヲ代表シテ上告ヲ爲スノ權ナキモノトス

三	三	三	三	三	三
六	九	五	九	九	六
一三一	四	五八	三	三	三

(參照)

民事訴訟法第四十三條ハ民法ノ施行セラレサル間ハ實施スルコトヲ得サル法條ニシテ現今ノ例規ニ於テハ後見人ナキ一般未丁年者ハ自ラ私權ヲ行使スルヲ禁セサルモノトス(民法第四條參照)

未丁年者ニシテ後見人ナキモノニ付テハ裁判所ニ於テ調査ヲ爲シ普通智識アルモノト認ムルトキハ訴訟能力者トシテ其訴訟ヲ進行スルコトヲ得(民法第四條參照)

頼母子議會ハ訴訟上其役員ニ依リ代表セラルトハ裁判上一般ノ慣例ナリ

第四十四條 外國人ハ自國ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有セサルモ本邦ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有スルモノナルトキハ之ヲ有スルモノト看做ス

第四十五條 裁判所ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルチ間ハ其職權ヲ以テ訴訟能力、法律上

代理人タル資格及ヒ訴訟ヲ爲スニ必要ナル授權ニ欠缺ナキヤ否ヤヲ調査ス可シ

裁判所ハ遲滯ノ爲メ原告若クハ被告ニ危害アリ且其欠缺ノ補正ヲ爲シ得ルモノト認ム

ルトキハ原告若クハ被告又ハ其法律上代理人ニ其欠缺ノ補正ヲ爲ス條件ヲ以テ一時訴訟ヲ爲スヲ許スコトヲ得此場合ニ於テ裁判所ハ欠缺補正ノ爲メ相當ノ期間ヲ定メ其期間ノ満了前ニ判決ヲ爲スコトヲ得但其欠缺ノ補正ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結

マテ之ヲ追完スルコトヲ得

○法律上代理人ノ資格ヲ證スル書面ノ如キハ裁判所ノ記録ニ備フヘキ法律ノ規定ナキヲ以テ一件記録中其書面ナキヲ以テ裁判所カ其資格ノ調査ヲ欠キタルコトヲ證スルニ足ラス

○第一審ノ委任ニ欠缺アルモ第二審ニ至リ完全ナル代理委任アルニ於テハ第一審ノ訴訟行爲ヲ追認シタルモノト認ムルニ足ルヲ以テ第一二審共通法ニ代理セラレサルモノト云フヲ得ス

(同法) 第一審ノ訴訟委任狀ニ不完全ノ點アルモ第二審ニ至リ完全ナル委任狀ヲ提出シタルトキハ第一審ノ委任欠缺ハ之ヲ追認シタルモノト認メ得ヘキニ依リ上告ノ理由トナラス

○當事者ノ代表資格ノ欠缺ハ裁判所カ職權ヲ以テ調査スヘキ責任ヲ有スルモノトス

(同法)

訴訟代理ノ委任ハ各審級ニ於テ審査スヘキモノナルヲ以テ縱令第一審ニ於ケル訴訟代理委任ニ付キ欠缺アリタルトスルモ第二審ニ於テ何等ノ申立ナキ場合ニ在テハ職權上之ヲ調査スヘキ義務ヲ有セス

法律上代表者タル資格ノ有無ニ關シ當事者雙方ニ異議ナキ場合ト雖モ裁判所ハ職權ヲ以テ之ヲ調査セサルヘカラス

訴訟能力ノ欠缺ニ付キ當事者カ其申立ヲ爲サヌ又特ニ之ヲ爭ハサル旨明言スルモ固ヨリ有效ニ拋棄シ得サル事柄ナルヲ以テ裁判所ハ職權ヲ以テ之カ調査ヲ爲スヘキモノトス

○未丁年者カ第一審以來爲シ來レル訴訟行爲ヲ第二審ニ於テ後見人カ是認シ其訴訟ノ續行ヲ希望スル旨ノ意思ヲ表示シタル場合ハ第一審以來

三〇	三	一三五
二七	〇	三五八
三二	二	二四
三〇	三	一
三〇	九	二六

二六	三	一三四
二五	五	四
二六	三	一四
三〇	〇	一

- ノ總テノ訴訟行為ハ有效ナリトス
- 訴訟代理人カ故障申立ノ際委任狀ヲ提出セサルモ口頭辯論ノ終結前ニ於テ故障申立ノ當時既ニ交付ヲ受ケタル委任狀ヲ提出セルトキハ其故障申立ハ委任ナクシテ爲サレタルモノニ非ス
- 未丁年者カ訴訟能力ヲ有スルヤ否ヤハ事實上ノ問題ニシテ裁判所カ職權上調査スヘキ事項ナリ故ニ其調査ヲ爲サスシテ反證ナキヲ以テ能力ナシト裁判セルハ不法ナリ
- 法律上代理人タル資格ナキ者ニ於テ提起シタル不適法ノ訴訟ト雖モ其本人若クハ正當ナル法律上代理人カ之ヲ追認シ其訴訟ヲ受繼スル以上ハ既往ノ欠缺ハ之カ爲メ自ラ補正セラル、モノトス
- 代理權ヲ有セサル者ノ法律行為ヲ追認スルコトハ法令ノ禁セサル所ナルヲ以テ訴訟代理ヲ委任シタル法律行為ヲ追認スルモ亦有效ナリトス
- 口頭辯論ノ際ニ至リ始メテ原債權者ノ相續人トナリタルモ其相續開始前ニ自ラ債權者ナリトシテ提起シタル訴訟ノ欠缺ヲ補正シテ當初ヨリ有效ニ提起セラレタル訴訟ト認ムルヲ得ヘキ規定ナシ
- 訴訟ヲ爲スニ必要ナル授權ノ欠缺カ原審ニ於テ問題トナリタルニモ拘ハラズ當事者カ其欠缺ヲ補正セスシテ其點ニ付キ判決ヲ受ケタル場合

三	三	三	三	三
四	六	二	六	六
三	七	九	一〇	七
二	七	七	一〇	七

ニハ上告審ニ至リ之カ追完ヲ爲ストモ其追完ハ既往ニ遡リテ效力ヲ有スルモノニ非ス

○訴訟代理ノ委任ニ欠缺アルモ後日本人カ之ヲ追認スレハ訴訟代理人ノ爲シタル訴訟行為ハ有效ナリ

○共同訴訟代理人中代理資格ニ欠缺アルモ他ノ者ニ於テ代理資格ヲ有スルトキハ其行為ヲ有效トス

第四十六條 訴訟無能力者又ハ相續人ノ未定ノ遺産又ハ不分明ナル相續人ニ對シ訴訟ヲ起ス可キ場合ニ於テ法律上代理人アラサルトキハ其事件ノ繫屬ス可キ裁判所ノ裁判長ハ申立ニ因リ遲滯ノ爲ニ危害ノ恐アル場合ニ限リ特別代理人ヲ任ス可シ
右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲シ其裁判ハ申請人ニ之ヲ送達シ又申請ヲ認許シタルトキハ其任セラレタル特別代理人ニモ亦之ヲ送達ス可シ
申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得
裁判長ヨリ任セラレタル特別代理人ハ法律上代理人又ハ相續人ノ出頭スルマテ訴訟行為ニ付キ法律上代理人ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

○民事訴訟法第四十六條ハ不分明ナル相續人ニ對シ訴ヲ提起スル場合ニ於ケル規定ナレハ訴訟ノ繫屬中當事者ノ死亡スル者アリテ相續人ノ未定ナル場合ニ適用スルヲ得ス

三	三	三
五	二	二
八	二	二
七	二	二

(同主旨)

民事訴訟法第四十六條ハ訴訟無能力者ニ對シ訴ヲ提起スル場合ニ特別代理人選任ノ申請ヲ爲シ得ヘキコトヲ規定シタルモノニシテ訴訟ノ進行中ニ當事者ノ一方カ訴訟無能力者ト爲リタル場合ニ適用スヘキモノニ非ス

第四十七條 第十五條ニ掲ケタル場合ニ於テ訴訟無能力者カ其現在地又ハ兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ訴ヲ受ケ可キ場合ニ於テ其法律上代理人他ノ地ニ住スルトキハ遲滞ノ爲メ危害ナシト雖モ前條ノ規定ニ從ヒ特別代理人ヲ任スルコトヲ得 此他裁判ニ對シ抗告ヲ許ス規定ヲ除ク外總テ前條ノ規定ヲ適用ス

第二節 共同訴訟人

○共同訴訟人ノ陳述ニ付キ他ノ共同訴訟人カ明カニ之ヲ爭ハサルモ其陳述ヲ承認シタルモノト看做スヘキ法則ナシ

トヲ得

- 第一 數人カ訴訟物ニ付キ權利共通若クハ義務共通ノ地位ニ立ツトキ
- 第二 同一ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルトキ
- 第三 性質ニ於テ同種類ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク同種類ナル請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルトキ

○共同訴訟人ハ各自ノ受ケタル損害高チ併合又ハ區分シテ要償スルコト

三六五

三三三

ヲ得

○婦カ夫ニ對シ離婚請求ノ訴訟ヲ提起スルニ當テハ明治六年第百六十二號布告施行以來其婦ノ父母又ハ其他ノ親戚ニ於テ共同原告トシテ訴訟ニ參加スルノ慣例行ハレタルニ依リ今日之ヲ不法若クハ無効ト爲スノ理由ナシ

(同主旨)

戶主廢罷又ハ夫婦離婚等ノ爭ニ付キ卑屬親ヨリ尊屬親ニ對シ若クハ婦ヨリ夫ニ對シ訴訟ヲ提起スルニ當リ其父母若クハ其他ノ親戚カ共同原告トシテ訴訟ニ加入スルコトハ從來一般ニ行ハレタル慣例ニシテ今日ニ在テモ不違法ト爲スノ謂ナシ

○婦ヨリ夫ニ對スル離婚及ヒ夫ノ實家ノ戶主ニ對スル復籍ノ請求ニシテ其原因離婚ニ在ルトキハ民事訴訟法第四十八條第二號ノ所謂同一ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク請求ナルヲ以テ被告兩名チ共同訴訟人ト爲セルハ違法ニ非ス

○約束手形ノ振出人ノ支拂義務及ヒ其裏書人ノ償還義務ハ手形ヨリ生シタル債務ナル點ニ於テ民事訴訟法第四十八條第三號ニ謂フ同種類ナル事實及ヒ法律上ノ原因ニ基ク同種類ノ義務ナリトス

第四十九條 共同訴訟人ハ其資格ニ於テハ各別ニ相手方ニ對立シ其一人ノ訴訟行爲及ヒ懈怠又ハ相手方ヨリ其一人ニ對スル訴訟行爲及ヒ懈怠ハ他ノ共同訴訟人ニ利害ヲ及ボ

二九四七

三五九

三五五

三八七

三四二

○訴訟人中控訴ヲ爲スモノアルモ尙ホ利害ヲ異ニスル訴訟人ニシテ控訴ヲ爲サル者アルトキハ之ヲ共同訴訟人トシテ本案ノ裁判ヲ爲スコトヲ得ス

○訴訟物ニ付キ假ニ相手方ニ連帶ノ責任アルモ其相手方一人ニ對シテ爲シタル行爲ヲ以テ他ノ相手方ニ及ホスコトヲ得ス

○權利義務カ合一ニ確定セサル共同訴訟ニ付テノ判決カ當事者ノ一部ニ對シ對席判決ト闕席判決トノ區別ヲ生シタルトキハ其一部ハ控訴シ一部ハ故障ヲ申立ツルコトヲ得

第五十條 然レトモ總テノ共同訴訟人ニ對シ訴訟ニ係ル權利關係カ合一ニノミ確定ス可キトキニ限リ左ノ規定ヲ適用ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノ攻撃及ヒ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)ハ他ノ共同訴訟人ノ利益ニ於テ效ヲ生ス

共同訴訟人中ノ或ル人カ争ヒ又ハ認諾セサルトキト雖モ總テノ共同訴訟人カ悉ク争ヒ又ハ認諾セサルモノト看做ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノミカ期日又ハ期間ヲ懈怠シタルトキハ其懈怠シタル者ハ懈怠セサル者ニ代理ヲ任シタルモノト看做ス

然レトモ懈怠シタル共同訴訟人ニハ其懈怠セサリシ場合ニ於テ爲スコキ總テノ送達及

ヒ呼出ヲ爲スコトヲ要ス其懈怠シタル共同訴訟人ハ何時タリトモ其後ノ訴訟手續ニ再ヒ加ハルコトヲ得

○金錢上ノ債務ハ連借ト連帶トヲ問ハス普通可分的ノモノニシテ權利關係カ合一ニノミ確定スヘキモノニ非ス

○連帶債務ハ必スシモ皆同一ニノミ確定スヘキモノニ非ス

(同五三)

連帶債務ハ權利關係カ合一ニノミ確定スヘキモノニ非ス

○總テノ共同訴訟人ニ對シ訴訟ニ係ル權利關係カ合一ニノミ確定スヘキ場合ト雖モ共同訴訟人中ノ或者ニ於テ訴訟ヲ進行スル權利ヲ拋棄スルトキハ其者ヲ除キ他ノ共同訴訟人ノミニテ其訴訟ヲ進行スルコトヲ得隨テ共同訴訟人ノ一名ノ資格ニ不法ノ點アリテ判決ノ一部ヲ破毀スルモ他ノ共同訴訟人ノ訴訟行爲ニ影響ヲ及ホサス

(同五三)

權利關係カ合一ニノミ確定スヘキ訴訟ニ於テ其當事者中ノ一人若クハ數人ニ關シテ訴訟關係消滅スルコトアルモ爲メニ同事件ニ於ケル他ノ當事者間ノ訴訟關係ヲ消滅セシムルモノニ非ス

○權利關係カ合一ニノミ確定スヘキ事件ニ在リテハ其判決カ共同訴訟人ノ一人ニ對シ不法ナルトキト雖モ其全部ヲ破毀スヘキモノトス

二元	二元	二元	二元
四	九	八	一
四	九	八	一
四	九	八	一

○權利關係カ合一ニノミ確定スヘキ事件ニ於テ共同訴訟人中ノ一人カ爲シタル上訴ハ他ノ共同訴訟人ノ爲メ判決ノ確定ヲ妨グル效力ヲ生ス從テ他ノ共同訴訟人ハ形式上上訴ヲ提起セサルニ拘ラス其訴訟ノ當事者タルヘキモノナレハ裁判所カ之ニ對シ送達及ヒ呼出ヲ爲スハ當然ナリ

(同三三)
普通ノ共同訴訟ニ付テハ上訴者ノ利害關係ヲ他ニ及ボサスト雖モ權利關係カ合一ニノミ確定スヘキ共同訴訟ニ付テハ其受ケタル判決ノ效力ハ他ノ上訴セサル者ニ及フヘキモノトス

○連署者タルノ故ヲ以テ共同被告タルモ其權利關係カ合一ニ確定スヘキモノニ非サルトキハ該被告中第一審ノ口頭辯論ニ闕席シタルモノアルモ他ノ出席者ニ代理ヲ任シタルモノト看做サス故ニ其闕席判決ニ基因セル故障申立ニ對スル判決ノ控訴ヲ受理スルモ違法ニ非ス

○權利關係カ合一ニノミ確定スヘキ共同訴訟ナルトキハ共同訴訟人タル者カ適法ノ委任ヲ爲サ、リシカ爲メ期日ニ出頭セサル者トスルモ民事訴訟法第五十條第四項ノ規定ニ依リ他ノ共同訴訟人ニ代理ヲ任シタルモノト看做スカ故ニ其判決ハ此等ノ者ニ對シテ效力ヲ有ス

(同三三)
共同訴訟ニシテ權利關係カ合一ニノミ確定スヘキトキニ於テ法律上共同訴訟人中ノ或人カ期日ヲ懈怠シタルモ其懈怠セザル者ニ代理ヲ委任シタルモノト看做スヘキハ法律ノ規定スル所

ナルヲ以テ共同訴訟人中ノ一人ニ代理委任ヲ爲スコトニ於テ欠缺アルモ全ク訴ノ提起ナキ場合ト同一ニ論スルヲ得ス

○第一回口頭辯論ノ期日ニ出頭セザリシ訴訟人ニ第二同期日ノ呼出ヲ發セサルニモ拘ハラス當日出頭セザリシ懈怠ヲ責メ他ノ出頭者ニ代理ヲ任シタルモノト看做シタルハ不法ノ裁判ナリ

(同三三)
共同訴訟人中ノ或人ノミカ期日ヲ懈怠シタルトキハ其懈怠シタル者ハ懈怠セサル者ニ代理ヲ任シタルモノト看做ストノ規定ハ期日ノ送達ヲ受ケサル共同訴訟人ニ適用スルコトヲ得ス

○民事訴訟法第五十條第五項ハ同級審ニ於ケル訴訟手續ヲ規定シタルモノニシテ上級審ノ訴訟手續ヲ定メタルモノニ非ス

第三節 第三者ノ訴訟參加

○本訴訟ノ原告カ主參加人ノ要求ニ賛同シタルト同時ニ原告ハ其從參加人ト爲リ主參加訴訟ハ自然消滅シテ主參加人ハ本訴訟ノ原告ト爲リ本訴訟ノ被告ハ其對手下ト爲リタルモノナルカ故ニ裁判所カ特ニ併合ヲ命セス一箇ノ判決ヲ以テ裁判シタルハ相當ニシテ訴訟法則ニ違反シタルモノニ非ス

第五十一條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ノ目的物ノ全部又ハ一部分ヲ自己ノ爲ニ請求スル第三者ハ本訴訟ノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ其訴訟カ第一審ニ於テ駁論シタル

二九	二九	二五	二六	二六
二二	九	四	二	二
四	九	九	五	三五

二七	二六	二六	三〇
〇	二	四	八
二九	二六	八	三

裁判所ニ當事者雙方ニ對スル訴(主參加)ヲ爲シテ其請求ヲ主張スルコトヲ得
第三者カ原告及ヒ被告ノ共謀ニ因リ自己ノ債權ヲ損害ヲ生スルコトヲ主張スルトキモ
亦同シ

○執行參加ノ訴ニ於テ債務者ヲ共同被告ト爲ストキハ強制執行ニ對スル
消極的異議ノ訴ニ積極的所有權確認訴訟ヲ包含スルモノト推定セラル
而シテ執行參加ノ當事者雙方ヲ共同被告ト爲シ所有權確認ノ主參加訴
訟ヲ提起スルハ執行參加ノ當事者間ニ爭アル所有權ノ確認ニ付キ自己
ニ所有權アルコトヲ確認セシメントスルモノナルヲ以テ此主參加訴訟
ハ適法ナリトス

第五十二條

本訴訟ハ第一審ニ繫屬スルト上級審ニ繫屬スルトナ間ハ原告、被告若ク

ハ主參加人ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ主參加ニ付テノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ之ヲ
中止スルコトヲ得

中止ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得
決定ハ口頭辯論ヲ經シテ之ヲ爲スコトヲ得

中止ヲ命スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

○當事者間ノ係争目的物件ニ對シ其所有權ヲ主張シ之カ名義切換ヲ請求
スル主參加申立アルトキハ本訴訟ノ辯論ハ民事訴訟法第五十二條第一
項ニ依ルモ又ハ同法第二百一十一條ノ規定ニ依ルモ主參加訴訟ノ完結ニ

三四九二四

至ルマテ之ヲ中止スルヲ相當トス

第五十三條

他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ニ於テ其一方ノ勝訴ニ依リ權利上利害

ノ關係ヲ有スル者ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハズ權利拘束ノ繼續スル間ハ其一
方ヲ補助(從參加)スル爲メニ附隨スルコトヲ得

○買主カ買受物ノ追奪セラレントナル訴訟アル場合ニ於テ賣主其訴訟ニ
參加シ買主ノ爲メ防禦ノ方法ヲ提出シ賣買代金返還ノ請求ニ應セサル
コトヲ得ルナリ 廻テ其理由果シテ正當ナレハ代金返還ノ義務ナシ然ラ
サレハ損害賠償ノ責ニ當ラサルヘカラス 抑追奪擔保ノ義務ハ賣渡シタ
ル物カ追奪セラレタルト同時ニ生スト雖モ賣主カ買主ニ賣買代金ニ相
當スル金額ヲ支拂フニ依リ賣買ハ解除スルモノニ非ス之カ損害ヲ賠償
スルニ過キサルノミ

○從參加人ハ權利拘束ノ繼續中當事者ノ一方ヲ補助スル爲メ自ラ進ノテ
其訴訟ニ附隨スルモノニシテ審級ノ如何ニ拘ハラス當然當事者タルヘ
キモノニ非ス故ニ從參加人ニ對シ提起セル控訴ハ不適法ナリ

○第一審ニ於テ從參加ノ申請アリタル者ニ對シ異議ナク判決ヲ受ケタル
後之ヲ對手者ノ一人トシテ控訴ヲ提起シタルトキハ第二審ニ於テ更ニ
從參加ノ申請ナキモ從參加人タル資格ヲ有スルモノトス

二六一七二

二七〇三三

二九四二二

三〇五五五

第五十四條 從參加人ハ其附隨スル時ニ於ケル訴訟ノ程度ヲ妨ケサル限リハ其主タル原告若クハ被告ノ爲ニ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用シ且總テノ訴訟行爲ヲ有效ニ行ヒ殊ニ主タル原告若クハ被告ノ爲ニ在スル期間内ニ故障、支拂命令ニ對スル異議又ハ上訴ヲ爲ス權利ナ有ス

從參加人ノ陳述及ヒ行爲ト主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ト相抵觸スル場合ニ於テハ主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ヲ以テ標準ト爲ス但民法ニ於テ此ニ異ナル規定アルトキハ此限ニ在ラス

○從參加人ノ陳述カ主タル被控訴人ノ陳述ト相抵觸スルトキハ主タル被控訴人ノ陳述ヲ以テ標準ト爲ス

第五十五條 從參加人ハ訴訟ヨリ脫退シタルトキト雖モ其補助シタル原告若クハ被告トノ關係ニ於テハ其訴訟ノ確定裁判ヲ不當ナリト主張スルコトヲ得ス

從參加人ハ其附隨ノ時ノ訴訟ノ程度ニ因リ又ハ主タル原告若クハ被告ノ所爲ニ因リ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用スルコトヲ妨ケラレトキ又ハ主タル原告若クハ被告力從參加人ノ當時知ラザリシ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ故意又ハ重過失ニ因リ施用セザリシトキニ限リ其補助シタル原告若クハ被告力訴訟ヲ不十分ニ爲シタリト主張スルコトヲ得

第五十六條 從參加ハ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ申請ヲ以テ之ヲ爲ス可シ
申請ニハ當事者及ヒ訴訟ヲ表示シ又一定ノ利害關係及ヒ附隨セントスル陳述ヲ開示ス可シ
申請ハ當事者ニ之ヲ送達ス可シ
從參加ハ故障、異議又ハ上訴ト併合シテ之ヲ爲スコトヲ得

第五十七條 原告若クハ被告力從參加ニ付キ異議ヲ述フルトキハ當事者及ヒ從參加人ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ參加ノ許否ヲ裁判ス其裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

利害關係ノ存否ニ付キ等アルトキハ從參加人其關係ヲ説明スルノミヲ以テ參加ヲ許スニ足ル

右ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

參加ヲ許ササル裁判確定セサル間ハ從參加人ヲ本訴訟ニ立會ハシメ殊ニ總テノ期日ニ之ヲ呼出シ又本訴訟ニ關係アル裁判ヲ爲シタルトキハ從參加人ニ其裁判ヲ送達ス可シ

○口頭辯論期日ニ從參加人ヲ呼出サスシテ爲シタル判決ハ不法ナリ

第五十八條 從參加人ハ當事者雙方ノ承諾ヲ得テ其附隨シタル原告若クハ被告ニ代リ訴訟ヲ擔任スルコトヲ得此場合ニ於テハ其原告若クハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴訟ヨリ其原告若クハ被告ヲ脫退セシム可シ

第五十九條 原告若クハ被告若シ敗訴スルトキハ第三者ニ對シ擔保又ハ賠償ノ請求ヲ爲シ得ヘント信シ又ハ第三者ヨリ請求ヲ受ク可キコトヲ恐レル場合ニ於テハ訴訟ノ權利拘束間第三者ニ訴訟ヲ告知スルコトヲ得

○民事訴訟法第五十九條ノ所謂擔保又ハ賠償ノ責任ナキ第三者ハ訴訟ノ告知ヲ受ク其訴訟ニ參加セサルモ尙ホ其裁判ヲ不當ナリト主張スルコトヲ得

○會社ノ無限責任社員ハ該社ノ債務ニ付キ縱令形式上訴訟ニ於テ共同被告ノ地位ニ立タズト雖モ實體上義務共通ノ關係アルモノナレバ該社員ノ一人カ會社ノ債務者ヨリ訴ヲ受ケルニ當リ他ノ無限責任社員ニ對シ訴訟參加ノ告知ヲ爲スヲ得ヘシ縱令其告知ヲ爲サズシテ訴訟終了シ未タ債權者ニ對シ其債務ヲ辨濟セサル前ト雖モ尙ホ共同シテ其債務ノ負擔ヲ請求スル權利アリ

第六十條 訴訟告知ハ訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ其訴訟告知ノ理由及ヒ訴訟ノ程度ヲ記載シタル書面ヲ提出シテ之ヲ爲スコシ

此書面ハ第三者ニ送達スルコトヲ要ス又訴訟ヲ告知スル原告若クハ被告ノ相手方ニハ其書面ヲ送付ス可シ

第六十一條 訴訟ハ訴訟告知ニ拘ハラズ之ヲ履行ス

第三者參加ス可キコトヲ陳述スルトキハ從參加ノ規定ヲ適用ス

第六十二條 第三者ノ名ヲ以テ物ヲ占有スルコトヲ主張スル者其物ノ占有者トシテ被告ト爲リタルトキハ本案ノ辯論前第三者ヲ指名シ之ニ陳述ヲ爲サシムル爲メ其呼出ヲ求ムルトキハ第三者ノ陳述ヲ爲シ又ハ之ヲ爲ス可キ期日マテ本案ノ辯論ヲ拒ムコトヲ得 第三者カ被告ノ主張ヲ争フトキ又ハ陳述ヲ爲ササルトキハ被告ハ原告ノ申立ニ應ズルコトヲ得

第三者カ被告ノ主張ヲ正當ト認ムルトキハ被告ノ承諾ヲ得テ之ニ代リ訴訟ヲ引受ケルコトヲ得

第三者カ訴訟ヲ引受ケタルトキハ裁判所ハ被告ノ申立ニ因リ其被告ヲ訴訟ヨリ脱退セシム可シ其物ニ付テノ裁判ハ被告ニ對シテモ效力ヲ有シ且之ヲ執行スルコトヲ得

第四節 訴訟代理人及ヒ輔佐人

○訴訟書類ノ送達受取人ハ民事訴訟法第六十三條以下ノ規定ニ從フヲ要セサルヲ以テ何人ニ代理セシムルモ妨ケナキモノトス

第六十三條 原告若クハ被告自ラ訴訟ヲ爲ササルトキハ辯護士ヲ以テ訴訟代理人トシ之ヲ爲ス

辯護士ノ在ラサル場合ニ於テハ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲シ若シ此等ノ者ノ在ラサルトキハ他ノ訴訟能力者ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコトヲ得 區裁判所ニ於テハ辯護士ノ在ルトキト雖モ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

○本人ニ代リ原告ト爲リ復タ之ヲ代言人ニ委任スルモ法律ノ禁スル所ニ非ス

○共同訴訟ニシテ權利關係カ合一ニシテ確定スヘキトキニ於テ法律上共同訴訟人中ノ或人カ期日ヲ懈怠シタルモ其懈怠セサル者ニ代理ヲ委任シタルモノト看做スヘキハ法律ノ規定スル所ナルヲ以テ共同訴訟人中ノ一人ニ代理委任ヲ爲スコトニ於テ欠缺アルモ全ク訴ノ提起ナキ場合ト同一ニ論スルヲ得ス

六 一 吾

三 二 只

二 四 一 二 五

二 六 二 三 六 五

○地方裁判所以上ニ在テハ共同訴訟人タリト雖モ之ニ訴訟代理ヲ委任スルコトヲ得ス

第六十四條 訴訟委任ハ裁判所ノ記録ニ備フ可キ書面委任ヲ以テ之ヲ證ス可シ私署證書ハ相手方ノ求ニ因リ之ヲ認證ス可シ其認證ハ公證人之ヲ爲シ又相當官吏之ヲ爲スコトヲ得

口頭辯論ノ期日又ハ受命判事者クハ受託判事ノ面前ニ於テ口頭委任ヲ爲シ其陳述ヲ調書ニ記載セシムルトキハ書面委任ト同一ナリトス

第六十五條 訴訟委任ハ反訴、主參加、故障、假差押者クハ假處分又ハ強制執行ニ因リ生スル訴訟行爲ヲ併セ訴訟ニ關スル總テノ訴訟行爲ヲ爲シ及ヒ相手方ヨリ辨濟スル費用ノ領收ヲ爲ス權ヲ授與ス

訴訟代理人ハ特別ノ委任ヲ受クルニ非サレハ控訴者クハ上告ヲ爲シ、再審ヲ求メ、代人ヲ任シ、和解ヲ爲シ、訴訟物ヲ拋棄シ又ハ相手方ヨリ主張シタル請求ヲ認諾スル權ヲ有セス

○訴訟代理人ハ特別ノ委任ヲ受クルニ非サレハ和解又ハ拋棄ヲ爲スコトヲ得サルハ訴訟法第六十五條第二項ノ規定スル所ナリ然ラハ此委任ヲ受ケタル證左ナキ以上ハ縱令裁判所ヨリ下付シタル和解調書即チ公正ノ證書ナリト雖モ其效力ヲ對手人ニ及ホスコトヲ得ス

○方式ノ送達ヲ受ケサルモ甘シテ之カ答辯ヲ爲スハ之ヲ受クルモノ、隨意タリ決シテ法ノ禁スル所ニ非ス又控訴ヲ爲スノ委任ヲ爲シクル以上

二元
四
五

二元
一
六

ハ相手方ノ附帶控訴ニ對シ反訴ノ意思アルコト自ラ明瞭ナルニ於テハ民事訴訟法第六十五條第一項ニ屬スヘキモノニシテ敢テ特別ノ委任ヲ要セス

○民事訴訟法ニ於テ認諾ト稱スルモノハ請求ヲ認諾スルノ謂ニシテ即チ一方ノ當事者カ對手方ノ請求ニ承服シ其爭訟ヲ止息スルニアリ而シテ爭訟ヲ止息スル爲メノ認諾ト抗爭ヲ事トスル訴訟代理トハ其旨意氷炭相容レス認諾ヲ以テ訴訟代理ノ目的ヲ達スル必要若シハ直接ノ結果ト看做スコトヲ得サルヨリ法律カ認諾ニ對シ特別委任ヲ必要トスル所以ナリ(民訴六五條二項)然ルニ當事者一方ノ代理人カ原公庭ニ於ケル申立ハ之カ負擔ヲ認メタルノミニテ其請求ニ承服セス却テ計算上對手者ヨリ受取ルヘキ部分アリト抗爭シタルモノナレハ此所爲ハ民事訴訟法上之ヲ稱シテ自白ト云フヘクシテ認諾ト云フヘキモノニ非ス隨テ特別委任ノ必要ナキコトヲ知ルヘシ

○反訴取下ヲ承諾スル如キハ普通ノ訴訟委任中ニ包含ス
○民事訴訟法第六十五條第一項ノ普通委任ノ外同條第二項ノ特別權限ヲ委任セラレタル代理人ハ訴訟ノ如何ナル審級ニ在ルト又上級審ヨリ下級審ニ差戻シ又ハ移送セラレタルトテ論セス總テ其訴訟ノ完結ニ至ル

二元
〇
二元

二元
〇
二元

マテ訴訟行為ヲ爲シ得ルモノトス
 ○假處分申請ニ付テノ訴訟代理人ハ其決定ニ對スル相手方ノ異議申立ニ
 對シ民事訴訟法第六十五條ニ從ヒ當然答辯ヲ爲ス資格ヲ有ス
 ○證書訴訟ヲ止メ通常訴訟手續ニ繫屬セシムルカ如キハ民事訴訟法第六
 十五條第二項ニ規定セル訴訟行為ニ非サルヲ以テ同條第一項ノ範圍ニ
 入ルヘキモノトス故ニ證書訴訟ノ委任ハ該訴訟カ通常訴訟トシテ繫屬
 スル場合ニ於テモ亦有效ナリ
 ○相殺ヲ以テ抗辯方法ト爲スヘキ場合ニ於テハ特別ノ意思表示ヲ須タス
 シテ其相殺ヲ爲ス行為ハ當然訴訟委任中ニ包含スルモノトス

元	二	三
三〇	三	九
三三	三	六〇
三四	二	四

第六十六條 訴訟委任ハ法律上ノ範圍(第六十五條第一項)ヲ制限スルモ其制限ハ相手方ニ對シ效力ナシ
 然レトモ辯護士ニ依レル代理ヲ除ク外ハ各箇ノ訴訟行為ニ付キ委任ヲ爲スコトヲ得

第六十七條 訴訟代理人數人アルトキハ共同若クハ各別ニテ代理スルコトヲ得但委任ニ此ト異ナル定アルモ相手方ニ對シ其效力ナシ

第六十八條 訴訟代理人カ委任ノ範圍内ニ於テ爲シタル訴訟上ノ行為及ヒ不行爲ハ原告若クハ被告ニ對シテハ其本人ノ行為又ハ不行爲ト同一ナリトス
 然レトモ代理人ノ事實上ノ陳述ハ其代理人ト共ニ裁判所ニ出頭シタル原告若クハ被告ヨリ即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正シタルトキニ限り其效力ヲ失フ

第六十九條 委任者ノ死亡、訴訟能力若クハ法律上代理ノ變更、委任ノ廢罷及ヒ代理ノ謝絶ニ因ル委任ノ消滅ハ其消滅ヲ通知スルマテ相手方ニ對シ其效力ナシ
 此通知書ハ原告若クハ被告ヨリ受訴裁判所ニ之ヲ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ

代理人ハ謝絶ヲ爲スモ委任者他ノ方法ヲ以テ自己ノ權利ノ防衛ヲ爲ササル間ハ其委任者ノ爲ニ行為ヲ爲スコトヲ得

第七十條 委任ノ欠缺ハ原告若クハ被告ノ爲メ其代理人ナキモノト看做ス
 裁判所ハ職權ヲ以テ委任ノ欠缺ヲ調査シ委任ナク又ハ適式ノ委任ナク代理人トシテ出頭スル者ニ事情ニ從ヒ費用及ヒ損害ノ保證ヲ立テシメ又ハ之ヲ立テシメスシテ假ニ訴訟ヲ爲スヲ許スコトヲ得

判決ハ欠缺ヲ補正シ又ハ之ヲ補正スル爲メ裁判所ノ適宜ニ定ムル期間ノ満了後ニ限り之ヲ爲スコトヲ得但欠缺ノ補正ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完スルコトヲ得

第七十一條 原告若クハ被告ハ辯護士ヲ輔佐人ト爲シ又ハ何時ニテモ裁判所ノ取消シ得ヘキ許可ヲ得テ他ノ訴訟能力者ヲ輔佐人ト爲シテ共ニ出頭スルコトヲ得其輔佐人ハ口頭辯論ニ於テ權利ヲ伸張シ又ハ防禦スル爲メ原告若クハ被告ヲ補助スルモノトス
 輔佐人ノ演述ハ原告若クハ被告即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正セザルトキニ限り原告若クハ被告自ラ演述シタルモノト看做ス

第五節 訴訟費用

◎後見人アル幼者ノ行為ヲ以テ獨立ノ能力アル者ノ行為ト同視スヘカラ

○サレハ法理ノ然ラシムル所ナリ故ニ訴訟費用ノ如キモ幼者ノ財産處分
 權ヲ有スル者ノ許諾ヲ經ルニ非サルヨリハ幼者ノ財産ヲ處理スルコト
 能ハサルモノトス乃チ幼者ノ承諾ノミニ據テ之ヲ處分スルハ不當ナリ
 ○後見人罷黜訴訟事件ニ付キ幼者自ラ起訴者ノ一人タル事跡ノ見ルヘキ
 モノナキニモ拘ハラヌ裁判所ニ於テ其幼者モ亦起訴者ノ一人タルコト
 明カナリト判定シ幼者ニ訴訟費用ヲ負擔セシメタルハ違法ノ裁判ナリ
 ○凡ソ敗訴者ヲシテ訴訟費用ヲ負擔セシムルハ其訴訟行為ニ因リテ生シ
 タル損害ヲ賠償セシムルニ外ナラス左レハ勝訴者カ賠償ヲ求ムル所ノ
 費用ハ現實訴訟ノ爲メニ費シタルモノナルヤ否ヤノ事實ヲ審究スルハ
 其費用額ヲ定ムルニ於テ最モ緊要ノ事ナリトス而シテ訴訟委任ハ書面
 ノ往復ヲ以テ之ヲ爲シ得ヘシ必スシモ面接ヲ要セサルモノナルカ故ニ
 單ニ其訴訟委任ヲ爲シタル事實ノミヲ以テ輒ク面接委任ヲ爲シタルモ
 ノト推定スヘカラサルハ言ヲ竣タヌ

第七十二條 敗訴ノ原告若クハ被告ハ訴訟ノ費用ヲ負擔シ殊ニ訴訟ニ因リ生シタル費用
 ヲ相手方ニ辨濟ス可シ但其費用ハ裁判所ノ意見ニ於テ相當ナル權利伸張又ハ權利防禦
 ニ必要ナリト認ムルモノニ限ル
 訴訟中ニ訴ヲ取下ケ請求ヲ拋棄シ又ハ相手方ノ請求ヲ認諾スル原告若クハ被告ハ敗

二五	五	三
二五	五	三
二〇	〇	三〇

訴ノ原告若クハ被告ニ同シ

○訴訟費用ハ必要ニシテ且ツ現ニ費シタルモノナルヲ要スルハ訴訟費用
 法ノ精神ナリ
 ○休暇部ノ審理ヲ申請シ爲メニ却下セラレタルハ必要ナラサル行為ニ屬
 スルカ故ニ其對手者ニ其費用ヲ辨濟セシムヘキ限リニ在ラス
 ○訴訟能力ノ有無ハ裁判所カ職權ヲ以テ調査スヘキ事柄ニ屬スルニ依リ
 事實訴訟能力ナキコトニ決スル以上ハ當事者ノ一方カ之ニ關スル抗辯
 ヲ提出セル時期ノ如何ニ拘ハラヌ其敗訴ノ費用ヲ總テ敗訴者ニ負擔セ
 シムルハ相當ナリ
 ○訴訟代理人カ出廷シタルトキハ其本人自ラ出廷スルト否トハ隨意ノ行
 爲ニシテ必要行為ニ非ス故ニ本人出頭ノ費用ハ訴訟費用中ニ計算スヘ
 キモノニ非ス
 ○假住所ナルモノハ本住所ニ非サルヲ以テ開廷ノ節實際本住所ヨリ往復
 シタル事實アルトキハ其費用ヲ請求シ得ヘキハ當然ナリ

第七十三條 當事者ノ各方一分ハ勝訴ト爲リ一分ハ敗訴ト爲ルトキハ其費用ヲ相消シ又
 ハ割合ヲ以テ之ヲ分擔ス可シ第一ノ場合ニ於テハ各當事者ハ其支出シタル費用ヲ自ラ
 負擔シ他ノ一方ニ對シ辨濟ヲ請求スルコトヲ得ス

二六	〇	二七
二六	〇	二七
二〇	〇	三〇

然レトモ裁判所ハ相手方ヲ要求格外ニ過分ナルニ非ス且別段ノ費用ヲ生セザリシトキ又ハ判事ノ意見、鑑定人ノ鑑定若クハ相互ノ計算ニ因リ要求額ヲ定ムルニ非サレハ容易ニ過分ノ要求ヲ避クルコトヲ得ザリシトキハ當事者ノ一方ニ訴訟費用ノ全部ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十四條 被告直チニ請求ヲ認諾シ且其作為ニ因リ訴ヲ起スニ至ラシメタルニ非サルトキハ訴訟費用ハ原告ノ勝訴ト爲リタルニ拘ハラズ其負擔ニ歸ス

○民事訴訟法第七十四條ノ規定ハ被告カ直チニ原告ノ請求ヲ認諾シタル場合ニ限り適用スヘキモノトス

第七十五條 期日若クハ期間ヲ懈怠シ又ハ自己ノ過失ニ因リ期日ノ變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ爲ニスル期日ノ指定、期間ノ延長其他訴訟ノ遲滯ヲ生セシメタル原告若クハ被告ハ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラズ此カ爲ニ生シタル費用ヲ負擔ス可シ

第七十六條 裁判所ハ無益ナル攻撃又ハ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)ヲ主張シタル原告若クハ被告ヲシテ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラズ其方法ノ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

○印紙貼用不足ノ論告ハ原判決ヲ破毀スルヲ得スト雖モ理由アル申立ニシテ被上告人ノ過失ニ原因スルモノナレハ被上告人ハ訴訟費用ヲ償フノ責ヲ免カル、コトヲ得ス

第七十七條 無益ナル上訴又ハ取下ケタル上訴ノ費用ハ之ヲ提出シタル原告若クハ被告ノ負擔ニ歸ス

二七

〇

三九〇

三

四

五

第七十八條 上訴ニ因リ裁判ノ全部又ハ一分ヲ廢棄若クハ破毀スルトキハ訴訟ノ總費用(上訴ノ費用ヲ包含ス)ノ裁判ハ本案ノ終局裁判ト併合シテ更ニ之ヲ爲ス可シ

原告若クハ被告カ前審ニ於テ主張スルコトヲ得ヘカリシ事實又ハ攻撃若クハ防禦ノ方法ヲ新ニ提出スルニ因リ勝訴者ト爲ルトキハ其原告若クハ被告ニ上訴費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十九條 當事者カ訴訟物ニ付キ和解ヲ爲ストキハ其訴訟ノ費用及ヒ和解ノ費用ハ共ニ相消シタルモノト看做ス但當事者別段ノ合意ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

第八十條 法律ノ規定ニ從ヒ費用ニ付キ共同訴訟人ノ連帶義務ノ生セサルトキニ限り其共同訴訟人ハ相手方ニ對シ平等ニ費用ヲ負擔ス然レトモ共同訴訟人ノ訴訟ニ於ケル利害ノ關係著シク相異ナルトキハ裁判所ハ其利害關係ノ割合ニ從ヒ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

共同訴訟人中ノ或ルハカ特別ノ攻撃又ハ防禦ノ方法ヲ主張シタルトキハ他ノ共同訴訟人ハ此カ爲ニ生シタル費用ヲ負擔セス

第八十一條 從參加ニ對シ原告若クハ被告カ異議ヲ述フルトキハ其異議ノ決定ニ於テ從參加人ト其原告若クハ被告トノ中間訴訟ノ費用ニ付キ第七十二條乃至第七十八條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可シ

從參加ヲ許シタルトキ又ハ異議ヲ述ヘサルトキハ本訴訟ノ判決ニ於テ從參加人ト相手方ナル原告若クハ被告トノ間ニ從參加ニ因リ生シタル費用ニ付テモ亦前數條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可シ

第八十二條 費用ノ點ニ限りタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス然レトモ本

○案ノ裁判ニ對シ許ス可キ上訴ヲ提出シ且追行スル下キニ限リ費用ノ點ニ付キ不服ヲ申立ツルコトヲ得

○訴訟費用ノミノ裁判ニ對シ上訴スルコトヲ得サルモノトス

○上告ノ理由總テ相立サルトキ訴訟費用不服ノ申立ハ民事訴訟法第八十二條第一項ニ從ヒ採用スヘカラサルモノトス

第八十三條 裁判所書記、法律上代理人、辯護士其他ノ代理人及ヒ執達吏ノ過失又ハ懈怠

ニ因リ費用ノ生シタルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其費用ノ辨濟ヲ負擔セシムル決定ヲ爲スコトヲ得但其決定前關係人ニ口頭又ハ書面ニテ陳辯ヲ爲ス機會ヲ與フ可シ

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得其決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

○執達吏ノ行為ニ對シ當事者一方ヨリ異議ノ申立ヲ爲シ其行為ノ取消ヲ命セラル、コトアルモ執達吏ハ民事訴訟法第八十三條ノ如キ場合ノ外ハ利害ノ關係ナキヲ以テ之ニ對シ不服ヲ唱へ抗告ヲ爲シ得ヘキモノニ非ス

第八十四條 辨濟ス可キ費用額ノ確定ハ申請ニ因リ訴訟ノ第一審ニ繫屬シタル裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

二五	二六
三	二
一四	二〇八

申請ハ第七十三條第二項又ハ上訴取下ノ場合ヲ除ク外執行シ得ヘキ裁判ニ依ルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ニハ費用計算書、相手方ニ付與ス可キ計算書ノ謄本及ヒ各箇費用額ノ疏明ニ必要ナル證書ヲ添附ス可シ

第八十五條 費用額確定ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

裁判所ハ裁判所書記ニ費用計算書ノ計算上ノ検査ヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ計算書ヲ付與シテ裁判所ノ定ムル期間内ニ陳述ヲ爲ス可キ旨ヲ之ニ催告スルコトヲ得此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第八十六條 當事者ハ訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ割合ニ從ヒ負擔ス可キトキハ裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ裁判所ノ定ムル期間内ニ其費用ノ計算書ヲ差出ス可キ旨ヲ催告ス可シ此期間ヲ徒過シタル後ハ費用額確定ノ決定ハ相手方ノ費用ヲ願ミ之ヲ爲ス可シ但相手方ハ後ニ自己ノ費用ヲ以テ其費用額確定ノ申請ヲ爲ス妨ト爲ルコト無シ

第六節 保證

第八十七條 訴訟上ノ保證ハ當事者方別段ノ合意ヲ爲ス場合又ハ此法律ニ於テ保證ヲ定ムルコトヲ裁判所ノ自由ナル意見ニ任ズル場合ヲ除ク外裁判所ノ意見ニ於テ擔保二十分ナリトスル現金又ハ有價證券ヲ供託シテ之ヲ爲ス

第八十八條 原告又ハ原告ノ從參加人タル外國人ハ被告ニ對シ其求ニ因リ訴訟費用ニ付

キ保證ヲ立ツ可シ
左ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツル義務ヲ生ゼス

第一 國際條約又ハ原告ノ屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ保證ヲ立ツル義務ナキトキ

第二 反訴ノ場合

第三 證書訴訟及ヒ爲替訴訟ノ場合

第四 公示催告ニ基キ起シタル訴ノ場合

第八十九條 裁判所ハ前條第一項ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツ可キ數額ヲ確定ス可シ

此數額ヲ確定スルニハ被告ノ訴ヲ受ケタルカ爲メ各審級ニ於テ支出ス可キ訴訟費用ノ額ヲ標準ト爲ス可シ

訴訟中ニ保證ノ不足ヲ生シ且追増保證ヲ立ツ可キコトヲ被告カ求ムルトキハ前項ト同一ノ手續ニ依ル可シ但等ナキ請求ノ部分カ擔保ニ十分ナルトキハ此限ニ在ラス

第九十條 裁判所ハ保證ヲ立ツ可キ期間ヲ定ム可シ

此期間ノ經過後裁判アルマテニ保證ヲ立テサル場合ニ於テハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴ヲ取下ケタリト宣言シ又原告カ上訴ヲ爲シタルトキハ其上訴ヲ取下ケタリト宣言ス可シ

第七節 訴訟上ノ救助

○訴訟上救助ノ申請中ニ上告期限ヲ經過スルモ之カ期間ノ進行ヲ停止スヘキ規定ナキヲ以テ猶豫ヲ與フヘキ限リニ在ラス

二五
三
一

○訴訟救助ノ申請ニシテ許容セラレサルトキハ之ト共ニ提出セル無印紙

ノ訴訟書類ハ無効ナルカ故ニ民事訴訟用印紙法第十一條ノ注意ヲ爲ス

ヲ要セス其書類ヲ却下スヘキモノトス

○訴訟上ノ救助ノ申請ヲ許否スル決定ニ理由ヲ付セサルモ違法ニ非ス

(同法第)

訴訟上救助申請等ノ決定ヲ爲スニ付テハ必ス理由ヲ付セサルヘカラストスル一定ノ法條ナキニ依リ原裁判所カ其決定ヲ爲スニ當リ何等理由ヲ説明セサリシトテ之カ爲メ必スシモ不法トスルヲ得ス

三〇
三〇
三七
〇
四八九

第九十一條 何人ヲ問ハス自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害スルニ非サレハ訴訟費用ヲ出ダスコト能ハサル者ハ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得但其目的トスル權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルトキニ限ル

○訴訟上救助ハ其目的トスル權利ノ伸張ニ見込ナキトキハ之ヲ付與スヘキモノニ非ス

第九十二條

外國人ハ國際條約又ハ其屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得ルトキニ限り之ヲ求ムルコトヲ得

第九十三條 訴訟上救助ノ申請ハ關係ヲ表明シ且證據方法ヲ開示シテ其救助ヲ求ムル審級ノ裁判所ニ之ヲ提出ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

原告若クハ被告ハ申請ノ提出ト共ニ管轄市町村長ヨリ發シタル證書ヲ出ダスコトヲ要ス其證書ニハ原告若クハ被告ノ身分、職業、財産並ニ家族ノ實況及ヒ其納ム可キ直税ノ

二元
一
九

額ヲ開示シテ訴訟費用支拂ノ無資力ヲ證ス可シ

○訴訟費用救助ノ申請ハ訴訟ノ提起ト同時ニ爲スヘキモノトス

第九十四條 訴訟上ノ救助ハ各審ニ於テ各別ニ之ヲ付與ス第一審ニ於テハ強制執行ニ付テモ之ヲ付與スルモノトス

二九六五

前審ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ受ケタルトキハ上級審ニ於テハ無資力ヲ證スルコトヲ要セズ相手方上訴ヲ提出シタルトキハ上級審ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ求ムル原告若クハ被告ノ權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルヤチ調査スルコトヲ要セ

第九十五條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル條件ノ存セザリシトキ又ハ消滅シタルトキハ何時タリトモ之ヲ取消スコトヲ得

第九十六條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ死亡ト共ニ消滅ス

第九十七條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲ニ左ノ效力ヲ生ス

第一 裁判費用(國庫ノ立替金ヲ包含ス)ヲ濟済スルコトノ假免除

第二 訴訟費用ノ保證ヲ立ツルコトノ免除

第三 送達及ヒ執行行為ヲ爲サシムル爲メ一時無報酬ニテ執達吏ノ附添ヲ求ムル權利受訴裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ一時無報酬ニテ辯護士ノ附添ヲ命スルコトヲ得

第九十八條 訴訟上ノ救助ハ相手方ニ生シタル費用ヲ辨濟スル義務ニ影響ヲ及ボサス

第九十九條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲メ假ニ濟済ヲ免除シタル裁判費用ハ訴訟費用ニ付キ確定裁判ヲ受ケタル相手方又ハ訴若クハ上訴ノ取下、拋棄、認諾若クハ和解ニ因リ訴訟費用ヲ負擔ス可キ相手方ヨリ之ヲ取立ツルコトヲ得

救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ニ附添ヒタル執達吏又ハ辯護士ハ同一ノ條件アルトキハ亦自己ノ權利ニ依リ費用確定ノ方法ヲ以テ其手数料及ヒ立替金ヲ取立ツルコトヲ得

第一百條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害セスシテ費用ノ濟済ヲ爲シ得ルニ至ルトキハ假免除ヲ得タル數額(第九十七條第一號)ヲ直チニ追拂ヒスル義務アリ

第一百一條 裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後訴訟上救助ノ付與竝ニ辯護士附添ノ命令ニ付テノ申請、訴訟上救助ノ取消及ヒ數額追拂ノ義務ニ付キ決定ヲ爲ス

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第一百二條 訴訟上ノ救助ヲ付與シ又ハ其取消ヲ拒ミ若クハ費用追拂ヲ命スルコトヲ拒ム決定ニ對シテハ檢事ニ限り抗告ヲ爲スコトヲ得

辯護士ノ附添ヲ命スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス
訴訟上ノ救助ヲ拒ミ若クハ取消シ又ハ辯護士ノ附添ヲ拒ミ又ハ費用ノ追拂ヲ命スル決定ニ對シテハ原告若クハ被告ハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第三章 訴訟手續

第一節 口頭辯論及ヒ準備書面

第一百三條 判決裁判所ニ於ケル訴訟ニ付テノ當事者ノ辯論ハ口頭ナリトス但此法律ニ於テ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スコトヲ定メタルトキハ此限ニ在ラス

第一百四條 口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備ス

第五百五條 準備書面ニハ左ノ諸件ヲ掲ケ可シ

第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業、住所、裁判所、訴訟物及ヒ附屬書類ノ表示

第二 原告若クハ被告方法廷ニ於テ爲サント欲ズル申立

第三 申立ノ原因タル事實上ノ關係

第四 相手方ノ事實上ノ主張ニ對スル陳述

第五 原告若クハ被告カ事實上主張ノ證明又ハ攻撃ノ爲メ用ヰントスル證據方法及ヒ相手方ノ申出テタル證據方法ニ對スル陳述

第六 原告若クハ被告又ハ其訴訟代理人ノ署名及ヒ捺印

第七 年月日

○準備書面及ヒ判決ニ原告「何某外幾名」ト記載シタル場合ニ於テ其幾名ノ何人ナルヤハ訴狀添附ノ委任狀ニ總體ノ原告氏名住所等存スルヲ以テ訴狀ニ之カ表示ヲ掲ケタルモノト看做スコトヲ得ヘキカ故ニ民事訴訟法第五百五條第一號第九十條第一項第一號及ヒ第二百三十六條第一號ノ規定ニ違背シタルモノト云フヲ得ス

○民事訴訟法第五百五條第六號ニ所謂捺印ニハ必スシモ實印ヲ用ヰルノ規定ナキニ依リ署名者ノ印章ナル上ハ其如何ナルモノヲ使用スルモ訴狀ノ效力ニ影響ヲ及ホスコトナシ

元 元
二 一
二 六

第五百六條 準備書面ニ於テ提出ス可キ事實ハ簡明ニ之ヲ記載ス可シ

此他事實上ノ關係ノ説明並ニ法律上ノ討論ハ書面ニ之ヲ掲グルコトヲ得ス

○訴ヲ以テ契約ノ解除ヲ求ムヘキモノニ非サルモ他ノ請求ト同時ニ訴狀ニ解除ノ意思ヲ併記スルハ妨ケナキモノトス

第五百七條 準備書面ニハ訴訟ヲ爲ス可キ資格ニ付テノ證書ノ原本、正本又ハ謄本其他總テ原告若クハ被告ノ手中ニ存スル證書ニシテ書面中ニ申立ノ原因トシテ引用シタルモノノ謄本ヲ添附ス可シ

證書ノ一部分ノミヲ要用トスルトキハ其冒頭、事件ニ屬スル部分、終尾、日附、署名及ヒ印章ヲ謄寫シタル抄本ヲ添附スルヲ以テ足ル

證書カ既ニ相手方ニ知レタルトキ又ハ大部ナルトキハ其證書ヲ表示シ且相手方ニ之ヲ閱覽セシメント欲スル旨ヲ附記スルヲ以テ足ル

第五百八條 當事者ハ準備書面及ヒ其附屬書類並ニ相手方ニ付與スル爲メ必要ナル謄本ヲ裁判所書記課ニ差出ス可シ

第五百九條 裁判長ハ口頭辯論ヲ開キ且之ヲ指揮ス

裁判長ハ發言ヲ許シ又其命ニ從ハサル者ニ發言ヲ禁スルコトヲ得

裁判長ハ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲サシメ且間斷ナク辯論ノ終了スルコトニ注意ス又必要ナル場合ニ於テハ直チニ辯論續行ノ期日ヲ定ム

裁判所ニ於テ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲セリト認ムルトキハ裁判長ハ口頭辯論ヲ閉ジ及ヒ裁判所ノ判決並ニ決定ヲ宣渡ス

第六十條 口頭辯論ハ當事者ノ申立ヲ爲スニ因リテ始マル

三 四 七

當事者ノ演述ハ事實上及ヒ法律上ノ點ニ於ケル訴訟關係ヲ包括ス可シ
口頭演述ニ換ヘテ書類ヲ採用スルコトヲ許サヌ文字上ノ旨趣ヲ要用トスルトキハ其要
用ナル部分ニ限り之ヲ朗讀スルコトヲ得

○口頭辯論ノ期日當事者ノ一方闕席シ他ノ一方カ出廷シタルトキ調書中
其出廷シタル者カ何等ノ申立ヲ爲シタル事蹟ナキトキハ口頭辯論ハ開
始セラレザルモノト見ルノ外ナシ故ニ其開始ナキニ拘ハラズ職權調査
ノ結果ニ依リ直チニ言渡シタル判決ハ違法ナリ

第百十一條 各當事者ハ相手方ノ主張シタル事實ニ對シ陳述ヲ爲ス可シ

明カニ争ハサル事實ハ原告若クハ被告ノ他ノ陳述ヨリ之ヲ争ハントスル意思カ顯レサ
ルトキハ自白シタルモノト看做ス

不知ノ陳述ハ原告若クハ被告ノ自己ノ行爲ニ非ス又自己ノ實驗シタルモノニモ非サル
事實ニ限り之ヲ許ス此場合ニ於テ不知ヲ以テ答ヘタル事實ハ争ヒタルモノト看做ス

○不知ノ答述ヲ採用シ且ツ判決ノ要點ニ理由ヲ付セザル裁判ハ破毀ノ原
由アルモノトス

○對手者ノ陳述ニ反對若クハ相異ノ點アルニモ拘ハラズ抗辯セザルトキ
ハ民事訴訟法第百十一條第二項ニ依リ其事實ヲ争ハサルモノト看做ス
ヘキモノトス

(同項) 三

三	三	三
二五	一	三
二九	三	二二

明カニ争ハサル所ノ事實ハ自白シタルモノト看做スコトハ法律ノ命スル所ナルヲ以テ明カニ
争フタルノ事實ヲ表示セサル限りハ上告ノ理由トナラス
相手方ノ主張ニ對シ辯駁セザルトキハ之ニ異議ナキモノト看做サルハ訴訟手續上當然ノ結
果ナリトス

第百十二條 裁判長ハ職權上調査ス可キ點ニ關シ相手方ヨリ起サレル疑ノ存スルトキハ
其疑ニ付キ注意ヲ爲スコトヲ得

裁判長ハ問ヲ發シテ不明瞭ナル申立ヲ釋明シ主張シタル事實ノ不十分ナル證明ヲ補充
シ證據方法ヲ申出テ其他事件ノ關係ヲ定ムルニ必要ナル陳述ヲ爲サシム可シ

陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ問ヲ發スルコトヲ得
當事者ハ相手方ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得然レトモ其問ヲ發ス可キ旨ヲ裁判長
ニ求ムルコトヲ得

若シ其問ニ對シテ答ヘス又ハ判然答ヘザルトキハ相手方ノ利益ト爲ル可キ答ヲ爲シタ
ルモノト看做スコトヲ得

○民事訴訟法第百十二條ハ總テ裁判長ニ注意ヲ訓示シタル法條ナレハ之
ニ準據セザルコトアルモ判決ノ瑕疵トナラス

○一定ノ申立ト訴ノ原因ト相副ハサル場合ハ所謂不明瞭ナル申立ナルヲ
以テ裁判所ハ當事者ヲシテ之ヲ釋明セシムルノ任務アリトス

(同項) 三

一定ノ申立ニ對スル辯明ニ因リ訴旨ノ如何ヲ確カメ得ヘキ場合ニ於テ裁判所ハ其辯明ヲ探ラ

三	三	三
二九	三	三
三三	三	三
三六	三	三
三九	三	三

ス單ニ申立ノ文字ニ拘泥シ訴旨ヲ判斷シタルハ不法ナリ
一定ノ申立カ不明瞭ナルトキハ裁判所ハ民事訴訟法第百十二條第二項ノ規定ニ從ヒ其不明瞭
ナル點ヲ釋明セシメタル上判決ヲ爲スニ相當ノ手續ナリトス

第百十三條 事件ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命又ハ裁判長若クハ陪席判事ノ發シタル問ニ
對シ辯論ニ與カル者ヨリ不適當ナリトシテ異議ヲ述ヘタルトキハ裁判所ハ其異議ニ付
キ直チニ裁判ヲ爲ス

第百十四條 裁判所ハ事件ノ關係ヲ明瞭ナラシムル爲メ原告若クハ被告ノ自身出頭ヲ命
スルコトヲ得

○本人訊問ノ決定ヲ爲サスシテ呼出狀ヲ送達シタルハ其當ヲ得サルモ其
期日ニ出頭シ何等ノ異議ヲ述ヘスシテ口頭辯論ヲ爲シタルトキハ毫モ
當事者ノ防禦權利ヲ害スル所ナキヲ以テ之カ爲メ其判決ヲ破毀スルニ
足ラス

第百十五條 裁判所ハ原告若クハ被告ノ採用シタル證書ニシテ其手中ニ存スルモノヲ提
出ス可キヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ外國語ヲ以テ作リタル證書ニ付テハ其譯書ヲ添附ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十六條 裁判所ハ當事者ノ所持スル訴訟記録ニシテ事件ノ辯論及ヒ裁判ニ關スルモ
ノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十七條 裁判所ハ檢證及ヒ鑑定ヲ命スルコトヲ得

此手續ハ申立ニ因リ命スル檢證及ヒ鑑定ニ付テノ規定ニ從フ

二九
三
二
一

三
九
五

○職權ヲ以テ命シタル鑑定人カ宣誓ヲ爲ス際必スシモ當事者ノ立會ヲ要
セス又鑑定人ハ常ニ鑑定書ノ説明ヲ爲サ、ルヘガラサル義務ナシ
○裁判所ハ檢證及ヒ鑑定ヲ命スルノ職權アルヲ以テ縱令當事者ニ於テ援
用セサル檢證調書又ハ鑑定書ヲ心證ニ供スルモ違法ニ非ス

第百十八條 裁判所ハ一箇ノ訴ニ於テ爲シタル數箇ノ請求又ハ本訴及ヒ反訴ニ付テノ辯
論ヲ分離シテ爲ス可キヲ命スルコトヲ得

○訴訟ノ併合審理ヲ命シタル後其決定通り履行セサルトキハ更ニ分離シ
テ審理スヘキコトヲ命スルハ當然ナルモ此手續ヲ爲サズ分離ノ上審理
判決シタリトテ訴訟手續ニ違背シタルモノト云フヲ得ス

○適法ナル訴ニ附帶シ不適法ナル請求ヲ併セ之ヲ提起シタル場合ニ於テ
裁判所ハ之ヲ分離シテ其不適法ナル請求ノ一部ノ訴ヲ却下シ他ノ適法
ナル請求ノ本案ニ對シ審判ヲ爲スハ妨ケナキモノトス

第百十九條 同一ノ請求ニ關シ數箇ノ獨立ナル攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ提出シタルトキハ
裁判所ハ先ツ辯論ヲ其一二ニ制限ス可キヲ命スルコトヲ得

○民事訴訟法ニ所謂數箇ノ獨立ナル攻撃又ハ防禦ノ方法トハ執レモ相互
ニ相對的無關係ナル法律上ノ判斷ヲ爲サシムルモノヲ云フ故ニ辯論中
ハ訴訟ノ如何ナル程度ニアルヲ問ハス民事訴訟法第百十九條ノ規定ニ

二六
三
三
四
七
三
五
六
二
四

從ヒ何時ニテモ之ヲ制限シ得ヘク又辯論ノ終結後ハ同法第二百三十條第二項ノ規定ニ依リ其間適切ナリト思料スル一箇ニ對シテノミ判斷ヲ與フルコトヲ得ヘシ

第二百十條 裁判所ハ同一ノ人又ハ別異ノ人ノ數箇ノ訴訟ニシテ其裁判所ニ繫屬スルモノノ辯論及ヒ裁判ヲ併合ス可キヲ命スルコトヲ得但其訴訟ノ目的物タル請求ヲ元來一箇ノ訴ニ於テ主張シ得ヘキトキニ限ル

○民事訴訟法第四十八條ハ當事者ニ訴訟ノ併合ヲ許シ同法第二百十條ハ裁判所ニ訴訟ノ併合ヲ許シタル規定ニ係レリ此規定ニ基キ訴訟ヲ併合シタル結果ハ兩者同一ノ效力ニ歸ス便チ第一審裁判所カ右第二百十條ノ規定ニ依リ併合ヲ命シ審理ノ未一通ノ判決文ヲ以テ裁判ヲ言渡シタルハ固ヨリ相當ナリ其敗訴者カ之ニ對シ一通ノ控訴狀ヲ以テ控訴ヲ提起シタルモ亦適法ナリ然ルニ原院カ之ヲ同法第四百十九條ノ形式ニ從ハサル不適法ノ控訴トシテ排斥シタルハ法律ニ違背シタル失當ノ裁判ナリ

○訴ノ併合ハ原告カ同一ノ被告ニ對スル數箇ノ請求アル場合ニ限ラス又別異ノ人ニ對スル數箇ノ訴訟ト雖モ其請求カ元來一箇ノ訴ニ於テ主張シ得ヘキモノナルトキハ之ヲ爲スコトヲ得

三	二	三
二七	〇	五五九
二九	六	七

○廢戶主義子離別及ヒ復籍ノ請求ヲ爲スモ廢戶主及ヒ復籍ハ離別ノ結果ナルニ依リ訴訟ノ併合アリト云フヲ得ス

○遺産相續登記ノ取消並ニ地所賣買登記ノ取消ヲ請求スル訴ハ明治二十三年法律第四百號第三條但書ニ該當セサルヲ以テ離縁ノ訴ト併合ヲ許スヘキモノニ非ス

第二百十條 裁判所ハ訴訟ノ全部又ハ一分ノ裁判カ他ノ繫屬スル訴訟ニ於テ定マル可キ權利關係ノ成立又ハ不成立ニ繫ルトキハ他ノ訴訟ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ

○當事者間ノ係争目的物件ニ對シ其所有權ヲ主張シ之カ名義切換ヲ請求スル主參加申立アルトキハ本訴訟ノ辯論ハ民事訴訟法第五十二條第一項ニ依ルモ又ハ同法第二百一十一條ノ規定ニ依ルモ主參加訴訟ノ完結ニ至ルマテ之ヲ中止スルヲ相當トス

○養嗣子カ相續人ノ資格ヲ以テ財産上ノ訴ヲ提起シタル場合ニ於テ他ニ其相續權ノ有無ニ付キ訴訟カ繫屬シアルトキハ裁判所ハ民事訴訟法第二百一十一條ニ依リ右相續權ノ有無ニ關スル訴訟ノ完結ニ至ルマテ財産上ノ訴ノ辯論ヲ中止スルヲ得ヘキモノトス

第二百十二條 裁判所ハ民事訴訟中罰ス可キ行爲ノ嫌疑生ズルトキハ刑事訴訟手續ノ完

二九	二〇	一
二六	一	七二
三〇	五	五〇
二九	一〇	四

第三至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ但其間ニ可キ行為ガ訴訟ノ裁判ニ影響ヲ及ホストキニ限ル

○民事訴訟中刑事訴訟起リタルトキハ刑事判決ノ確定ニ至ルマテ民事訴訟ヲ中止スヘシ

第二百二十三條 裁判所ハ分離者クハ併合ニ關シ發シタル命令ヲ取消スコトヲ得

第二百二十四條 裁判所ハ附テタル辯論ノ再開ヲ命スルコトヲ得

○口頭辯論ノ再開ヲ命シ新期日ヲ指定シテ當事者ニ呼出狀ヲ送達シタル以上ハ縱令再開ヲ命シタル理由消滅シテ再開ノ必要ナキニ至ルト雖モ仍ホ當事者ヲシテ口頭辯論ヲ爲サシメタル後ニ非サレハ判決ヲ爲スヲ得ス

○口頭辯論終結後ニ於ケル辯論ノ再開ハ裁判所ノ職權ニ屬スルヲ以テ縱令當事者ヨリ提出シタル辯論再開ノ申請ヲ却下スルモ之ニ對シ抗告スルヲ得サルモノトス

第二百二十五條 裁判所ハ辯論ニ與カル者日本語ニ通セサルトキハ通事ヲ立會ハシム但裁判所構成法第十八條ノ場合ハ此限ニ在ラス

第二百二十六條 裁判所ハ辯論ニ與カル者雖又ハ哑ナルトキ之ニ文字ヲ以テ理會セシムルコトヲ得サル場合ニ限り通事ヲ立會ハシムルコトヲ得

第二百二十七條 裁判所ハ相當ノ演述ヲ爲ス能力ノ缺ケタル原告若クハ被告又ハ訴訟代理人若クハ輔佐人ニ其後ノ演述ヲ禁シ且新期日ヲ定メ辯護士ヲシテ演述セシム可キコトヲ命ス可シ

裁判所ハ裁判所ニ於テ辯論ヲ業トスル訴訟代理人若クハ輔佐人ヲ退斥セシムルコトヲ得此場合ニ於テハ新期日ヲ定メ且退斥ノ決定ヲ原告若クハ被告ニ送達ス可シ
本條ノ規定ニ從ヒ爲シタル命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス
辯護士ニハ本條ノ規定ヲ適用セス

第二百二十八條 辯論ニ與カル者秩序維持ノ爲メ辯論ノ場所ヨリ退斥セラレタルトキハ申立ニ因リ本人ノ任意ニ退去シタルト同一ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得但裁判所構成法第九十條ニ依リ中止シタル場合ハ此限ニ在ラス
前條ノ場合ニ於テ禁止又ハ退斥ノ命令ヲ受ケタル者再ヒ出頭スルトキハ前項ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得

第二百二十九條 口頭辯論ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

調書ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

- 第一 辯論ノ場所、年月日
- 第二 判事、裁判所書記及ヒ立會ヒタル檢事若クハ通事ノ氏名
- 第三 訴訟物及ヒ當事者ノ氏名
- 第四 出頭シタル當事者、法律上代理人、訴訟代理人及ヒ輔佐人ノ氏名若シ原告若クハ被告兩席シタルトキハ其兩席シタルコト
- 第五 公ニ辯論ヲ爲シ又ハ公開ヲ禁シタルコト

○口頭辯論各期日ニ作成セル數箇ノ辯論調書ニ通シ單ニ一回ノミ裁判長

二四	一	一〇三
二五	一	一〇四
二六	一	一〇五
二七	一	一〇六
二八	一	一〇七
二九	一	一〇八
三〇	一	一〇九
三一	一	一一〇
三二	一	一一一
三三	一	一一二
三四	一	一一三
三五	一	一一四

及ヒ裁判所書記ニ於テ署名捺印スルモ其調書ヲ無効ナリト云フヲ得ス
 ○裁判所書記カ數回ノ口頭辯論調書ヲ一貫シ裁判言渡ノ日ニ於テ作成シ
 毎回作成セサルモ調書ハ無効トナラス
 ○判決言渡ハ常ニ公行スヘキモノナルカ故ニ辯論調書ニ其公行ノコト記
 載ナキモ違法ニ非ス
 ○裁判所書記カ各期日ニ辯論調書ヲ作成セサルモ其判決ニ影響ヲ及ホサ
 サル限リハ上告ノ理由トナラス
 ○法廷調書ハ各箇ノ辯論ニ付キ當事者ノ陳述アルニ從ヒ其時々書記之ヲ
 作成シ裁判長檢閱ノ上署名捺印スヘキモノニシテ草稿ニ依リ事後ニ作
 成スルコトヲ得ス
 ○法廷調書カ其作成ニ關スル規定ニ違背セル不法アルモ之カ爲メ特ニ不
 利益ヲ受ケタリトノ舉證ナキ以上ハ原裁判破毀ノ理由トナルヘキモノ
 ニ非ス
 ○口頭辯論調書ニ書記ノ出廷シタルコトノ明記ナキモ其調書ヲ作成シタ
 ル書記ノ署名捺印アル以上ハ當然出廷シタルモノト認ムルヲ得ヘシ
 ○口頭辯論調書ニハ合議裁判所ノ評議ノ顛末ヲ記載スヘキモノニ非サル
 カ故ニ特ニ合議ヲ爲シタル旨ノ記載ナキモ之ヲ以テ裁判長カ單獨ニテ

二九	一〇	四	五	五	四
三〇	六	六	五	五	四
三一	三	三	五	五	四
三二	一	三	五	五	四
三三	九	三	五	五	四
三四	八〇	三	五	五	四
三五	九	三	五	五	四

裁判ヲ爲シタルモノト論斷スルヲ得ス

○裁判言渡ハ裁判所構成法第百五條ノ規定ニ基キ常ニ公行スルモノナレ
 ハ其判決言渡ノ調書ニ公開シタル旨ノ記載ナキノ故ヲ以テ其判決言渡
 ハ公行セサルモノト攻撃スルハ謂レナキモノトス

第百三十條

辯論ノ進行ニ付テハ其要領ノミチ調書ニ記載ス可シ

調書ニ記載シテ明確ニス可キ諸件ハ左ノ如シ

- 第一 自白、認諾、拋棄及ヒ和解
- 第二 明確ニス可キ規定アル申立及ヒ陳述
- 第三 證人及ヒ鑑定人ノ供述但其供述ハ以前聽カサルモノナルトキ又ハ以前ノ供述
ニ異ナルトキニ限ル
- 第四 檢證ノ結果
- 第五 書面ニ作り調書ニ添附セサル裁判(判決、決定及ヒ命令)
- 第六 裁判ノ言渡

附録トシテ調書ニ添附シ且調書ニ附録トシテ表示シタル書類ニ於ケル記載ハ調書ニ於
ケル記載ニ同シ

○當事者ノ辯論カ民事訴訟法第百三十條ニ規定セル調書ニ記載シテ明確
 ニスヘキ事項ニ非サルトキハ其辯論カ調書ニ記載ナケレハトテ之ニ據
 テ判決ヲ下スモ當事者ノ申立テサルモノト爲スヲ得ス
 ○調書ニ添附スヘキ書面ニ基キテ演述シタル事項ハ悉ク之ヲ調書ニ記載

三三	四	五	七〇
三四	五	七〇	
三五	二	二七	
三六	二	二七	

スルヲ要セサルモノナルカ故ニ調書ニ各自割合ノ記載ナキヲ以テ一定ノ申立ヲシトノ論告ハ上告ノ理由ナキモノトス

○民事訴訟法第三百三十條中ニ所謂要領ノ中ニハ一定ノ申立ヲ包含スト雖モ其申立ヲ書面ニ基キ爲シタル事ノ記載ヲ命スルモノニ非ス

○一定ノ申立ハ辯論調書ニ記載シテ明確ナラシムルノ規定ナシ故ニ書面ノ提出アル上ハ口頭ニテモ尙ホ之ヲ申立テタルモノト爲サ、ルヲ得ス

○第二回ノ口頭辯論ニ際シ判事ニ變更アリ其變更後當事者カ更ニ第一回調書ニ記載アル如キ申立ヲ爲シタル事蹟存セサルトキハ第一回辯論ノ際爲シタル申立ハ裁判所ニ於テ認メラルヘキ道理ナシ

○裁判ノ言渡ハ調書ニ於テ明確ニ爲スヘキモノナリト雖モ單ニ之ヲ言渡シタリトノコトヲ記載スレハ足り裁判ノ結果マテモ記載スルヲ要スルモノニ非ス

○適法ニ調製セラレタル認廷調書中縱令當事者ノ一方カ一旦爲シタル申立及ヒ陳述等ヲ取消ス旨記載アルモ之カ爲メ調書自體ヲ無効ニ歸セシムルコトナシ

○口頭辯論調書中證據調ノ決定ニ付キ裁判所カ合議ヲ以テ之ヲ爲シタル旨ノ記載ナキモ合議裁判所ノ決定ハ固ヨリ合議ヲ以テ爲スヘキモノナ

レハ反對ノ事跡ノ存セサル上ハ合議ニ因リテ爲シタルモノト認ムヘキモノナリ

○證據ノ認否ハ調書ニ記載シテ明確ニスヘキ事項ニ非ス

(同五時)

證據ノ調査及ヒ認否ハ口頭辯論調書ニ記載シテ明確ニスヘキ事項ニ非ス

○證據ヲ援用シタルヤ否ヤノ如キハ辯論調書ニ載セテ明確ニスヘキ事項ニ非サレハ其記載ナキヲ以テ當事者カ援用セサリシモノト云フヲ得ス

(同五時)

事實上ノ申述即チ其申立ハ調書ニ記載シテ明確ニスヘキ事項ニ屬セサルヲ以テ其記載ナキ爲メ之カ申立ナカリシモノト云フヲ得ス

判決ノ事實摘示ニハ裁判所ニ於テ其判決ニ影響アリト認メタルト否トニ拘ハラズ必要ト不必要トヲ區別メス當事者カ口頭辯論ニ基キ演述シタル一定ノ申立一定ノ原因證據申出證據ノ結果等ヲ盡ク載スヘキモノニシテ之ニ反シ法廷調書ニハ一々之ヲ記載スヘキモノニ非ス故ニ調書ニ記載ナキコトヲ證據トシテ其申述ナカリシモノト云フヲ得ス又隨テ事實摘示ニ記載アル事項ヲ以テ直チニ其記載ノミニ因リ心證判斷ノ標準トナリタルモノト云フヲ得ス

○自白認諾拋棄及ヒ和解其他調書ニ記載シテ明確ニスヘキ諸件ヲ明確ニセサルトキハ判文中ニ其事ノ記載アルモ之ヲ以テ適法ニ陳述アリシモノト看做スコトヲ得ス

民事訴訟法 第三百三十條

三三七

三三六

三六	三〇	二〇六
三六	三三	二六
三六	四	一〇三
三三	三	二九
三三	三	四三
三三	九	九
三三	九	九
三三	九	八
三三	一	六一
三三	二	四
三三	五	六三
三四	四	七三

第三百三十一條 前條第一號乃至第四號ニ掲ケタル調書ノ部分ハ法廷ニ於テ之ヲ關係人ニ

讀聞カセ又ハ閱覽ノ爲メ之ヲ關係人ニ示ス

調書ニハ前項ノ手續ヲ履ミタルコト及ヒ承諾ヲ爲シタルコト又ハ承諾ヲ拒ミタル理由

ヲ附記ス可シ

○調書ニ記載シテ明確ニスヘキ證人ノ供述ヲ關係人ニ讀聞カセ又ハ閱覽セシムルノ手續ヲ缺クモ之カ爲メ口頭辯論調書ハ全然無効トナルヘキモノニ非ス

(同左)

民事訴訟法第三百三十一條ノ規定ニ於テ特ニ調書ヲ關係人ニ讀聞カセ又ハ閱覽セシムヘキモノヲ讀聞カセ又ハ閱覽セシメサル場合其關係人ヨリ異議ノ申立アルトキト雖モ其部分ニ限リ證據力ヲ失フコトアルヘキノミニシテ之カ爲メ調書全部ノ無効ヲ惹起スヘキ筋ナシ故ニ調書ハ之ヲ讀ミ聞セサルモ之ヲ示サトルモ無効タルヘキモノニ非ス

○口頭辯論調書ニ民事訴訟法第三百三十條第二項第一號乃至第四號ノ事項ヲ掲ケサル場合ニ於テハ必スシモ之ヲ當事者ニ讀聞ケ又ハ閱覽セシムルコトヲ要セス

(同左)

口頭辯論調書ニ於テ明確ニスルノ必要ナキ事項ハ當事者ニ讀聞カセ又ハ閱覽セシムルヲ要セス

口頭辯論調書中自白其他調書ニ記載シテ明確ニスヘキ事項記載ナキトキハ當事者ニ之ヲ讀聞

三〇四五

二七〇五七

三二四

二六三二

三三九

○民事訴訟法第三百三十一條第二項ハ同第三百三十條第一號乃至第四號ニ掲ケタル調書ノ部分ハ法廷ニ於テ之ヲ關係人ニ讀聞カセ又ハ閱覽ノ爲メ

之ヲ關係人ニ示シタルコト及ヒ諾否ノ理由ヲ附記スルヲ可トスルノ法意ニシテ之カ附記ヲ爲サハルモ無効ト云フヘカラス

○臨檢調書ニ關係人ニ讀聞カセ若クハ閱覽セシメタルコト及ヒ其手續ヲ履ミタルコト等ノ記載ナキハ違法ナリト雖モ上告人カ之ニ關シ原審ニ於テ異議ヲ留ムルニ非サレハ以テ上告ノ理由ト爲スナ得ス

第三百三十二條

調書ニハ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ
裁判長差支アルトキハ官等最モ高キ陪席判事之ニ代リ署名捺印ス區裁判所判事差支アルトキハ其裁判所書記ノ署名捺印ヲ以テ足ル

○口頭辯論調書ハ裁判長及ヒ書記ノ署名捺印ヲ數日ノ後ニ爲スモ其調書

民事訴訟法 第三百三十二條

二二九

二六四五

二六五二

二九三

三二五

二六〇三

三三六五

タルノ效力ヲ失ハス

○口頭辯論調書ニ於ケル裁判長ノ署名ハ書記ノ署名ト同時ニ爲スヲ要セ
ス從テ署名ノ日時裁判長差支アルトキハ他ノ判事之ニ代リテ署名スル
モ可ナリ

○二次以上口頭辯論ヲ開キタルトキ最初ノ調書ニハ裁判官書記ノ署名捺
印ナク最終ノ調書ニハ其署名捺印アルハ調書作成ニ關シ相當ノ手續
ヲ欠キタルモノナルモ其記載事項ハ通シテ認證セラレタルモノニシテ
且之カ爲メ調書ヲ無効タラシムル制裁ナキニ依リ調書ナクシテ裁判ヲ
爲シタル不法アリト云フヲ得ス

○裁判長ノ署名捺印ナキ證人訊問調書ハ民事訴訟法ノ規定ニ適セサル調
書ナルコトハ勿論ナレトモ裁判所書記ノ署名捺印アルトキハ當然無効
ノモノニ非ス同法第三百三十四條ノ場合ヲ除外其調書ニ記載シタル事
項ハ裁判所ノ心證ヲ以テ採否ヲ決スヘキモノトス

第三百三十三條 受命判事若クハ受託判事又ハ區裁判所判事が法廷外ニ於テ爲ス審問ニモ
亦裁判所書記ヲ立會ハシム
前四條ノ規定ハ右ノ審問調書ニ之ヲ準用ス
第三百三十四條 口頭辯論ノ爲メ規定シタル方式ノ遵守ハ調書ヲ以テノミ之ヲ證スルコト
ヲ得

二九	四
二九	六
三〇	三〇
三一	五
三二	二四
三四	九
	一六五

○口頭辯論調書ハ一ノ書證タルニ過キササルヲ以テ裁判長ノ名下ニ捺印ナ
ケレハトテ爲メニ其裁判ヲ不法視スルヲ得ス然レトモ若シ口頭辯論調
書ヲ以テスルニ非サレハ證明スルコトヲ得サル事項例ヘハ自認諾拋
棄及ヒ和解(民訴二二〇條一號)ニ基キ判決ヲ爲シタル場合ノ如キニ在
テハ其判決ノ基因タル事項ヲ證スル證據ヲ缺クニ至ルヘキヲ以テ從テ
其判決ノ不法タルニ至ルコトアルヘキモ單ニ裁判長ノ捺印ヲ缺クカ故
ニ原判決不法ナリトノ論告ハ未タ以テ破毀ノ理由ト爲スニ足ラス

二七	〇
二七	三五
三〇	一〇
三〇	七

○口頭辯論調書ノ末尾ニ裁判所書記ノ署名捺印アルモ其辯論ニ列席シタ
ル旨ノ記載ナキトキハ必要ノ方式ヲ遵守セサル不法アルモノトス
○裁判所書記ノ署名捺印ノミニテ裁判長ノ署名捺印ナキ口頭辯論調書ハ
民事訴訟法第三百三十四條ニ規定シタル證明ノ效力ヲ有セサルモノトス
從テ該調書ニ記載シタル鑑定人ノ鑑定ヲ判斷ノ資料ニ供シタル判決ハ
不法ナリ
○同一ノ法廷調書ニ列席判事ノ異動ナキ記載ト裁判長カ判事ニ異動アル
旨ヲ告テ辯論ヲ更新シタルコトヲ記載ト二箇相牴觸セル記載アルトキ

三三	二
三三	一
三四	五
三五	七

ハ其辯論ニ臨席シタル判事ヲ確知スルニ由ナキヲ以テ破毀スヘキ違法ナルモノトス

○判決ノ基本タル口頭辯論ニ判事カ臨席シタル事實ヲ證明スルハ方式ノ遵守ヲ證明スルニ外ナラサレハ必スヤ調書ヲ以テスルコトヲ要ス

○自白認諾拋棄及ヒ和解其他調書ニ記載シテ明確ニスヘキ諸件ヲ明確ニセザルトキハ判文中ニ其事ノ記載アルモ之ヲ以テ適法ニ陳述アリシモノト看做スコトヲ得ス

○民事訴訟法第三百二十二條ノ規定ニ從ヒ署名捺印スヘキ場合ニ署名ヲ爲シ押印セスシテ華押ヲ爲スハ該規定ニ違背スル瑕瑾タルヲ免カレサルモ其瑕瑾ハ口頭辯論ノ際方式ヲ遵守セザル旨ノ攻撃アリタル場合ニ右ノ調書ヲ以テ其遵守ヲ證明シ得サルノ結果ヲ生スルニ過キス

○口頭辯論ノ爲メ規定シタル方式ノ遵守ハ調書ヲ以テノミ之ヲ證シ得ルニ依リ第一審裁判所ノ法廷調書中判決ノ言渡ヲ爲シタル記載ナキニ於テハ判決ノ言渡シタルモノト認ムルニ由ナシ

(同法第)

判決ノ言渡等ノ爲メ規定シタル方式ノ遵守ニ付テハ其調書ヲ以テノミ證明スヘク決シテ證人ヲ以テ證明スヘキモノニ非ス

三	三	三	三	三
五	四	四	四	五
一〇三	三二	七	五	一七四
二	四	一〇〇	四	四
四	一	四	一	一

第三百二十五條

此法律ニ從ヒ口頭ヲ以テ訴、抗告、申立、申請及ヒ陳述ヲ爲シ又ハ證言ヲ拒ム場合ニ於テハ裁判所書記ハ其調書ヲ作ル可シ

第二節 送達

○方式ノ送達ヲ受ケサルモ甘シテ之カ答辯ヲ爲スハ之ヲ受クルモノ、隨意タリ決シテ法ノ禁スル所ニ非ス又控訴ヲ爲スノ委任ヲ爲シタル以上ハ相手方ノ附帶控訴ニ對シ反對ノ意思アルコト自ラ明瞭ナルニ於テハ民事訴訟法第六十五條第一項ニ屬スヘキモノニシテ敢テ特別ノ委任ヲ要セス

○期日呼出狀ヲ訴訟代理人ニ送達シタル後其代理人辭任スルモ呼出狀ハ當然本人ニ對シ其效力ヲ有スルモノトス

○數人宛ニテ一通ノ書類ヲ送達スルハ有效ノ送達ニ非ストスルヲ以テ本則ト爲ス

○送達ハ書類ノ交付ヲ確的ナラシムル方法ニ過キサレハ送達ヲ受クヘキモノニ於テ手續ノ違法ナルニモ拘ハラヌ之ヲ受ケタルトキハ其送達ハ有效ナリトス

○送達吏ノ送達手續上ニ瑕瑾アルモ受領者カ之ヲ有效トシテ受領シ之ニ基キ訴訟行爲ヲ爲シタル上ハ其相手方ニ於テ其送達ヲ無効トシ得ヘキ

二七	三	三	三
〇	五	八	八
二六八	三三	一四	一四
一	一	一	一
一	一	一	一

モノニ非ス

(同筆書)

送達吏カ書類ノ送達手續上瑕疵アルトキト雖モ受領者カ有效トシテ之ヲ受領シ之ニ基キ訴訟行爲ヲ爲シタル上ハ相手方ニ於テ其送達ヲ無効視スルヲ得ス

○送達受取ノ委任ニ付テハ必スシモ訴訟行爲ヲ爲ス者ニ限ルヘカラサルコトハ民事訴訟法第三百三十六條乃至第五百五十八條ノ規定スル所ニ由リテ明カナリトス

○訴訟ノ當事者カ訴訟ニ關スル書類ノ送達ヲ受取ルカ如キハ一般代理ノ原則ニ從ヒ何人ニ之ヲ代理セシムルモ妨ナシ

第三百三十六條 送達ハ裁判所書記職權ヲ以テ之ヲ爲サシム

裁判所書記ハ執達吏ニ送達ノ施行ヲ委任シ又ハ送達ヲ施行ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ書記ニ送達ノ施行ヲ執達吏ニ委任ス可キコトヲ囑託ス

裁判所書記ハ郵便ニ依リテモ送達ヲ爲サシムルコトヲ得

第二項ノ場合ニ於テハ執達吏又第三項ノ場合ニ於テハ郵便配達人ヲ以下ニ規定スル送達吏ト爲ス

第三百三十七條 送達ハ其送達ス可キ書類ノ正本又ハ認證シタル謄本ヲ交付ス可キ規定アルトキハ其正本又ハ其謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲シ其他ノ場合ニ於テハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲ス

原告若クハ被告數人ノ代理人ニ爲シ又ハ同一ナル原告若クハ被告ノ代理人數人中ノ一

人ニ爲ス可キ送達ハ謄本又ハ正本ノ一通ヲ交付スルヲ以テ足ル

第三百三十八條 訴訟能力ヲ有セサル原告若クハ被告ニ對スル送達ハ其法律上代理人ニ之ヲ爲ス

公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘ又ハ訴ヘラルルコトヲ得ル會社又ハ社團ニ對スル送達ハ其首長又ハ事務擔當者ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル

數人ノ首長若クハ事務擔當者アル場合ニ於テハ送達ハ其一人ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル

第三百三十九條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人、軍屬ニ對スル送達ハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ之ヲ爲ス

第四百十條 囚人ニ對スル送達ハ監獄署ノ首長ニ之ヲ爲ス

第四百十一條 送達ハ財産權上ノ訴訟ニ付テハ總理代人ニ之ヲ爲シ又商業上ヨリ生シタル訴訟ニ付テハ代務人ニ之ヲ爲スヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタルト同一ノ效力ヲ有ス

第四百十二條 訴訟代理人アルトキハ送達ハ其代理人委任ノ旨趣ニ依リ原告若クハ被告ノ代理ヲ爲ス權ヲ有スルトキニ限り其代理人ニ之ヲ爲ス

然レトモ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタル送達ハ其訴訟代理人アルトキト雖モ效力ヲ有ス

第四百十三條 受訴裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサル原告若クハ被告ハ其所在地ニ假住所ヲ選定シテ之ヲ届出ツ可シ
假住所選定ノ届出ハ遅クとも最近ノ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲シ又其前ニ書面ヲ差出ストキハ其書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

三九	二	一
三〇	八	二九
三四	〇	一〇八

前項ノ届出ヲ爲ササルトキハ裁判所書記又ハ其委任ヲ受ケタル吏員交付ス可キ書類ヲ原告若クハ被告ノ名宛ニテ郵便ニ付シテ送達ヲ爲スコトヲ得此送達ハ其書類ノ原告若クハ被告ニ到達スルト否トテ問ハス又何時ニ到達スルトテ問ハス郵便ニ付シタル時ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

○訴訟書類ヲ假住所ニ送達シタルトキハ其場所ニ於テ相當ノ人ニ送達セラルモノト推定スヘキヲ以テ其送達ノ不適法ヲ主張スル者ハ之カ證明ヲ爲スヘキ責任アリ

○民事訴訟法第四百四十三條第一項ニ則リ假住所ノ届出ヲ爲シタルモノハ送達ニ關シテノミ其届出テタル場所ニ住所ヲ有スルモノト看做サルニ止マル

第四百四十四條 送達ハ何レノ地ヲ問ハス送達ヲ受ク可キ人ニ出會ヒタル地ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得然レトモ其人カ其地ニ住居又ハ事務所ヲ有スルトキ其住居又ハ事務所ノ外ニ於テ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリシトキニ限り效力ヲ有ス

第四百三十八條第二項ノ場合ニ於テ特別ノ事務所アルトキハ其事務所ノ外ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリシトキニ限り效力ヲ有ス

第四百四十五條 送達ヲ受ク可キ人ニ住居ニ於テ出會ハサルトキハ其住居ニ於テスル送達ハ成長シタル同居ノ親族又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得此規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ其送達ハ交付ス可キ書類ヲ其地ノ市

二九四七〇

三四一〇五

町村長ニ預置キ送達ノ告知書ヲ作り之ヲ住居ノ戸ニ貼附シ且近隣ニ住居スル者二人ニ其旨ヲ口頭ヲ以テ通知シテ之ヲ爲スコトヲ得

○書類ノ送達ニ付キ現ニ之ヲ受取ル者カ其送達ヲ受クヘキ本人ノ同居親族ナリトシテ受領スル上ハ執達吏ニ於テ特ニ其關係ヲ調査スルノ責務ナク又署名代書ノコトヲ記スルハ送達ニ付テノ必要條件ニ非ス

二九四二六

第四百四十六條 住居ノ外ニ事務所ヲ有スル人ニ對スル送達ハ事務所ニ於テ之ニ出會ハサルトキハ其事務所ニ在ル營業使用人ニ之ヲ爲スコトヲ得此規定ハ辯護士ニモ亦之ヲ適用ス但此場合ニ於ケル送達ハ筆生ニモ亦之ヲ爲スコトヲ得

第四百四十七條 第四百三十八條第二項ノ場合ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ事務所ニ於テ出會ハス又ハ此等ノ者受取ニ付キ差支アルトキハ送達ハ事務所ニ在ル他ノ役員又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

第四百四十八條 前二條ノ規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ第四百四十五條第二項ニ準シ送達ヲ爲スコシ但住居ニ於ケル送達ヲ施行スルヲ得サルコトノ明白ナルトキニ限ル

前項ノ場合ニ於テハ送達告知書ノ貼附ハ事務所又ハ住居ノ戸ニ之ヲ爲ス

第四百四十九條 法律上ノ理由ナクシテ送達ノ受取ヲ拒ムトキハ交付ス可キ書類ヲ送達ノ場所ニ差置ク可シ

第五百十條 日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニハ執達吏ノ爲ス可キ送達ハ裁判官ノ許可ヲ得ルトキニ限り之ヲ施行スルコトニ得

前項ノ規定ハ郵便ニ付シテ爲ス送達ヲ除ク外ハ夜間ニ爲ス可キ送達ニ之ヲ適用ス夜間トハ日没ヨリ日出マテノ時間ヲ謂フ

右ノ許可ハ受訴裁判所ノ裁判長又ハ送達ヲ爲ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ判事之ヲ與ヘ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ完結ス可キ事件ニ在テハ其判事之ヲ與フ

許可ノ命令ハ認證シタル謄本ヲ以テ送達ノ際之ヲ交付ス可シ
本條ノ規定ヲ遵守セサル送達ハ之ヲ受取リタルトキニ限り效力ヲ有ス

第五百五十一條 送達ニ付テハ之ヲ施行スル吏員ハ送達ノ場所、年月日時、方法及ヒ受取人ノ受取證竝ニ送達吏ノ署名捺印ヲ具備スル證書ヲ作ルコトヲ要ス

受取人受取ヲ拒ミ若クハ受取證ヲ出タスコトヲ拒ミタルトキ又ハ受取證ヲ作ルコト能ハサル旨ヲ述フルトキハ之ヲ送達證書ニ記載ス可シ

第四百十三條第三項ノ場合ニ於テハ郵便ニ付シタル吏員ノ報告書ヲ以テ送達ノ證ト爲スニ足ル

○執達吏代理人ヲシテ書類ヲ送達セシムル場合其送達狀ニ執達吏代理人ノ署名捺印アルニ於テハ必スシモ執達吏本人ノ氏名ヲ記載スルノ要ナシ

○執達吏カ送達證書ニ署名セス其氏名ヲ刻シタル板木ヲ以テ之ニ代用スルハ違法ナルヲ以テ被送達者ハ送達ノ書類ヲ受取ルコトヲ拒ミ得ベキモ一旦異議ヲ留メスシテ之ヲ受取リタル以上ハ後日ニ至リ送達ノ手續ニ對シ異議ヲ主張スルヲ得ス

三四
三六
三七

第五百五十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使館ノ官吏竝ニ其家族、從者ニ對スル送達ハ外務大臣ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第五百五十三條 前條ノ場合ヲ除ク外外國ニ於テ施行ス可キ送達ハ外國ノ管轄官廳又ハ外國ニ駐在スル帝國ノ公使又ハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第五百五十四條 出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル軍艦ノ乗組員ニ屬スル人ニ對スル送達ハ上班司令官廳ニ囑託シテ之ヲ爲スコトヲ得

第五百五十五條 前三條ノ場合ニ於テ必要ナル囑託書ハ受訴裁判所ノ裁判長之ヲ發ス送達ハ囑託ヲ受ケタル官廳又ハ官吏ノ送達施行濟ノ證書ヲ以テ之ヲ證ス

第五百五十六條 原告若クハ被告ノ所在地知レサルトキ又ハ外國ニ於テ爲ス可キ送達ニ付テハ其規定ニ從フコト能ハス若クハ之ニ從フモ其效ナキコトヲ豫知スルトキハ其送達ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第五百五十七條 公示送達ハ原告若クハ被告ノ申立ニ因リ裁判所ノ命ヲ以テ裁判所書記之ヲ取扱フ

此送達ハ交付ス可キ書類ヲ裁判所ノ揭示板ニ貼附シテ之ヲ爲ス判決及ヒ決定ニ在テハ其裁判ノ部分ノミヲ貼附ス可シ

右ノ外裁判所ハ送達ス可キ書類ノ抄本チ一箇又ハ數箇ノ新聞紙ニ一回又ハ數回掲載ス可キヲ命スルコトヲ得其抄本ニハ裁判所、當事者竝ニ訴訟物及ヒ送達ス可キ書類ノ要旨ヲ掲グルコトヲ要ス

第五百五十八條 公示送達ハ書類ノ貼附ヨリ十四日ヲ經過シタル日ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス然レトモ裁判所ハ公示送達ヲ命スルニ際シ此ヨリ長キ期間ヲ必要トスルト

キハ相當ナル期間ヲ定ムルコトヲ得
同一ノ事件ニ付キ同一ノ原告若クハ被告ニ對シテ爲ス其後ノ公示送達ハ貼附ヲ以テ之
ヲ爲シタルモノト看做ス

第三節 期日及ヒ期間

○民事訴訟法第六十一條ノ規定ニ則リ期日ノ呼出ヲ爲シタル後其期日
ヲ變更スル場合ニ其變更ノ決定書ヲ送達スルヲ以テ足レリト爲スコト
ハ各裁判所ノ慣例ナリ

第五百五十九條 期日ハ裁判長日及ヒ時ヲ以テ之ヲ定ム

○當事者カ期日ヲ記入シテ期日變更ノ申請書ヲ提出シタルトキト雖モ裁
判長ハ尙ホ期日ヲ定メ合式ノ呼出ヲ爲サ、ルヘカラス

第六十條 期日ハ已ムヲ得サル場合ニ限リ日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニ之ヲ定ムルコ
トヲ得

第六十一條 期日ニ付テノ呼出ハ裁判長ノ命ニ從ヒ裁判所書記正本ノ送達ヲ以テ之ヲ
爲ス但在延シタル者ニ期日ヲ定メ出頭ヲ命シタルトキハ之ヲ送達スルコトヲ要セス

○當事者カ合意上辯論期日ヲ記入セル期日變更願ヲ裁判所ニ提出スルモ
適法ノ呼出狀ヲ送達スルニ非サレハ當事者ヲ以テ合式ニ呼出サレタル
モノト爲スコトヲ得ス

第六十二條 期日ハ裁判所内ニ於テ之ヲ開ク但臨檢又ハ裁判所ニ出頭スルニ差支アル

八ノ審問其他裁判所内ニ於テ爲スコトヲ得サル行爲ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス

第六十三條 期日ハ事件ノ呼上ヲ以テ始マル

原告若クハ被告カ期日ノ終ニ至ルマテ辯論ヲ爲ササルトキハ期日ヲ念リタルモノト看
做ス

○開廷ニ際シ廷下ナシテ訴訟人控所ニ至リ之ヲ呼込マシムルカ如キ習慣
ハ法廷以外ニ於ケル便宜ノ行爲ニ止マリ法律ヲ以テ規定セラレタル呼
上ノ方式上何等ノ效力ヲ有スヘキモノニ非ス

○裁判所構内ニ出頭シ居リタレハトテ事件ノ呼上ニ應シ期日ノ開始ニ當
リ法廷ニ出頭セサルトキハ法律上訴訟行爲ヲ懈怠シタルモノトス

第六十四條 裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間ノ進行ハ期間ヲ定メタル書類ノ送達ヲ以
テ始マリ又其送達ヲ要セサル場合ニ於テハ期間ノ言渡ヲ以テ始マル但期間指定ノ際此
ヨリ遲キ起期ヲ定メタルトキハ此限ニ在ラス

第六十五條 期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シ又日ヲ以テスルモ
ノハ初日ヲ算入セス

第六十六條 一日ノ期間ハ二十四時トシ一個月ノ期間ハ三十日トシ一年ノ期間ハ曆
ニ從フ

期間ノ終カ日曜日又ハ一般ノ祝祭日ニ當ルトキハ其日ヲ期間ニ算入セス

○年末年始ノ休暇ハ祝祭日ト認メタル法令慣行ナキヲ以テ一般ノ祝祭日
ト爲スヘキ理由ナシ

三四二 四九

二九六 七九

三二四 一五

三四五 三六

三四五 三三

二六二 三三

○國葬式ノ當日ハ民事訴訟法第六十六條第二項ニ所謂一般ノ祝祭日ニ非ス故ニ不變期間ニ算入スヘキモノトス

第六十七條 法律上ノ期間ハ裁判所ノ所在地ニ住居セサル原告若クハ被告ノ爲メ其住居地ト裁判所所在地トノ距離ノ割合ニ應シ海陸路八里毎ニ一日ヲ伸長ス八里以外ノ端數三里ヲ超コルトキモ亦同シ

裁判所ハ外國又ハ島嶼ニ於テ住所ヲ有スル原告若クハ被告ノ爲メ特ニ附加期間ヲ定ムルコトヲ得

○民事訴訟法第六十七條ノ里程猶豫規定ハ其主タル期間ニ附隨シテ伸長スルモノトス故ニ其主タル期間上告ノ如ク不變期間ナルトキ同法第六十八條第一項ニ據テ期間進行ヲ停止スヘキモノニ非ス

○海路ノ里程ハ海哩ヲ以テ計算スヘキモノトス

○假住所ハ現實ノ住所ニ非サルヲ以テ民事訴訟法第六十七條ノ住居地ナル文字中ニ包含セラレス隨テ假住所ヲ届出テタル者ト雖モ同條ニ依リ期間ノ猶豫ヲ受シヘキモノトス

(反對)

訴訟人ニ於テ假住所ノ届出アルトキハ裁判所トノ距離ハ假住所ヨリ計算ス

第六十八條 期間ノ進行ハ裁判所ノ休暇ニ依リテ停止ス其期間ノ殘餘ノ部分ハ休暇ノ終ヲ以テ其進行ヲ始ム期間ノ初カ休暇ニ當ルトキハ其期間ノ進行ハ休暇ノ終ヲ以テ始

二六五三

二六二一

二六二一

二六二一

二六一〇

マル

前項ノ規定ハ不變期間及ヒ休暇事件ノ期間ニハ之ヲ適用セス

不變期間ハ此法律ニ於テ不變期間トシテ掲ケタル期間ニ限ル

休暇事件トハ裁判所構成法第二百二十八條、第二百二十九條ニ掲ケタル事件ヲ謂フ

第六十九條 期日ノ變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ期日ノ指定ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得但申立ニ因レル期日ノ變更ハ合意ノ場合ヲ除ク外顯著ナル理由アルトキニ限り之ヲ許ス

第七十條 期間ハ不變期間ヲ除ク外當事者ノ合意ノ申立ニ因リ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルコトヲ得

裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間及ヒ法律上ノ期間ハ合意ナキモ申立ニ因リ顯著ナル理由アルトキハ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルコトヲ得然レトモ法律上ノ期間ノ短縮又ハ伸長ハ此法律ニ特定シタル場合ニ限り之ヲ許ス

伸長ニ係ル新期間ハ前期間ノ満了ヨリ之ヲ起算ス

第七十一條 期日ノ變更又ハ期間ノ短縮若クハ伸長ニ付テノ申請ノ理由ハ之ヲ説明ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

同一期日ノ再度ノ變更又ハ同一期間ノ再度ノ伸長ハ相手方ノ承諾書ヲ提出セザルトキハ相手方ヲ審訊シタル後ニ限り之ヲ許スコトヲ得又相手方カ異議ヲ述フルトキハ顯著ナル差支ノ理由及ヒ其差支ヲ除去スルコトノ特別ナル困難ヲ生シタルコトヲ證スルト

キニ限リ之ヲ許スコトヲ得訴訟代理人ノ差支ニ原因スル期日ノ再度ノ變更又ハ期間ノ

再度の伸長ハ相手方ノ承諾アルニ非サレハ之ヲ許サス
期日ノ變更又ハ期間ノ伸長ニ付テノ申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第七十二條 本節ニ於テ裁判所及ヒ裁判長ニ與ヘタル權ハ受命判事又ハ受託判事モ亦其定ム可キ期日及ヒ期間ニ付キ之ヲ行フコトヲ得

第四節 懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

第七十三條 訴訟行爲ヲ怠リタル原告若クハ被告ハ其訴訟行爲ヲ爲ス權利ヲ失フ但此法律ニ於テ追完ヲ許ストキハ此限ニ在ラズ
法律上懈怠ノ結果ハ當然生スルモノトス但此法律ニ於テ失權ヲ爲サシムルコトニ付キ相手方ノ申立ヲ要スルトキハ此限ニ在ラズ

○口頭辯論ニ闕席シタルモノハ其結果トシテ總テノ抗辯ヲ拋棄シタリトノ推定ヲ受クヘシ

第七十四條 天災其他避ク可カラサル事變ノ爲ニ不變期間ヲ遵守スルコトヲ得サル原告若クハ被告ニハ申立ニ因リ原狀回復ヲ許ス
原告若クハ被告カ故障期間ヲ懈怠シタルトキハ其過失ニ非スシテ闕席判決ノ送達ヲ知ラサリシ場合ニ於テモ亦之ニ原狀回復ヲ許ス

○流行病ハ以テ一ノ不可抗力ト爲スコトヲ得

○原狀回復ノ申立ハ民事訴訟法第七十四條ノ規定ニ依リ不變期間ヲ遵守スルコトヲ得サル場合ニ限り之ヲ許スヘキモノニシテ期日ヲ懈怠シ

二元
六
六

二五
六
三

タル者ニハ之ヲ許サス

○民事訴訟法第七十四條第一項ノ規定ハ適法ノ送達ヲ受ケタル場合ニ限り適用スヘキモノトス

第七十五條 原狀回復ハ十四日ノ期間内ニ之ヲ申立ツルコトヲ要ス

右期間ハ障礙ノ止ミタル日ヲ以テ始マル此期間ハ當事者ノ合意ニ因リ之ヲ伸長スルコトヲ得ス
懈怠シタル不變期間ノ終ヨリ起算シテ一十年ノ滿了後ハ原狀回復ヲ申立ツルコトヲ得ス

二元
三
八

第七十六條 原狀回復ハ追完スル訴訟行爲ニ付キ裁判ヲ爲ス權アル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ申立ツ可シ

此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス
第一 原狀回復ノ原因タル事實

第二 原狀回復ノ疏明方法

第三 懈怠シタル訴訟行爲ノ追完

即時抗告ノ提出ヲ懈怠シタルトキハ原狀回復ノ申立ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ抗告裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第七十七條 原狀回復ノ申立ニ付テノ訴訟手續ハ追完スル訴訟行爲ニ付テノ訴訟手續ト之ヲ併合ス然レトモ裁判所ハ先ツ申立ニ付テノ辯論及ヒ裁判ノミニ其訴訟手續ヲ制限スルコトヲ得

申立ノ許否ニ關スル裁判及ヒ其裁判ニ對スル不服ノ申立ニ付テハ追完スル訴訟行為ニ於テ行ハル可キ規定ヲ適用ス然レトモ申立ヲ爲シタル原告若クハ被告ハ故障ヲ爲スコトヲ得ス
原狀回復ノ費用ハ申立人之ヲ負擔ス但相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生シタルモノハ此限ニ在ラス

第五節 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

第七十八條 原告若クハ被告ノ死亡シタル場合ニ於テハ承繼人カ訴訟手續ヲ受繼クマテ之中斷ス
受繼ヲ遲滞シタルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ受繼及ヒ本案辯論ノ爲メ其承繼人ヲ呼出ス
承繼人期日ニ出頭セサルトキハ申立ニ因リ相手方ノ主張シタル承繼ヲ自白シタルモノト看做シ且裁判所ハ開席判決ヲ以テ承繼人訴訟手續ヲ受繼キタリト言渡ス又本案ノ辯論ハ故障期間ノ滿了後始メテ之ヲ爲シ又其期間内ニ故障ヲ申立テタルトキハ其完結後始メテ之ヲ爲ス

○死亡シタル當事者ノ一方ノ相續人カ訴訟手續ノ中斷ヲ爲サズ直チニ訴訟ノ繼承人トシテ出廷シタル場合ニ於テ裁判所カ相手方ニ其實實ヲ告

○原告若クハ被告ノ死亡ニ因リ訴訟手續ノ中斷ハ受訴裁判所ニ書面ヲ提出シテ其通知ヲ爲スニ非サレハ裁判所ニ於テ其中斷ヲ爲スヘキモノニ

三六三

非ス

○隱居ニ因ル家督相續人ハ被相續人ノ死亡セシ場合ト同シク隱居者ノ訴訟手續ヲ受繼セサルヘカラス

(同主旨)

先代ノ債務ヲ請求セラレタル者カ訴訟進行中退隱スルトキハ該退隱ハ先代ノ債務ニ關シ之ヲ死亡ト同視スヘキモノナレハ之ニ因リ訴訟手續ハ中斷セラレトモノトス

○訴訟手續ノ受繼ニ關スル抗辯ノ當否ヲ裁判スルニハ其訴訟ヲ受繼スルノ義務アリトシテ指名セラレシ者カ果シテ其受繼セラルヘキ當事者ノ承繼人タル資格ヲ有スル者ナルヤ否ヤヲ審査シテ之ヲ定ムヘキモノニシテ訴訟ノ適法ニ提起セラレタルヤ否ヤニ依リテ之ヲ受繼スルノ義務アルヤ否ヤヲ判定スヘキモノニ非ス

第七十九條 原告若クハ被告ノ財産ニ付キ破産ノ開始シタル場合ニ於テ訴訟手續カ破産財團ニ關スルトキハ破産ニ付テノ規定ニ從ヒ手續ヲ受繼キ又ハ破産手續ヲ解止スルマテ之中斷ス

第八十條 原告若クハ被告カ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ其法律上代理人カ死亡シ又ハ其代理權カ原告若クハ被告ノ訴訟能力ヲ得ル前ニ消滅シタルトキハ訴訟手續ハ法律上代理人又ハ新法律上代理人カ其任設ヲ相手方ニ通知シ又ハ相手方カ訴訟手續ヲ續行セントスルコトヲ其代理人ニ通知スルマテ之中斷ス

三六三

三六九

三六六

三三七

○當事者ノ法定代理人タル資格ヲ以テ受ケタル判決ニ對スル上告ハ其法定代理人之ヲ提起セサルヘカラス若シ其者ノ法定代理權消滅スルトキハ民事訴訟法第八十條ノ規定ニ依ルヘキモノトス

○訴訟手續ノ受繼ハ訴訟カ現ニ裁判所ニ繫屬セル場合ニシテ其手續ノ中斷又ハ中止アリタルトキニ限ル隨テ法律上代理人ニ變更ヲ生シタル爲メ訴訟受繼ノ手續ヲ爲スヘキコトモ亦訴訟ノ繫屬中ニ限ラレタルモノト云ハサルヘカラス

第八十一條 原告若クハ被告ノ死亡ニ因リ訴訟手續ヲ中斷スル場合ニ於ケル訴訟手續ノ受繼ニ關シ遺產ニ付キ管理人ヲ任置スルトキハ前條ノ規定又遺產ニ付キ破産ヲ開始スルトキハ第七十九條ノ規定ヲ適用ス

第八十二條 戰爭其他ノ事故ニ因リ裁判所ノ行務ヲ止メタルトキハ此事情ノ繼續間訴訟手續ヲ中斷ス

第八十三條 訴訟代理人ヲ以テ訴訟ヲ爲ス場合ニ於テ原告若クハ被告カ死亡シ又ハ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ法律上代理人カ死亡シ又ハ其代理權カ消滅スルトキハ委任消滅ノ通知ヲ知ニ因リ訴訟手續ヲ中斷ス

訴訟手續ノ受繼ニ付テハ第八十八條、第八十條、第八十一條ノ規定ニ從フ

○訴訟當事者ノ死亡シタル場合ニ其訴訟代理人ニ於テ委任消滅ノ通知ヲ爲サ、ルモ之カ爲メニ死亡者ノ相續人カ既ニ相當ニ爲シタル訴訟受繼

ノ手續ハ無效ニ歸スヘキモノニ非ス

○訴訟代理人ヲ以テ訴訟ヲ爲ス場合ニ於テ委任者ノ死亡ニ依ル委任消滅ノ通知及ヒ訴訟手續受繼ニ關スル規定ハ其ニ相手方ヲ保護スルノ趣旨ニ外ナラス從テ相手方カ承繼人ノ訴訟手續ノ受繼ヲ默認シテ其手續ヲ續行シタルトキハ委任ノ消滅及ヒ訴訟手續ノ受繼ハ其效力ヲ生スルモノトス〔第八十七條三四年六卷二六頁參照〕

(同法旨)

訴訟手續ノ中斷ハ死亡者ノ相續人ノ利益ノ爲メ設定セラレタルモノナルニ依リ其相續人ヨリ中斷ノ通知ヲ爲スニ非サレハ訴訟手續ハ繼續スヘキモノトス

○訴訟代理人ヲ以テ爲ス訴訟ニ在テハ法律上代表者ノ代理權カ消滅スルモ委任消滅ノ通知アルニ非サレハ訴訟手續ヲ中斷スヘキモノニ非ス

(同法旨)

訴訟代理委任ノ消滅ハ之ヲ相手方ニ通知スルマテ其效ナシ故ニ本人ノ出廷ノミヲ以テ相手方ニ對シ委任ノ消滅アリト看做スヲ得ス
代理人ヲ以テ訴訟ヲ爲ス場合ニ於テ當事者ノ中一方カ死亡シタルトキハ他ノ一方ニ對シ委任消滅ノ通知アルマテハ其訴訟手續ハ中斷セラレサルモノトス
法律上代理ノ變更ニ依ル委任ノ消滅ハ之ヲ通知セラレハ相手方ニ對シテ其效力ヲ生セス
訴訟代理人ヲ以テ訴訟ヲ爲ス場合ニ於テ當事者ノ一方カ死亡スルモ裁判所ニ届出テタル上相

三	三	三	三	三	三
一	一	一	一	一	一
六	六	六	六	六	六
三	三	三	三	三	三
九	九	九	九	九	九
三	三	三	三	三	三
七	七	七	七	七	七
三	三	三	三	三	三
七	七	七	七	七	七

三	三	三	三	三	三
五	五	五	五	五	五
九	九	九	九	九	九
一	一	一	一	一	一
四	四	四	四	四	四

手方ニ之ヲ通知セサレハ訴訟手續ハ中斷セス

第八十四條 原告若クハ被告カ戰時兵役ニ服スルトキ又ハ官廳ノ布令、戰爭其他ノ事變ニ因リ受訴裁判所ト交通ノ絶エタル地ニ在ルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ障礙ノ消除スルマテ訴訟手續ノ中止ヲ命スルコトヲ得

第八十五條 訴訟手續中止ノ申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ提出ス其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

○第一審判決送達後訴訟手續中止ノ原因生シ其申請アリタルトキハ第一審裁判所ハ受訴裁判所ナルヲ以テ其申請ノ當否ニ付キ同裁判所カ爲シタル裁判ハ有效ナリ

第八十六條 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止ハ各期間ノ進行ヲ止メ及ヒ中斷又ハ中止ノ終リタル後更ニ全期間ノ進行ヲ始ムル效力ヲ有ス

中斷及ヒ中止ノ間本案ニ付キ爲シタル原告若クハ被告ノ訴訟行爲ハ他ノ一方ニ對シ其效力ナシ

口頭辯論ノ終結後ニ生シタル中斷ハ其辯論ニ基キテ爲スコキ裁判ノ言渡ヲ妨グルコト無シ

第八十七條 中斷シ又ハ中止シタル訴訟手續ノ受繼及ヒ本節ニ定メタル通知ハ原告若クハ被告ヨリ其書面ヲ受訴裁判所ニ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ

○訴訟當事者ノ一方カ死亡スルモ民事訴訟法第八十三條ニ依リ訴訟手

三三〇

三三

一一〇

二元九五六

續ノ中斷ヲ爲サ、ルトキハ同法第八十七條ノ規定ニ從ヒ受繼ノ手續ヲ爲スヲ要セス

○訴訟代理人ヲシテ訴訟ヲ爲サシムル場合ニ於テ委任者ノ死亡シタルトキハ其代理委任消滅ノ通知書ヲ受訴裁判所ニ差出シ之ヲ相手方ニ送達セサル間ハ中斷ノ效力ヲ生セサルモノトス

(同法第)

死亡ニ由ル代理委任ノ消滅ヲ通知スル書面ヲ受訴裁判所ニ提出シ相手方ニ送達セシムルマテハ其效力ヲ生セサルモノトス

訴訟代理委任ノ消滅ハ之ヲ裁判所ニ届出テ其通知書ヲ相手方ニ送達セサレハ效力ヲ生セス隨テ其訴訟代理人ノ受ケタル判決ハ有效ナリ

○訴訟受繼ノ書面ハ之ヲ相手方ニ送達セサルモ相手方カ裁判所ニ於テ之ヲ受領シ異議ナク辯論ヲ爲シタルトキハ送達ナキナ理由トシテ原裁判ヲ批難スルヲ得ス

第八十八條 當事者ハ訴訟手續ヲ休止ス可キ合意ヲ爲スコトヲ得其合意ハ不變期間ノ進行ニ影響ヲ及ボサス

口頭辯論ノ期日ニ於テ當事者雙方出頭セサルトキハ訴訟手續ハ其一方ヨリ更ニ口頭辯論ノ期日ヲ定ム可キコトヲ申立ツルマテ之ヲ休止ス

一个年内ニ前項ノ申立ヲ爲ササルトキハ本訴及ヒ反訴ヲ取下ケタルモノト看做ス

民事訴訟法 第八十八條

三〇六三六

三三二八五

三三四三四

三三九一七

三四六二六

○上告裁判所カ爲シタル移送ノ言渡ニ依リ口頭辯論ノ期日ノ申請ニ付テノ期間ニ民事訴訟法第八十八條第三項ヲ適用シタルハ不法ノ決定ナリ

二五
六
三

○民事訴訟法第八十八條ハ口頭辯論ヲ以テ終結スヘキ訴訟ノ休止ニ於ケル規定ニシテ其第二項ニハ明カニ口頭辯論ノ期日ニ於テ云云ト特記シアルヲ以テ其第三項ニ於ケル訴訟取下ト看做スヘキ規定ハ法律ニ於テ之カ適用又ハ準用ヲ許スノ明文ナキ準備手續ノ場合ニハ其適用ハ勿論準用ヲモ爲シ得ヘカラサルモノトス

三四
二
一〇三

第八十九條 本節ノ規定其他此法律ノ規定ニ基キ訴訟手續ノ中止ヲ命スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得又其中止ヲ拒ム裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第一編 第一審ノ訴訟手續

○甲乙間曾テ締結セシ所ノ契約ニ基キ甲者乙者ニ對シ地所ヲ買戻サントスルニ方リ金額ノ點ニ付キ爭訟トナリ結局甲者主張ノ金額ヲ以テハ買戻スヲ得ストノ判決ヲ受ケタリ是ニ於テ甲者ハ判決ニ示ス所ノ金額即チ乙者主張ノ金額ヲ以テ買戻サント求メタルニ乙者之ヲ肯セス依テ甲者ヨリ再ヒ訴訟ヲ提起スルニ至リタリ此事實ニ對シ一事再理ノ原則チ

適用セシハ不當ナリ如何トナレハ前裁判ハ金額ノ點ノミノ紛爭ヲ判決セシモノニシテ乙者主張ノ金額ニ由ラントスルモ尙ホ買戻スヲ得サルヤ否ニ付キ判決セシ事ナキヲ以テナリ

二七
〇
六

○訴訟ハ起訴當時ノ權利關係ヲ定ムルモノナレハ其後ニ發生シタル事由ノ爲メ當然消滅スヘキモノニ非ス

二八
三
一六

○證券印紙貼用不足ノ證書ハ裁判上證據トナラストノ理由ヲ以テ請求ヲ斥ケタル判決確定セル上ハ更ニ其證書ニ印紙ヲ追貼シ訴ヲ爲スハ一事再理ナリトス

二九
四
一〇

○買戻契約期限内買戻ニ付キ出訴シタルモ形式上不適法トシテ却下セラレタル者ハ買戻期限經過後ト雖モ更ニ出訴スルコトヲ得ヘキモノトス

三〇
五
七

○犯罪原因トスル損害賠償ノ訴ハ公訴附帶ノ私訴トシテ刑事裁判所ニ若シハ單獨ノ民事訴訟トシテ民事裁判所ニ提起スルハ被害者ノ隨意ナリ

三一
二
四

ニ反スル不當ノ訴訟ナリ

(同前)

同一事件ニテモ請求ノ目的ヲ異ニスルハ一事再理ニ非ス

目的原因及ヒ資格ニ於テ異ナルコトアルニ於テハ當事者中ニ同一ノ人アリタリトテ之ヲ以テ

一事再訴ナリト云フコトヲ得ス

前訴ト同一ノ相對人ニシテ同一ノ目的ナルトキハ縱令更ニ事由ヲ證明スルコトアルモ一事不

再理ノ原則ヲ適用シテ之ヲ拒ムヘキモノトス

小作契約ヲ原因トシテ小作米ヲ請求スルト不當利得ヲ原因トシテ其作得米ヲ請求スルトハ訴

訟ノ原因同一ナラス故ニ一事再理ニ非ス

委託物ノ返還若クハ其見積價額ヲ請求シタル者カ敗訴ノ言渡ヲ受ケタル後更ニ契約違背ヲ主

張シ損害要償ヲ請求シタルトキハ縱令當事者及ヒ目的物ヲ同フスルモ其原因異ナルニ依リ一

事再訴ト云フヲ得ス

二個ノ訴訟ノ性質カ實質上同一ナラサルトキハ其請求ヲ證明スヘキ證據カ前後同一ナリトス

ルモ一事再訴ト云フヲ得ス

○自然ノ水路ヲ流下スル水ノ使用權ハ直接ニ水ノ必要ヲ感スル個人ニ屬

スルモノナルニ依リ其權利ノ消長ニ關スル訴訟ハ個人カ主體トナリ提

起スヘキハ當然ニシテ部落團體ノ代表者タル村長ニ於テ干與スヘキモ

ノニ非ス

○所有權確認ノ訴ハ當事者雙方カ自己ニ所有權アルコトヲ主張スル場合

三	三	三〇	二九	二六	二五	二五	三
五	二	五	〇	二	三	一	三
八	一五	九	八	二〇九	五八	六五	七七

ニ非サレハ提起スルヲ得ス

(同前)

所有權利ノ一部タル收益權ノ確認ヲ求ムル訴權ハ獨リ其所有者ノミニ屬ス故ニ所有者ト收益

者トシテ異ニスル場合ニ於テ收益者ノ權利ハ唯所有者ト收益者トノ入權上ノ關係ニ止マリ收益

者ハ他人ニ對シ物權上ニテ其權利ノ確認ヲ求メ得ヘキモノニ非ス

○直接履行又ハ損害要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ヘキ場合ト雖モ苟モ確認ノ

訴ヲ提起スルニ於テ利益アルトキハ之ヲ許スヘキモノトス

○一方ノ者ノ單獨所有名義ニテ共有スルコトヲ結約シタルトキ他ノ一方

ノ者ニ於テ當初ノ契約ニ基キ一方ノ者ニ對シ共有權ノ確認ヲ求ムルハ

其權利ヲ保全スル必要ノ訴求ニシテ無益ノ訴ニ非ス

○公正證書ニ基シテ請求ニ關シ異議ヲ主張スル場合ニ請求ニ關スル異議ノ

訴ノ外ニ公正證書ノ效力ニ關スル訴ヲ提起スルノ必要ナシ

○親子關係ノ如キ身分ノ確定ヲ請求スル訴ハ法律關係ノ確定訴訟ニシテ

單純ナル事實ノ確定訴訟ニ非ス故ニ特殊ノ規定ナキモ之ヲ許スヘキモ

ノトス

○或權利關係カ期限ノ到來ニ繋リ且其期限内ニ該權利ノ承繼ニ關シ爭ア

ル場合ノ如キハ所謂權利關係ヲ即時ニ確定スルニ於テ法律上利益ヲ受

三	三	三〇	三	三	三	三	三
四	三	一〇	二	三	二	三	七
八四	一三三	三	七	七	七	七	五

シヘキモノニ該當スルヲ以テ確定ノ訴訟ヲ許スヘキモノナリ
 ○舊公證ヲ經タル抵當地カ現今ノ公簿上舊公證ト其土地ノ字番號等ヲ異
 ニスル場合ニ於テハ抵當權者ハ該公證ニ依リ直チニ強制執行ヲ爲スコ
 トナ得サルニ付キ豫メ抵當權ノ成立ヲ確定シ置クハ抵當權者ノ爲メ法
 律上必要ニシテ利益アルモノナレハ斯ル場合ニ於ケル抵當權確認ノ訴
 ハ之ヲ許スヘキモノトス

○抵當權確認ノ請求ヲ爲シタル後ニ至リ併セテ其抵當權ノ登記書入ヲ請
 求スルカ如キハ所謂訴ノ申立ノ擴張ナリト雖モ不動産登記法實施後ニ
 於テハ抵當權確認訴訟ノ判決ノミニ基キ直チニ登記ヲ申請シ得ヘキニ
 付キ別ニ之カ登記書入ヲ請求スルノ必要之ナキモノトス

○當事者雙方カ交番法ヲ以テ年々互ニ養水ヲ引用スル權利ノ限度ヲ確定
 セントスル訴訟ハ其法律關係ヲ即時ニ確定スルノ利益必要アルモノナ
 レハ給付ノ請求ヲ爲サンヨリハ寧ロ確認ノ請求ヲ爲スヘキモノトス

(同法第)

確認訴訟ハ權利關係ヲ即時ニ確定スルニ於テ起訴者法律上ノ利益ヲ有スヘキモノナルトキハ
 終局ノ請求ヲ爲シ得ヘキ場合ナルト否トナ問ハス之ヲ許スナ相當トス
 確認訴訟中權利關係ヲ即時ニ確定スルコトニ於テ法律上ノ利益ヲ有スルモノハ給付ノ請求ヲ

三	四	二
三	六	三
三	六	三
三	一〇	四

爲シ得ル場合ト否トナ問ハス之ヲ許スナ相當トス

○民法施行後ハ物權ハ登記スルニ非サレハ第三者ニ對シ效力ナキヲ以テ
 地上權ノ確認訴訟ハ之ヲ許サハルモ民法施行前ニ於テハ登記ヲ爲サス
 シテ第三者ニ對シ效力アリシヲ以テ確認ノ訴訟ヲ提起シ得ヘキモノト
 ス

○起訴前競賣ニ依リ既ニ消滅シタル物件ニ付テハ之カ所有權ヲ有スル者
 ニ於テ其競賣代價ノ償還ヲ求ムル乎又ハ損害賠償ヲ求ムル乎孰レカ其
 權利ノ在ル所ニ從テ直チニ權利ノ回復ヲ請求シ得ヘキモノナレハ既往
 ニ遡リテ所有權ノ確認ノミヲ求ムルノ訴ハ許スヘカラサルモノトス

○確認訴訟ハ現在ノ權利關係ヲ確定スルニ於テ起訴者カ直チニ利益ヲ有
 スヘキ場合ニ限り之ヲ提起シ得ヘキモノニシテ單ニ過去ノ事實關係ノ
 存否ヲ確ムルチ目的トスルトキハ之ヲ提起スルヲ得サルモノトス

○直チニ爲シ得ヘキ給付ノ請求ヲ爲サスシテ先ツ其確認ノ訴訟ノミヲ提
 起シ以テ當事者間ノ權利關係ヲ確定シタル後ニ至リ尙ホ同一ノ權利關
 係ニ付キ給付ノ訴ヲ提起スルカ如キハ無益ナル手數ト費用トヲ要スル
 カ故ニ此ノ如キ確認ノ訴訟ハ法律上必要ト認メサルヲ以テ許スヘカラ
 サルモノトス

三	二	五	八
三	二	五	八
三	五	五	九
三	六	二	二

（同前）

契約又は證書ノ存否カ將來自己ノ利害ニ關係ヲ及ボス恐アリ義務者ニ於テ其存在ヲ認メサル
 場合ニ於テハ縱令契約上未タ實害ヲ生ゼサルトキト雖モ其權利者ニ於テ義務ノ確認ヲ求ムル
 コトヲ得ルハ一般法理ノ認ムル所ナリ
 權利存在ノ確認ヲ目的トスル確認訴訟ハ其權利關係ヲ即時ニ確定スルコトノ必要アル場合ニ
 非サルハ之ヲ提起ヲ許サズルモノトス
 確認訴訟ハ當事者間ノ法律關係ヲ即時ニ確定スルノ必要ナキ場合ニハ之ヲ提起スルヲ許サ
 ズルモノトス（同一判例三二年二卷三二頁）
 確定判決ヲ執行シ遲延タルトキハ償金ヲ支拂フヘシトノ決定ハ直チニ執行文ヲ得テ執行シ
 得ヘキモノナルヲ以テ此場合ニ於テハ權利存在ノ確定ヲ目的トスル確認訴訟ヲ提起スルヲ得
 ス
 直チニ履行ノ請求ヲ爲シ得ル場合ニ於テハ履行ヲ求ムル訴訟ニ先チ特ニ獨立シテ確定訴訟ヲ
 提起スル必要之ナキニ付キ確認訴訟ノ提起ヲ許サズ
 法律關係ノ確定ノミヲ求ムル訴訟ハ權利ノ執行ヲ要セス法律關係ノ確定ノミヲ以テ完全ニ目的
 ナ達シ得ヘキ事件若クハ法律關係ノ確定ノミニテハ其目的ヲ達シ得ヘカラサルモ未タ權利ノ
 執行ヲ強要スルノ期限ニ達セズ在舊歲月ヲ經過セハ權利ヲ失却スルノ危險アルカ爲メ裁判ヲ
 以テ權利ノ存否ヲ即時ニ確定セシメ置クノ必要アル場合ナラサルヘガラス
 訴訟ハ權利ノ侵害ヲ除去スルコトノ必要アル場合ニ限り提起スルコトヲ許スヘキモノナリ而
 シテ權利確定ノ存在ヲ目的ト爲ス確定訴訟ニ於テモ亦原告カ被告ニ對シ或權利ヲ有スルモ其
 履行ヲ請求スルコト能ハサルトキ其權利關係ヲ即時ニ確定スル必要アル場合ニ非サルハ獨立

三	三	三	三	三
五	四	三	三	二
八	六	五	六	四
				五
				四

シテ之ヲ提起スルコトヲ許サズ
 財産上救済ヲ請求スルニ當リ給付ヲ求メス單ニ權利ノ確認ヲ目的トスル場合ニ在テハ即時ニ
 法律關係ヲ確定スルニ於テ起訴者ニ法律上ノ利益アルヲ必要トス從テ法律關係ヲ確定スルモ
 起訴者ニ對シ毫モ救済ヲ與フル所ナク給付ノ訴ヲ提起スルニ非サルハ到底其目的ヲ達スルコ
 ト能ハサル場合ニ在テハ確認ノ訴ハ之ヲ提起スルコトヲ許サズ
 事件自體カ直チニ履行ノ請求ヲ爲シ得ヘキ性質ノモノニシテ且結局履行ヲ求メサルハ其目的
 ナ達スルコト能ハサルモノニ付テハ確認ノ訴ヲ提起スルヲ得サルモノトス

- 豫メ法律關係ノ存否ニ争アリ判決ヲ以テ其確定ヲ求メントスル場合ニ
 於テ確定ノ訴ト給付ノ訴トヲ併セテ提起スルハ適法ナリトス

（同前）

確認訴訟ハ起訴者カ給付ノ請求ヲ爲シ得ル場合ニ於テモ單ニ當事者間ノ權利關係ノミヲ即時
 ニ確定スルニ於テ法律上ノ利益ヲ有シ且之ニ因リテ更ニ給付ノ請求ヲ爲スコトヲ要セサルト
 キハ之ヲ提起ヲ許スヘキモノトス
 確認ノ訴ハ即時ニ權利關係ヲ確定スルノミニテ訴訟ノ目的ヲ達シ得ヘキトキハ提起スルコト
 ナ得ルモ給付ノ訴ヲ準備スルニ過キサルトキハ之ヲ許スヘキモノニ非ス
 ○訴訟手續上ノ違背ハ後日當事者ニ於テ之ヲ補正スルコトヲ得
 ○權利關係確定ノ訴訟ハ獨リ積極的ノ場合ニ限ラズ消極的ノ場合ニモ之
 ナ提起シ得ヘキモノトス
 ○民事訴訟ニ於テ權利拘束發生後訴訟ノ目的物又ハ其原因ヲ増減變換シ

三	三	三	三	三
五	九	一〇	九	九
一四七	四	三	八	二
				三
				二

得ルハ同法第九十五條第三號第九十六條第二號第三號及ヒ同法第二百十一條ニ規定シアル場合ニ限ルモノニシテ他ノ場合ニ於テハ一般ノ手續ニ遵ヒ一ノ訴ヲ以テスルニ非サレハ新ナル請求ヲ爲スヲ得サルモノトス

第一章 地方裁判所ノ訴訟手續

第一節 判決前ノ訴訟手續

○勸解不調ノ後ノ出訴ヲ怠リタルノ一事ノミナ以テ直チニ出訴ノ權利ヲ失フモノニ非ス

○契約取消ノ訴訟ハ必スシモ其契約關係者ヲ同時ニ被告ト爲サ、ルモ成立ツヘキモノトス

○訴答文例第二十五條ノ規定ノ如キハ民事訴訟法施行ノ日ヲ以テ當然廢止セラレタルモノナリ而シテ連借人中ノ一名ニ對シテ訴訟ヲ提起スルハ其連帶ナル場合ト否トヲ問ハズ民事訴訟法上不適法ノモノニ非ス

第九十條 訴ノ提起ハ裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス

此訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 當事者及ヒ裁判所ノ表示

第二 起シタル請求ノ一定ノ目的物及ヒ其請求ノ一定ノ原因

第三 一定ノ申立

此他訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒ之ヲ作り且裁判所ノ管轄カ訴訟物ノ價額ニ依リ定マル場合ニ於テ訴訟物カ一定ノ金額ニ非サルトキハ其價額ヲ掲ケ可シ

○準備書面及ヒ判決ニ原告「何某外幾名」ト記載シタル場合ニ於テ其幾名ノ何人ナルヤハ訴狀添附ノ委任狀ニ總體ノ原告氏名住所等存スルヲ以テ訴狀ニ之カ表示ヲ掲ケタルモノト看做スコトヲ得ヘキカ故ニ民事訴訟法第五條第一號第九十條第一項第一號及ヒ第二百三十六條第一號ノ規定ニ違背シタルモノト云フヲ得ス

○訴狀ハ民事訴訟法第九十條第一號乃至第三號ニ掲クル要件ノ記載アルトキハ有效ニシテ同法第五條ニ掲クル事項ヲ欠クモ無効トナラズ

○民事訴訟法第九十條ニ依リ訴狀ニ具備スヘキ要件ハ其記載ニ一定ノ方式ヲシトス

○被告ハ原告カ落水ノ爲メニスル水路使用權ヲ妨害スヘカラストノ訴ハ原告ノ權利保護ニシテ利益アルハ勿論其判決確定シ若シ被告之ニ從ハサレハ民事訴訟法第七百三十三條及ヒ民法施行法第五十四條ノ規定ニ

三四二三五

二四二二六

二五五二二

三五五二六

二元一六〇

三元二一〇

三元九一四

依リ之カ執行ヲ爲スヘキ途アリトス

○訴訟當事者ノ表示ハ形式上最モ之ヲ明確ニセサルヘカラス

○形式上ニ發露セサル訴訟當事者ハ裁判所之ヲ斟酌セテ從テ其者ノ訴訟代理ト訴訟委任トヲ調査スルヲ要セス

○民事訴訟法第九十條第二項第一號ニ所謂當事者ノ表示ハ其何人ナリヤカ分リ得ヘキ程度即チ他人ニ紛レナク一個人タル資格ナルヤ將タ代表者タル資格ナルヤヲ判然ナラシメ且送達ヲ爲シ得ヘキ程度ニ掲グルヲ以テ足レリトス

○訴訟ハ不必要ナル當事者ヲ加ヘタルカ爲メ其成立ヲ妨グルモノニ非ス
○一個人ノ商號ハ民事訴訟法第九十條ノ規定ニ依リ當事者ヲ表示スヘキ名稱ト爲スヲ得サルモノトス

○口頭辯論ニ於テ請求額ノ減縮シ得ヘキ旨趣ヲ表示シタリトテ之ヲ以テ一定ノ請求ナシト云ヒ或ハ訴ノ重要ノ點ヲ變更シタリト云フコトヲ得

○數名ヲ被告ト爲シ彼ニ非サレハ是否ヲサレハ全體ニ係リ請求スト云フカ如キハ不定ノ請求ナリ

○訴狀中請求ノ一定ノ目的物ト云フ題目ヲ掲ケサルモ他ニ之ヲ知り得ヘ

三四	二五	二六	二七	二八	二九
三五	二六	二七	二八	二九	三〇
三六	二七	二八	二九	三〇	三一
三七	二八	二九	三〇	三一	三二
三八	二九	三〇	三一	三二	三三
三九	三〇	三一	三二	三三	三四
四〇	三一	三二	三三	三四	三五
四一	三二	三三	三四	三五	三六
四二	三三	三四	三五	三六	三七
四三	三四	三五	三六	三七	三八
四四	三五	三六	三七	三八	三九
四五	三六	三七	三八	三九	四〇
四六	三七	三八	三九	四〇	四一
四七	三八	三九	四〇	四一	四二
四八	三九	四〇	四一	四二	四三
四九	四〇	四一	四二	四三	四四
五〇	四一	四二	四三	四四	四五
五一	四二	四三	四四	四五	四六
五二	四三	四四	四五	四六	四七
五三	四四	四五	四六	四七	四八
五四	四五	四六	四七	四八	四九
五五	四六	四七	四八	四九	五〇
五六	四七	四八	四九	五〇	五一
五七	四八	四九	五〇	五一	五二
五八	四九	五〇	五一	五二	五三
五九	五〇	五一	五二	五三	五四
六〇	五一	五二	五三	五四	五五
六一	五二	五三	五四	五五	五六
六二	五三	五四	五五	五六	五七
六三	五四	五五	五六	五七	五八
六四	五五	五六	五七	五八	五九
六五	五六	五七	五八	五九	六〇
六六	五七	五八	五九	六〇	六一
六七	五八	五九	六〇	六一	六二
六八	五九	六〇	六一	六二	六三
六九	六〇	六一	六二	六三	六四
七〇	六一	六二	六三	六四	六五
七一	六二	六三	六四	六五	六六
七二	六三	六四	六五	六六	六七
七三	六四	六五	六六	六七	六八
七四	六五	六六	六七	六八	六九
七五	六六	六七	六八	六九	七〇
七六	六七	六八	六九	七〇	七一
七七	六八	六九	七〇	七一	七二
七八	六九	七〇	七一	七二	七三
七九	七〇	七一	七二	七三	七四
八〇	七一	七二	七三	七四	七五
八一	七二	七三	七四	七五	七六
八二	七三	七四	七五	七六	七七
八三	七四	七五	七六	七七	七八
八四	七五	七六	七七	七八	七九
八五	七六	七七	七八	七九	八〇
八六	七七	七八	七九	八〇	八一
八七	七八	七九	八〇	八一	八二
八八	七九	八〇	八一	八二	八三
八九	八〇	八一	八二	八三	八四
九〇	八一	八二	八三	八四	八五
九一	八二	八三	八四	八五	八六
九二	八三	八四	八五	八六	八七
九三	八四	八五	八六	八七	八八
九四	八五	八六	八七	八八	八九
九五	八六	八七	八八	八九	九〇
九六	八七	八八	八九	九〇	九一
九七	八八	八九	九〇	九一	九二
九八	八九	九〇	九一	九二	九三
九九	九〇	九一	九二	九三	九四
一〇〇	九一	九二	九三	九四	九五

キ記載アルトキハ訴狀ノ要件ヲ具備セサル不法アルモノト云フヲ得ス

○訴狀ニ請求ノ一定ノ原因ト一定ノ申立トヲ併記スルモ互ニ之ヲ識別シ得ヘキトキハ民事訴訟法第九十條第二項ノ要件ヲ具備スルモノトス

○民事訴訟法第九十條第二ニ所謂請求ノ一定ノ原因トハ請求即チ權利ノ因テ生スル事實ヲ指示シタルモノニシテ即チ一ノ請求ヲ爲ストキハ之ヲ發生セシムル所ノ事實ノ一定ナルヲ要件ト爲シタルモノナリ從テ一ノ請求ヲ爲スニ當リ其事實ニシテ一定セハ之ニ適應セシムル法律上ノ意見ハ幾箇主張スルモ固ト是レ其請求ヲ維持スル爲メノ攻撃方法ニ外ナラサルヲ以テ原因ノ一定ニ毫モ妨アルコトナシ

○民事訴訟法第九十條ノ所謂一定ノ原因トハ明カニ定マリタル原因アルヲ要スルノ意義ニシテ一箇ノ原因ト云フ意義ニ非ス故ニ苟モ明カニ定マリタルモノナル以上ハ二箇以上ノ事實ヲ以テ順次ニ一ノ請求ノ原因ト爲スコトヲ得ルモノトス

○一定ノ申立不明瞭ナル場合ニ於テ裁判所ハ民事訴訟法第一百十二條第二項ニ基キ之ヲ釋明セシメス直チニ要件ヲ欠クモノトシテ其訴ヲ却下シタルハ同法第九十條ノ適用ヲ誤リタルモノトス〔第一百十二條三〇年二卷一頁參照〕

二九	三〇	三一	三二	三三	三四
三〇	三一	三二	三三	三四	三五
三一	三二	三三	三四	三五	三六
三二	三三	三四	三五	三六	三七
三三	三四	三五	三六	三七	三八
三四	三五	三六	三七	三八	三九
三五	三六	三七	三八	三九	四〇
三六	三七	三八	三九	四〇	四一
三七	三八	三九	四〇	四一	四二
三八	三九	四〇	四一	四二	四三
三九	四〇	四一	四二	四三	四四
四〇	四一	四二	四三	四四	四五
四一	四二	四三	四四	四五	四六
四二	四三	四四	四五	四六	四七
四三	四四	四五	四六	四七	四八
四四	四五	四六	四七	四八	四九
四五	四六	四七	四八	四九	五〇
四六	四七	四八	四九	五〇	五一
四七	四八	四九	五〇	五一	五二
四八	四九	五〇	五一	五二	五三
四九	五〇	五一	五二	五三	五四
五〇	五一	五二	五三	五四	五五
五一	五二	五三	五四	五五	五六
五二	五三	五四	五五	五六	五七
五三	五四	五五	五六	五七	五八
五四	五五	五六	五七	五八	五九
五五	五六	五七	五八	五九	六〇
五六	五七	五八	五九	六〇	六一
五七	五八	五九	六〇	六一	六二
五八	五九	六〇	六一	六二	六三
五九	六〇	六一	六二	六三	六四
六〇	六一	六二	六三	六四	六五
六一	六二	六三	六四	六五	六六
六二	六三	六四	六五	六六	六七
六三	六四	六五	六六	六七	六八
六四	六五	六六	六七	六八	六九
六五	六六	六七	六八	六九	七〇
六六	六七	六八	六九	七〇	七一
六七	六八	六九	七〇	七一	七二
六八	六九	七〇	七一	七二	七三
六九	七〇	七一	七二	七三	七四
七〇	七一	七二	七三	七四	七五
七一	七二	七三	七四	七五	七六
七二	七三	七四	七五	七六	七七
七三	七四	七五	七六	七七	七八
七四	七五	七六	七七	七八	七九
七五	七六	七七	七八	七九	八〇
七六	七七	七八	七九	八〇	八一
七七	七八	七九	八〇	八一	八二
七八	七九	八〇	八一	八二	八三
七九	八〇	八一	八二	八三	八四
八〇	八一	八二	八三	八四	八五
八一	八二	八三	八四	八五	八六
八二	八三	八四	八五	八六	八七
八三	八四	八五	八六	八七	八八
八四	八五	八六	八七	八八	八九
八五	八六	八七	八八	八九	九〇
八六	八七	八八	八九	九〇	九一
八七	八八	八九	九〇	九一	九二
八八	八九	九〇	九一	九二	九三
八九	九〇	九一	九二	九三	九四
九〇	九一	九二	九三	九四	九五
九一	九二	九三	九四	九五	九六
九二	九三	九四	九五	九六	九七
九三	九四	九五	九六	九七	九八
九四	九五	九六	九七	九八	九九
九五	九六	九七	九八	九九	一〇〇

○一定ノ物件引渡ヲ請求スルニ當リ若シ其物件ヲ引渡サ、ルトキハ之ニ代ルヘキ一定ノ金額ヲ請求ストノ申立ハ不確定ノ申立ニ非ス故ニ其申立ニ様ニ涉ルモ一定ノ申立タルヲ妨ケス

○一定ノ申立ハ起訴者カ事件ニ付キ如何ナル判決ヲ請求スルニ在ルヤ其意思ヲ表示セシムル爲メノ要件ナレハ其請求ノ主旨ヲ明記スレハ足り必スシモ訴求ノ目的物ヲ逐一列記スルノ要ナシ

(同三三)

一定ノ申立ハ起訴者カ事件ニ付キ如何ナル判決ヲ請求スルニ在ルヤ其意思ヲ表示セシムル爲メノ要件タルヲ以テ其請求ノ主旨ヲ明記スレハ足り必スシモ之ニ訴求ノ目的物ヲ逐一列記シ又ハ係争場所ヲ詳記スルノ必要アルモノニ非ス

○原告カ一定ノ申立トシテ二者擇一ノ權ヲ相手方ニ與ヘ其一ヲ履行スヘキコトヲ請求スルハ違法ニ非ス

(同三三)

契約不履行ノ一ノ原因ニ基キ地所ヲ賣戻スルカ又ハ損害金ヲ支拂フカ二者擇一ノ請求ヲ爲スハ一定ノ申立ナリ

○訴狀ニ請求ノ目的物ヲ掲ケタルトキハ一定ノ申立ハ其目的物ニ對シ如何ナル判決ヲ求ムルカヲ知ルヲ得ル程度ニ於テ記載スレハ足ル故ニ一定ノ申立中再ヒ請求ノ目的物ヲ列記スルノ要ナシ

(同三三)

訴狀ニ請求ノ目的物ト一定ノ申立ヲ分別シテ開示スルトキハ一定ノ申立ハ單ニ事件ニ付キ如何ナル判決ヲ求ムルモノナリヤチ開示スレハ足り重子テ目的物ノ何タルヲ開示スルノ必要ナシ故ニ一定ノ申立ニ某地所外何筆ト記載スルモ不適法ノ訴ニ非ス

○一定ノ申立ニ於テ賣買約定ノ取消ヲ求ムル申立ヲ爲シタル上ハ既ニ受取りタル金員返還ノ旨趣ハ自ラ其中ニ含蓄シアルニ依リ特ニ其申立中ニ之ヲ明示スルノ要ナシ

○訴ヲ以テ契約ノ解除ヲ求ムヘキモノニ非サルモ他ノ請求ト同時ニ訴狀ニ解除ノ意思ヲ併記スルハ妨ケナキモノトス

第九十一條 同一ノ被告ニ對スル原告ノ請求數箇アル場合ニ於テ其各請求ニ付キ受訴

裁判所カ管轄權ヲ有シ且法律ニ於テ同一種類ノ訴訟手續ヲ許ストキハ原告ハ其請求ヲ

一箇ノ訴ニ併合スルコトヲ得但民法ノ規定ニ反スルトキハ此限ニ在ラス

○民事訴訟法第九十一條ニ規定スル所ノ訴訟ノ併合ハ特ニ目的物ノ併合ヲ許スニ止マリ同法第四十八條ノ場合ノ如ク訴訟主體即チ當事者ノ併合ヲ許セルモノコ非ス仍ホ之ヲ詳言スレハ第九十一條所定ノ併合ヲ爲スニハ單ニ裁判所カ管轄權ヲ有スルト訴訟手續ノ同種類ナルトノ條件ヲ具備スルノミチ以テ足レリトセス必ス常ニ同一被告ニ對スルモノタルヲ要ス

三〇	二九	三〇	三〇	三〇	二九
九	九	六	二	五	〇
五	五	四	一	七	八

三〇	三二	三三	三三	三〇
四	三	三	四	〇
二五	二六	七	三	三〇

○民事訴訟法第四十八條ニ依リ共同訴訟ヲ許サレタル共同被告中其一人ノミニ係ル同一性質ノ請求ハ之ヲ共同訴訟ニ併合スルコトヲ禁シタル規定ナキヲ以テ同法第九十一條ニ依リ之ヲ併合シ得ヘキモノトス

○地上ノ工作物ヲ收去シテ之ヲ明渡スヘキコトヲ請求スルカ如キハ固ヨリ一ノ訴ヲ以テスルヲ許スノミナラス斯ル請求ハ其性質上之ヲ分離シテ二箇ノ訴ト爲サンヨリハ寧ロ一ノ訴ヲ以テスルヲ相當トス

第九十二條 訴狀カ第九十條第一號乃至第三號ノ規定ニ適セサルトキハ相當ノ期間ヲ定メ裁判長ノ命令ヲ以テ其期間内ニ欠缺ヲ補正ス可キコトヲ命ス若シ原告此命ニ從ハサルトキハ其期間ノ滿了後訴狀ヲ差戻ス可シ

此差戻ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

○送達後ニ爲シタル補正ノ申請ニ對シ被告カ異議ヲ唱フルトキハ補正ハ無効ナリ然レトモ其補正ニ對シ被告カ異議ナク答辯シ既ニ辯論ヲ經過シタル上ハ裁判官之ニ干渉シテ其補正ヲ無効タラシムヘキモノニ非ス被告モ亦後ニ至リテ其補正ニ異議ヲ唱フルヲ得ス

○不適法ノ訴狀ハ權利拘束ノ發生前ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ差戻シ得ヘキモ口頭辯論ヲ經タル後判決ヲ以テ之ヲ却下スルヲ得ス

(同旨)

三三	三七
三四	三
三九	九
五九	五

要件ニ缺漏アル訴狀ノ送達後補正ヲ許ス規定ナシ

第九十三條 訴狀カ第九十條第一號乃至第三號ノ規定ニ適スルトキハ口頭辯論ノ期日ヲ定メテ之ヲ被告ニ送達ス可シ

○呼出狀ニハ一定ノ方式ナシ故ニ其記載事項ニシテ訴訟者カ其訴訟ノ爲メニ呼出サレタルコトヲ知り得ヘキトキハ呼出ノ效力ヲ有スヘキハ勿論ナリ

第九十四條 訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニハ少ナクトモ二十日ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス

外國ニ於テ送達ヲ施行ス可キトキハ裁判長相當ノ時間ヲ定ム

第九十五條 訴訟物ノ權利拘束ハ訴狀ノ送達ニ因リテ生ス

- 權利拘束ハ左ノ效力ヲ有ス
- 第一 權利拘束ノ繼續中原告若クハ被告ヨリ同一ノ訴訟物ニ付キ他ノ裁判所ニ於テ本訴又ハ反訴ヲ以テ請求ヲ爲シタルトキハ相手方ハ權利拘束ノ抗辯ヲ爲スコトヲ得
 - 第二 受訴裁判所ノ管轄ハ訴訟物ノ價額ノ増減、住所ノ變更其他管轄ヲ定ムル事情ノ變更ニ因リテ變換スルコト無シ
 - 第三 原告ハ訴ノ原因ヲ變更スル權利ナシ但變更シタル訴ニ對シ本案ノ口頭辯論前被告カ異議ヲ述ヘサルトキハ此限ニ在ラス

○權利拘束ノ生シタル後訴訟ノ目的物ヲ被告カ他ニ讓渡スルモ爲メニ原

二九	九	五
三四	九	一八六

告ノ請求權ニ變動ヲ生スヘキモノニ非ス

○訴狀送達ニ因リ權利拘束ノ效力ヲ生シタル後ニ於テ爲替訴訟ヲ通常訴訟ニ改ムルハ民事訴訟法第九十五條第二項第二號ニ所謂管轄ヲ定ムル事情ノ變更アル場合ノ一ニ該當ス故ニ受訴裁判所ノ管轄ハ此事情ノ變更ニ因リテ變換スヘキモノニ非ス

○變更シタル訴ニ對シ其本案ノ口頭辯論前ニ對手者カ異議ヲ述ヘサルニ於テハ訴ノ變更ハ有效ナルモノトス

○訴狀ニハ被告カ論地ニ對シ故障スルノ權利ナシトノ判決ヲ求メ訴狀訂正申立書ニハ所有權ノ實行ニ對スル妨害タルヘキ棒杭ヲ取除クヘキ義務アリトノ判決ヲ請求シタルモノナルトキハ之カ訂正申立ハ訴ノ變更ニ非ス

○訴名並ニ一定ノ申立ヲ變更スルモ訴ノ原因ヲ變更セサレハ相手方ニ於テ之ヲ不當トスルヲ得ス

○契約履行ノ訴ヲ同一ノ義務確認ノ訴ニ變更スルカ如キハ訴ノ原因ニ變更ナシ

○訴狀ニ於ケル取消ノ二字ヲ一定ノ申立書ニ依リ解除ノ二字ニ改メタルトキト雖モ其起訴ノ精神定約ノ解除ヲ求ムルニ在ルコト明瞭ナルニ於

テハ其用語ヲ改メタルカ爲メ訴ノ原因ヲ變更シタルモノト云フヲ得ス

○當初相手方ノ違約ヲ理由トシテ手附倍還ノ請求ヲ爲シタルモノ後ニ至リ當事者間ノ契約解除アリタリトシテ手附金ノ返還ヲ請求スルハ訴ノ原因タル契約ノ不履行ヲ變更シテ不當利得ト爲スモノニシテ訴ノ變更ナリトス

○當事者ノ變更ハ訴ノ變更ノ一ニシテ法律ニ於テ其承繼ヲ認め又ハ其脫退ヲ認めル明文アル場合ノ外ハ之ヲ爲シ得ヘキモノニ非ス

○民法上地上權ノ地代ニ付テハ貸賃借ニ關スル規定ヲ準用スヘキ法規アレトモ元來地上權ト貸賃借トハ法律上之ヲ同一視スルヲ得ス故ニ貸賃借ノ關係ヲ原因ト爲シタル訴ヲ地上權ノ關係ニ變更スルハ訴ノ變更ト云ハサルヘカラス

○原告カ訴ヲ變更シタルトキハ舊訴ノ外一ノ新訴ヲ提起シタルニ外ナラサルカ故ニ其新訴ノ提起ニシテ法律上許サル、トキハ舊訴ハ取下ケタルモノト看做サレ消滅スヘキモ其新訴ノ許サレサル場合ニ於テ原告カ被告ノ承諾ヲ得テ特ニ舊訴ノ取下ヲ爲サ、ルトキハ舊訴ハ依然存在シ新訴ノミ終局判決ヲ以テ棄却セラルヘキモノトス

第九十六條 原告カ訴ノ原因ヲ變更セシテ左ノ諸件ヲ爲ストキハ被告ハ異議ヲ述フ

三	三	三	三
四	三	二	四
四	一	二	七
五	一	二	〇
五	一	二	〇
五	一	二	〇

三〇	二	一
三	〇	七
三	九	七
三	九	六
三	〇	九

ルコトヲ得ス

第一 事實上又ハ法律上ノ申述ヲ補充シ又ハ更正スルコト

第二 本案又ハ附帶請求ニ付キ訴ノ申立ヲ擴張シ又ハ減縮スルコト

第三 最初請求メタル物ノ減盡又ハ變更ニ因リ賠償ヲ求ムルコト

○第一審ニ於テ債務者數名ニ對シ單ニ債務辨濟ノ申立ヲ爲シ第二審ニ至リ更ニ連帶辨濟ノ申立ヲ爲スハ法律上ノ申述ヲ補充シタルモノニシテ訴ノ原因ヲ變更シタルモノニ非ス

(同主旨)

第一審ニ於テ單ニ辨濟ノ請求ヲ爲シ第二審ニ於テ連帶辨濟ヲ求ムルハ法律上ノ申述ヲ補充スルニ止マリ訴ノ原因ヲ變シタルモノニ非ス

○原告カ第一審ニ於テ被告ノ或行爲ヲ以テ契約違反ノ行爲ト主張シテ違約金請求ノ申立ヲ爲シ第二審ニ至リテハ更ニ他ノ行爲ヲ以テ均シク同契約違反ノ行爲ト爲シ併セテ之ヲ主張シタルトキハ民事訴訟法第九十六條ニ所謂訴ノ原因ヲ變更セスシテ事實上ノ申述ヲ補充シタルニ外ナラサルモノトス

○辯論ノ進行中請求金額ヲ増減スルハ民事訴訟法第九十六條第二號ノ所謂訴ノ擴張又ハ減縮ニ外ナラス之ヲ訴ノ變更ト云フコトヲ得ス

○控訴審ニ至リ利息ノ辨濟ヲ添加シ請求スルハ民事訴訟法第九十六條

三〇	九	三三
二九	九	三三
三二	九	三三
二六	一	二四

第二號ニ該當スルモノニシテ訴ノ變更ニ非ス

○民事訴訟法第九十六條第三號ハ訴訟提起後ニ生シタル出來事ノ爲メ執行不能トナリタル場合ニ民法ノ原則ニ從ヒ賠償ノ責ヲ盡サシムルコトヲ許シタル規定ニシテ單ニ其物件ノ代價ニ限り請求ヲ許スカ如キ狹隘ナル意義ニ解スヘキモノニ非ス

○請求物件ノ減盡又ハ變更ニ依リ求ムル賠償ハ債務者ノ善意又ハ惡意ニ從ヒ其賠償金額ニ等差ヲ生スルコトアルモ其請求ハ最初請求メタル物件ノ代用ナルヲ以テ訴ノ原因ニ變更ナシ

○質權者ハ其債權ノ満期ニ至ラサル間ハ質物ノ差押及ヒ公賣ヲ拒ムノ權利アリ故ニ債務者ノ他ノ債權者ヨリ不法ニ其占有ヲ奪ハレタル場合ハ訴追ヲ以テ異議ヲ主張シ之カ返還ヲ請求シ得ルハ勿論若シ公賣等ニ依リ現物ノ返還不能ニ至リタル場合ハ民事訴訟法第九十六條ニ依リ直チニ損害ノ賠償ヲ請求スルコトヲ得

第九十七條 訴ノ原因ニ變更ナシトスル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

○第一審裁判所カ訴ノ原因ニ變更ナシト裁判シタル件ニ付キ第二審裁判所カ更ニ訴ノ變更アリタルモノト爲シ其訴ヲ却下シタルハ不法ナリ

(同主旨)

三二	八	二六
二九	六	二〇
二九	六	二〇
三〇	四	六〇
二九	二〇	七五

訴之變更ナシトノ裁判ハ民事訴訟法第九十七條ノ規定ニ依リ一審級ニ於テ直チニ確定シ爾後審査ヲ許スヘキモノニ非ス故ニ上告審ニ於テ訴ノ變更ナシトシタル判斷ニ反シ控訴裁判所カ更ニ訴ノ變更アリト裁判シタルハ該法條ヲ無視シタルノ不法ヲ免カレン

三〇三 一六三

第九十八條 訴ノ全部又ハ一分ハ本案ニ付キ被告ノ第一口頭辯論ノ始マルマテハ被告ノ承諾ナクシテ之ヲ取下ク又其後口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ被告ノ承諾ヲ得テ之ヲ取下クルコトヲ得

訴ノ取下ハ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲ササルトキハ書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ
訴狀ヲ既ニ送達シタル場合ニ於テハ訴取下ノ書面ハ之ヲ被告ニ送達ス可シ
適法ナル取下ハ權利拘束ノ總テノ效力ヲ消滅セシムル結果ヲ生ス
取下ケタル訴ヲ再ヒ起シタルトキハ被告ハ前訴訟費用ノ辨濟ヲ受クルマテ應訴ヲ拒ムコトヲ得

第九十九條 訴狀送達ノ際十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出ス可キコトヲ被告ニ催告ス可シ

答辯書ニハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ヲ適用ス

第二百條 訴カ管轄裁判所ニ於テ權利拘束ト爲リタルトキハ被告ハ原告ニ對シ其裁判所ニ反訴ヲ起スコトヲ得

然レトモ財産權上ノ請求ニ非サル請求ニ係ル反訴又ハ目的物ニ付キ專屬管轄ノ規定アル反訴ハ若シ其反訴カ本訴ナルトキ其裁判所ニ於テ管轄權ヲ有ス可キ場合ニ限り之ヲ爲スコトヲ許ス
反訴ニ對シテハ更ニ反訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二百一條 反訴ハ答辯書若クハ特別ノ書面ヲ以テ又ハ口頭辯論中相手方ノ面前ニ於テ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

然レトモ答辯書差出ノ期間内ニ差出シタル書面ヲ以テ起ササル反訴ハ被告ノ請求ノ全部又ハ一分ト相殺ヲ爲ス可キ場合ニ於テ同時ニ被告カ自己ノ過失ニ因ラスシテ其以前反訴ヲ起スヲ得サリシコトヲ疏明スルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ許ス

○反訴ニ依リ義務ノ相殺ヲ求メタルモノニ對シ法律上ノ相殺ヲ主張スルモノトシテ其申立ヲ排斥シタルハ申立以外ニ於テ裁判ヲ爲シ申立ニ付テ裁判ヲ爲サ、ル不法ヲ免カレン

二九三 一〇四

○法律上ノ相殺ハ現行法中之ヲ認メス故ニ相殺ノ抗辯ハ民事訴訟法第二百一條ニ從ヒ反訴ノ方法ニ依ルニ非サレハ之ヲ提出スルコトヲ得ス

三〇五 三四

(同三三)

請求ヲ受ケタル金額ニ對シ別途ノ貸借ニシテ返濟期限ノ約定ナキ金額ヲ以テ相殺セント欲セハ須ラク反訴ノ方法ニ依ルヘク抗辯ノ方法トシテ之ヲ求メ得ヘキニ非ス

二六二 一六一

○訴訟ニ於テ被告ノ地位ニ立ツ者カ或契約ヲ詐害行爲ナリトシテ廢罷セシメントスルニハ之ニ因リ不當ニ利得シタル者ニ對シ尙ホ債務者ヲ參加セシメ更ニ訴ヲ提起シテ判決ヲ受クルカ又ハ其行爲カ事件ノ裁判ニ影響ヲ及ホス場合ニ於テハ第一審ノ審理中右ト同一ノ訴訟手續ヲ履ミ反訴ヲ提起シテ判決ヲ受クヘキモノトス

三〇九 一五九

○反訴ニ由リ詐害行為ノ廢罷ヲ主張セズ單ニ之ヲ抗辯方法トシテ主張シタル場合ニ於テ裁判所カ之ヲ採用シテ原告ノ請求ヲ斥ケタル裁判ハ不法ナリ

○期限後ニ提起セル反訴ニ付キ對手人カ異議ナク口頭辯論ヲ完結スルトキハ其反訴ハ有效ニ成立ス

第二百二條 訴ニ關スル此法律ノ規定ハ反訴ニ之ヲ適用ス但其規定ニ因リ差異ノ生ス可キトキハ此限ニ在ラス

第二百三條 裁判長ハ申立ニ因リ其命令ヲ以テ第九十九條ニ定メタル期間ヲ相當ニ短縮若クハ伸長シ又第九十四條ニ定メタル時間ヲ切迫ナル危險ノ場合ニ限り二十四時マテニ短縮スルコトヲ得

前項時間ノ短縮ハ此カ爲メ答辯書ヲ差出スコトヲ得サルトキト雖モ亦之ヲ爲スコトヲ得

本條ノ規定ハ第六十七條ニ掲ケタル規定ヲ妨ケス

第二百四條 各當事者ハ訴狀又ハ答辯書ニ掲ケサリシ事實上ノ主張若クハ證據方法又ハ申立ニ付キ相手方カ豫メ穿鑿ヲ爲スニ非サレハ陳述ヲ爲ス能ハスト豫知スル事項アルトキハ口頭辯論ノ前ニ書面ニテ差出ス可シ但其書面ヲ相手方ニ送達スル時間及ヒ相手方ヲシテ必要ナル穿鑿ヲ爲ス時間ヲ得セシム可シ

口頭辯論ノ延期ヲ爲ストキハ裁判所ハ爾後必要ナル準備書面ヲ差出ス可キ期間ヲ定ムルコトヲ得

第二百五條 口頭辯論ハ一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス

第二百六條 妨訴ノ抗辯ハ本案ニ付テノ被告ノ辯論前同時ニ之ヲ提出ス可シ

左ニ掲ケルモノヲ妨訴ノ抗辯トス

第一 無訴權ノ抗辯

第二 裁判所管轄違ノ抗辯

第三 權利拘束ノ抗辯

第四 訴訟能力ノ欠缺又ハ法律上代理ノ欠缺ノ抗辯

第五 訴訟費用保證ノ欠缺ノ抗辯

第六 再訴ニ付キ前訴訟費用未済ノ抗辯

第七 延期ノ抗辯

本案ニ付キ被告ノ口頭辯論ノ始マリタル後ハ妨訴ノ抗辯ハ被告ノ有效ニ拋棄スルコトヲ得サルモノナルトキ又ハ被告ノ過失ニ非スシテ本案ノ辯論前ニ其抗辯ヲ主張スル能ハサリシコトヲ証明スルトキニ限り之ヲ主張スルコトヲ得

○妨訴ノ抗辯トハ民事訴訟法第二百六條ノ列記ニ限ルモノトス

○地所買戻ノ訴訟ニ付キ代金ノ提供ヲ要スルト否ハ相手方カ有效ニ拋棄シ得ヘキ抗辯ノ一方法ニ屬シ裁判所カ職權ヲ以テ調査スヘキ事項ニ非ス

○村會カ議決シタル事柄ニ對シ之カ當否ヲ論スルモ民事訴訟トシテ判決スヘキ限ニ在ラス

二五	二九	二六
五	六	二
九	六	五

二六	三〇
二	九
六	五

○村長ハ個人ニ關スル訴訟ヲ提起スルノ權利ナシトノ抗辯ハ唯妨訴ノ抗辯ニシテ民事訴訟法ノ所謂無訴權ノ抗辯ニ非ス

○仲裁契約ニ基ク抗辯ハ民事訴訟法第二百六條第二項第一號ニ所謂無訴權ノ抗辯ナリ

(同三三)

或事件ニ付キ仲裁契約ノ成立スル以上ハ當事者ハ其契約ニ羈束セラルヘキヲ以テ該事件ニ關シ裁判所ニ出訴スヘキモノニ非ストノ抗辯ヲ爲シ得ヘキモノトス

○權利拘束ノ抗辯ハ訴ヲ絶對ニ不適法ナリトスル事由ニ基クニ非スシテ唯權利拘束ノ期間ナルカ故ニ不適法ナリト云フニ過キサルヲ以テ訴ヲ提起シタルトキハ縱令權利拘束中ナリトスルモ判決ヲ爲ストキニ於テ權利拘束ノ事由消滅シタルトキハ其抗辯ハ理由ナキニ歸スルモノト云ハサルヲ得ス

○民事訴訟法第二百六條第七號ニ延期ノ抗辯ヲ妨訴ノ抗辯ナリトスル規定ハ實體法即チ民法債權擔保編第二十四條ニ基クモノトス故ニ其實體法ノ實施ナキ日ニ在テハ延期ノ抗辯ヲ主張スルヲ得ス

○訴訟能力ノ欠缺又ハ法律上代理ノ欠缺ノ抗辯ハ職權調査ニ屬スル事項ナルヲ以テ當事者ハ其過失ニ非スシテ第一審ニ提出シ能ハザリシコト

ヲ疏明スルノ要ナク第二審ニ於テ之ヲ提出シ得ヘキノミナラス決シテ之ヲ拋棄スルコトヲ得サルモノトス

第二百七條 被告カ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ムトキ又ハ裁判所カ申立ニ因リ若クハ職權ヲ以テ別ニ辯論ヲ命スルトキハ其抗辯ニ付キ別ニ辯論ヲ爲シ及ヒ判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

妨訴ノ抗辯ヲ棄却スル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看做ス但裁判所ハ申立ニ因リ本案ニ付キ辯論ヲ爲ス可キヲ命スルコトヲ得

○訴訟委任欠缺ノ争アルモ後ニ其欠缺ナキ事實明瞭シ當事者間異議ナキトキハ特ニ之カ中間判決ヲ爲サルモ可ナリ

第二百八條 裁判所ハ計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ニ於テハ口頭辯論ヲ延期シ準備手續ヲ命スルコトヲ得但妨訴ノ抗辯アリタルトキハ其完結後之ヲ爲ス

第二百九條 攻撃及ヒ防禦ノ方法(反訴、抗辯、再抗辯等)ハ第二百一條ニ規定スル制限ヲ以テ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ提出スルコトヲ得

○行政官ノ土地官民有區分ノ査定ニ不服ナレハ訴願又ハ行政訴訟ヲ提起スルヲ得ヘキモ其不服ノ理由ハ普通訴訟ニ對スル防禦方法ト爲スコトヲ得ス

○既判力ニ因ル不受理ノ抗辯ハ訴訟ノ審級如何ヲ問ハズ又一旦拋棄シタルニ拘ハラス判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ何時ニテモ之

三四 五 七三

二元 三 四

元 五 四

二七 〇 二六二

三 〇 二四二

三 〇 二四二

三 八 五

元 〇 一

ヲ提出スルコトヲ得

○判決ノ效力ハ其訴訟ニ參加シタルモノニ非サレハ之ヲ主張スルヲ得

○磯漁場區域ノ確定並ニ之ニ關シ行政官廳ニ提出スヘキ書面ニ調印ヲ請求スル訴訟ハ財産ノ利益ヲ得ントスルモノニ外ナラサルカ故ニ財産權上ノ請求ニ付テノ訴ニ非スト云フコトヲ得ス

○起訴後ニ生シタル事實ト雖モ一ノ攻撃若シハ防禦ノ方法ト爲スコトヲ得ルハ判例ノ認ムル所ナリ

○差圖證券ノ債務者ハ其證券ニ記載シタル事項又ハ其證券ヨリ當然生スル抗辯ニ由ルニ非サレハ其債權者ニ對抗スルヲ得ス

第二百十條 被告ヨリ時機ニ後レテ提出シタル防禦ノ方法ハ裁判所カ若シ之ヲ許スニ於テハ訴訟ヲ遅延ス可ク且被告ハ訴訟ヲ遅延セシメントスル故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ早ク之ヲ提出セザリシコトノ心證ヲ得タルトキハ申立ニ因リ之ヲ却下スルコトヲ得

第二百十一條 訴訟ノ進行中ニ争ト爲リタル權利關係ノ成立又ハ不成立カ訴訟ノ裁判ノ全部又ハ一分ニ影響ヲ及ホストキハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ原告ハ訴ノ申立ノ擴張ニ依リ又被告ハ反訴ノ提起ニ依リ判決ヲ以テ其權利關係ヲ確定センコトヲ申立ツルコトヲ得

二元	二元	二元	三元	三元
二	三	〇	三	三
七九	四七	九	四	六

第二百十二條 訴狀其他ノ準備書面ニ於テ主張セサル請求ノ權利拘束ハ口頭辯論ニ於テ其請求ヲ主張シタル時ヲ以テ始マル

第二百十三條 各當事者ハ事實上ノ主張ヲ證明シ又ハ之ヲ辯駁セン爲ニ用井ントスル證據方法ヲ開示シ且相手方ヨリ開示シタル證據方法ニ付キ陳述ス可シ
各箇ノ證據方法ニ付テノ證據申出及ヒ之ニ關スル陳述ハ第六節乃至第十節ノ規定ニ從フ

○身代限ノ事實ヲ申立ル者ニ於テ其證據ヲ提出セサル以上ハ之ヲ非認スル者ニ於テ舉證ノ責任アラヌ

○明示ヲ受ケサルモノハ舉證ノ責ナシ

○貸借ノ關係ナキ者ヨリ金圓ヲ受取リタルカ爲メ争ヲ生スルトキハ先ツ其送金ヲ受クヘキ理由即チ他人ノ代償金トシテ受取リタル等ノ確證ヲ舉ケサルヘカラス

○債務追認ノ證書アルモ他ニ同一ノ主趣ニテ債務ノ關係アルトキハ其證書ハ他ノ債務ノ追認ニ非スシテ此債務ノ爲メナルコトノ舉證ハ之ヲ提出シタル者ノ責任タル論ヲ竣タス故ニ其舉證ノ責任ヲ盡サ、ルトキハ之ヲ理由トシテ排斥スルハ當然ナリ

○船籍ニ登録シアル船舶ハ法律上現存スルモノト推測スヘキハ當然ナルヲ以テ該公簿ニ記載ノ船舶ニシテ現在セサルモノトセハ其反對主張者

二四	二五	二六
一	五	二
一四	五	一〇一

ニ於テ舉證ノ責ヲ負ハサルヘカラス
 ○舉證ノ責ハ某權利ヲ有スト主張スル原告ニ在ルモノトス
 ○凡ソ訴訟當事者ニ於テ物ノ所有權ヲ爭フニ方リテハ之ヲ占有セサル者ハ現ニ之ヲ占有スル者カ所有ノ權利ナクシテ之ヲ占有スルコトヲ證明スル責任アリ之ヲ占有スル者ヨリ先ツ自己所有ノ權利ヲ證明スルノ責任ナキナ法則トス
 ○事實ノ主張者ハ其主張ヲ證明スヘキ一應ノ證據力ヲ有スル證據ヲ舉ケサレハ自ラ立證ノ責ヲ盡シ相手方ニ舉證ノ責ヲ負ハシメタルモノト云フヲ得ス

(同三三)

見本ノ爭點ニ係ルコトヲ認メテカラ之ヲ遺却シテ何等ノ排斥ヲ示サス反對立證ノ責任ヲ歸シタルハ違法ノ裁判ナリ

○裁判ハ適法ニ爲サレタルモノト推定スヘキハ當然ノ條理ナリ故ニ訴訟手續ニ違背シタル不法アリト論告スル者ハ其主張ノ事實ヲ證明セサルヘカラス

○秘密證書即チ反對證書ノ效力ハ其結約當事者間ニ限ラヌ其證書存在ノ事實ヲ知レル特定權原ノ承繼人及ヒ當事者ノ債權者ニ對シ之ヲ主張ス

ルコトヲ得ヘシ

○婦ハ其夫ト共棲スヘキ義務アルモノナレハ其夫家ヲ立出タルハ自己ノ任意ニ非スト主張スル婦ハ之カ立證ヲ爲スノ責任アリ

○公共河水ノ使用者カ他ノ新工事ヲ差止ムルニハ其河水ノ分量ト工事ノ爲メ用水ノ減少スヘキ事實ヲ證明セサルヘカラス

○一件記録焼失シ原審訴訟手續上ノ違法ヲ調査スル道ナキ場合ニ於テハ其違法ヲ攻撃スル者ヨリ之カ立證ヲ爲サルヘカラス

○無的ノ事實ハ之ヲ證明シ能ハストノ原則ナシ故ニ契約ニ原因ヲ缺クコトヲ主張シ其成立ヲ爭フモノハ之ヲ證明スルノ責任アリ

○地所ノ取戻ヲ請求スル者ニ於テ其地所カ自己ノ所有ナリトコトヲ立證シ得サルトキハ對手者ノ主張セル原因カ虛無ニ屬スルコトヲ證シ得タリトスルモ取戻ノ權ナシ

○貸借契約ニ於テ當事者カ一年毎ニ元利金ヲ精算シテ借用證書ヲ書改メ利金ヲ元金ニ組込ムハ普通有リ得ヘキ事柄ナルニ之ヲ異常ノ事柄ナリトシテ其事實ノ主張者ニ立證ノ責ヲ負ハシメタルハ不法ナリ

○檢眞ヲ經タル私署證書ト雖モ未タ其裁判確定セサル以上ハ之ニ關スル舉證ノ責任ハ普通ノ場合ト毫モ異ナルコトナシ故ニ其證書成立ノ真正

二元	二元	二元	二元	二元	二元
三元	三元	三元	三元	三元	三元
一元	一元	一元	一元	一元	一元
二元	二元	二元	二元	二元	二元
三元	三元	三元	三元	三元	三元
一元	一元	一元	一元	一元	一元
二元	二元	二元	二元	二元	二元
三元	三元	三元	三元	三元	三元
一元	一元	一元	一元	一元	一元
二元	二元	二元	二元	二元	二元
三元	三元	三元	三元	三元	三元
一元	一元	一元	一元	一元	一元

二元	二元	二元	二元	二元	二元
三元	三元	三元	三元	三元	三元
一元	一元	一元	一元	一元	一元
二元	二元	二元	二元	二元	二元
三元	三元	三元	三元	三元	三元
一元	一元	一元	一元	一元	一元
二元	二元	二元	二元	二元	二元
三元	三元	三元	三元	三元	三元
一元	一元	一元	一元	一元	一元
二元	二元	二元	二元	二元	二元
三元	三元	三元	三元	三元	三元
一元	一元	一元	一元	一元	一元

ナルコトヲ主張スル者先ツ之カ舉證ノ責ヲ負フヘキハ證據法上當然ノ順序ナリトス

○當事者ノ提出セサル證據ニ依リ出訴期限中斷ノ事實ヲ認定シタルハ違法ナリ

(同三言)

原院方法廷ニ提出セサル證據ヲ裁判ノ資料ニ供シタルハ不法ナリ縱令該證ヲ法廷ニ提出シタルモ當事者カ該證ニ不服ナルニ其文詞ヲ採用シテ之カ裁判ヲ爲サンニハ相當ノ理由ヲ示サハルヘカラス

當事者ノ引用セサル證人ノ證言ヲ採リテ判斷ノ材料ト爲シタル裁判ハ不法ナリ

○母ノミ存在スル幼者ノ後見人トナリタル者ハ其母カ後見人ノ選定ヲ承諾シタル事實ヲ立證スルノ責任アリ

○印影盜用證書偽造ノ如キ異常ノ事實ヲ主張スル者ハ自ラ其舉證ノ責任セサルヘカラス

(同三言)

立證ノ責任ハ異常ヲ主張スル者ニ在リ

例外ノ事ハ通常明示スヘキモノトス之ヲ推定スルヲ得サルハ一般普通ノ法理ナリ

請求者ハ其主張ヲ證明スル責任アリ異常ノ事實ヲ主張スル者モ亦舉證ノ責任アルモノトス異常ノ事實又ハ既存ノ狀態ニ反スル事實ヲ主張スル者ハ舉證ノ責任アリ

三〇	一〇	五〇
三	七	四
二七	〇	一九二
二九	九	二
三	八	二四
三	〇	二
二五	三	三五
二五	五	四
二六	八	七
三〇	四	四

○不當利得ノ返還ヲ請求スル者ハ其相手方カ法律上ノ原因ナクシテ利益ヲ得タル事實ヲ立證セサルヘカラサルノミナラス尙ホ之カ爲メ自己ノ被フリタル損失ノ事實ヲモ立證スルノ責アリトス

○債務ノ消滅ヲ主張スル者ハ其主張ノ眞實ナルコトヲ證明スルノ責アリトス

○官署又ハ公署ニ在ル證書カ眞實ニ非サルコトヲ主張スル場合ニ於テ之カ反證ヲ許スヘキハ論ヲ竣タス

○拒絕證書カ拒絕者ノ營業所又ハ住所以外ニ於テ作成セラレタルモノナルヤ否ヤヲ争フトキハ被拒絕者ニ於テ其場所ハ拒絕者ノ營業所又ハ住所ナルコトヲ證明スルノ責任アルモノトス

○選舉ニ關スル運動費ト稱スルモノ、給付ナレハ即チ不法ノ原因ニ出テタル給付ナリトハ概言スルコトヲ得サルヲ以テ其金錢給付ノ目的不法ナリシコトヲ主張スル者ニ證明ノ責任アリ

第二百十四條 證據方法及ヒ證據抗辯ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ主張スルコトヲ得

證據方法及ヒ證據抗辯ノ時機ニ後レタル提出ニ付テハ第二十條ノ規定ヲ適用ス

第二百十五條 證據調査ニ證據決定ヲ以テスル特別ノ證據調手續ノ命令ハ第五節乃至第

三	六	五
三	九	八
三	九	八
三	九	八
三	一	六
三	二	七

事實ノ如何ニ因リ其相續權ノ有無ヲ判斷スルハ事實裁判官ノ職權ニ屬ス

○地租ハ土地所有者ノ負擔スヘキ公ノ義務ナリト雖モ地租ヲ上納スルカ爲メニ其土地ニ對シ常ニ完全ナル所有權ヲ有スルモノト斷スルコトヲ得ス

○事實裁判所ハ當事者ノ主張シタル事實ノ範圍内ニ於テ自由ニ事實ノ認定ヲ爲スコトヲ得ルモノトス

○當事者ノ申請ニ因リ第三者ヲシテ提出セシメタル證據ハ相手方ノ認否如何ニ拘ハラス裁判官力之ニ心證ヲ措クニ足ルト認ムル以上ハ之ヲ採用スルコトヲ得ルモノトス

○判事カ心證ヲ以テ證據ヲ取捨スルコトヲ得ヘキ場合ニ於テ其心證ノ憑據トスヘキモノハ必スシモ當事者ノ申立テタル事項ニ限定セラルヘキモノニ非ス

(同主旨)

當事者ノ争ハサル事實ハ直チニ探テ之ヲ事實認定ノ材料ニ供スルモ違法ニ非ス
攻撃論等ノ點顯然タルニ毫モ異議ナキ證據ノ如ク卒然之ヲ採用シテ認定シタルハ違法ノ判決ナリ

三〇	九	二五
三一	二	二四
三二	一	二二
三三	一	二〇
三四	二	一八

當事者ノ辯論セス立證セサルモノヲ以テ事實ヲ確定シ法則ヲ不當ニ適用シタル裁判ハ違法ナリ

凡ソ裁判官力心證判斷ニ供スル材料ハ必スシモ辯論ヲ經タル事柄タルヲ要セス

○婦カ一時夫ノ家ヲ立去リタルハ默示ノ離婚ナリヤ否ヤヲ判斷スルハ事實裁判所ノ職權ニ屬ス

○養育料額ノ多寡ハ裁判所カ自由ノ心證ヲ以テ判斷スヘキ事柄ナルカ故ニ其心證ノ由來ヲ説明スルヲ要セス

○書證ト人證トハ法律上輕重ナキヲ以テ其取捨ハ事實裁判所ノ專權ニ屬ス

○執達吏カ當該官署若クハ公署ニ問合ヲ爲サスシテ振出人ノ住所ナリト判斷シタル事項ハ裁判所ヲ羈束スル效力ナシ

○取消シ得ヘキ法律行為ノ追認ニ關スル規定特ニ其制限ハ民法實施以前ニ在テハ之アラザリシヲ以テ事實裁判所ハ相當ノ證據ニ依リ自由ナル心證ヲ以テ其追認ヲ判斷スルコトヲ得ルモノトス

○民法施行前ニ於テハ占有者ノ意思ノ善惡ヲ判定スルニ付キ別段ノ法則ナカリシヲ以テ裁判所ハ之ヲ事實問題トシテ各證據ニ依リ自由ナル心證ヲ以テ判定スヘキモノトス

二五	五	一〇六
二六	六	一〇七
二七	七	一〇八
二八	八	一〇九
二九	九	一一〇
三〇	一〇	一一一
三一	一一	一一二
三二	一二	一一三
三三	一三	一一四
三四	一四	一一五
三五	一五	一一六
三六	一六	一一七
三七	一七	一一八
三八	一八	一一九
三九	一九	一二〇
四〇	二〇	一二一
四一	二一	一二二
四二	二二	一二三
四三	二三	一二四
四四	二四	一二五
四五	二五	一二六
四六	二六	一二七
四七	二七	一二八
四八	二八	一二九
四九	二九	一三〇
五〇	三〇	一三一
五一	三一	一三二
五二	三二	一三三
五三	三三	一三四
五四	三四	一三五
五五	三五	一三六
五六	三六	一三七
五七	三七	一三八
五八	三八	一三九
五九	三九	一四〇
六〇	四〇	一四一
六一	四一	一四二
六二	四二	一四三
六三	四三	一四四
六四	四四	一四五
六五	四五	一四六
六六	四六	一四七
六七	四七	一四八
六八	四八	一四九
六九	四九	一五〇
七〇	五〇	一五一
七一	五一	一五二
七二	五二	一五三
七三	五三	一五四
七四	五四	一五五
七五	五五	一五六
七六	五六	一五七
七七	五七	一五八
七八	五八	一五九
七九	五九	一六〇
八〇	六〇	一六一
八一	六一	一六二
八二	六二	一六三
八三	六三	一六四
八四	六四	一六五
八五	六五	一六六
八六	六六	一六七
八七	六七	一六八
八八	六八	一六九
八九	六九	一七〇
九〇	七〇	一七一
九一	七一	一七二
九二	七二	一七三
九三	七三	一七四
九四	七四	一七五
九五	七五	一七六
九六	七六	一七七
九七	七七	一七八
九八	七八	一七九
九九	七九	一八〇
一〇〇	八〇	一八一

○訴訟ニ關與セサルモノニ對シ確定判決ノ效力ヲ及ホシ之カ執行ヲ爲サ
ントスルハ訴訟手續ノ許認セサル所ナルノミナラス縱令保證人ト雖モ
之ニ關與セサル限りハ主タル義務者カ受ケタル判決ニ羈束セラルヘキ
モノニ非ス

○判決ハ訴訟當事者以外ニ其效力ヲ及ホサストノ原則ハ相續權回復ノ訴
訟ニ付テモ適用シ得ヘキモノトス

(同主旨)

判決ハ第三者ニ對シテ效力ヲ有セス或場合ヲ除クノ外刑事ノ判決モ亦然リ
判決ハ當事者以外ニ確定力ヲ有スルモノニ非ス

○確定判決ト雖モ一事不再理ノ原則ニ適合スルモノニ非サル以上ハ裁判
所ハ之ニ羈束セラルヘキモノニ非ス從テ一般ノ證據ト等シク之カ判斷
ヲ爲シ得ヘキモノトス

(同主旨)

同一ノ探證法ヲ以テ同一ノ斷定ヲ下スニ非サル限りハ裁判所ハ他ノ裁判ニ羈束セラルトモ
ニ非ス

裁判上既ニ確定シタル事實ハ之ヲ爭フコトヲ得ス
裁判官ハ證據調ノ結果ニ就キ他ノ判決ニ羈束サルトコトナク自由ナル心證ヲ以テ判斷スルノ
權アリ

二六	二五	三	二四	三〇	二六
二	六	三	一〇	二	〇
二九	九	一九	四	三	三

前後ノ訴訟カ互ニ其原因及ヒ目的ヲ異ニスルトキハ後ノ訴訟ハ前ノ確定判決ノ效力ニ羈束セ
ラルトコトナシ

○既ニ死亡シタル者ノ氏名ヲ答辯書及ヒ委任狀等ニ記入調印シテ之ヲ裁
判所ニ提出シ裁判所亦其死亡者ニ對シテ判決ヲ爲シタル場合ニ於テハ
其判決タル死亡者ノ相續人ニ對シ何等ノ效果ヲ生セス

○寺院ニ對スル訴訟ニ付キ住職ニ非サル者ニ爲シタル訴狀ノ送達ハ實質
上送達ノ效ナシト雖モ其者ニ於テ寺院ノ代表者トシテ應訴シ裁判ヲ受
ケ其裁判確定シタルトキハ形式上寺院ニ對シ確定力ヲ生スルモノトス

○民事裁判上當事者ノ提出スル刑事判決書ハ固ヨリ一ノ書證ニ過キサル
ヲ以テ民事訴訟法第二百十七條ニ規定ノ探證自由ノ原則ノ適用ヲ制限
スル規定アルニ非サレハ刑事判決ニ依リ確定シタル事實ニ反スル判斷
ヲ下ス妨ケトナルモノニ非ス

(反對)

民事裁判所カ刑事ノ確定判決ニ依據スルハ犯罪ノ性質若クハ罪責等ノ事柄ニ限ル
民事ノ判決ハ犯罪ノ眞實犯罪ノ性質及ヒ被告ノ罪責ニ付キ刑事ノ判決ニ羈束セラルトモ無罪
ヲ言渡シタル判決ニ羈束セラルト事ナシ
民事ノ判決ハ刑事判決ニ於テ確定シタル犯罪所爲ノ眞實其犯罪ノ性質被告人ノ罪責等ニ羈束
セラルトモノトス

二六	二六	三	二四	三〇	二六
五	四	九	二	二	五
一〇	四	五	二	三	三

刑事裁判ハ犯罪ノ性質被告人ノ罪責ニ付キ裁判シタル場合ニ非サレハ民事裁判ニ其既判力ヲ及ホスヘキモノニ非ス

刑事ノ判決カ民事ノ判決ヲ羈束スルハ犯罪ノ眞實犯罪ノ性質及ヒ被告人ノ罪責ニ限ルモノトス

○刑事ノ確定判決ハ一箇ノ證據トシテ判斷ノ資料ニ供スルハ格別ナルモ民事裁判所ハ之ニ羈束セラレサルモノトス

(同主旨)

判決ノ理由中ニ認定シタル事實ハ確定ノ效力ヲ有セスト雖モ事實裁判官ノ心證判斷ニ委スヘキ證據トシテハ之ヲ提出スルヲ得ヘシ故ニ原院カ其事實ヲ認定シタルハ違法ニ非ス

證據不充分ナリトシテ無罪ヲ宣渡シタル刑事ノ判決ハ民事ノ裁判ヲ羈束セス

○自白ハ同一事件同法廷若クハ其二審ニ於テ效力ヲ有スルモ別件又ハ他ノ裁判所ニ於テハ之カ效力ヲ有セス

(同主旨)

裁判上ノ自白ハ之ヲ爲シタルモノニ對シ完全ナル證據力ヲ有スルモ裁判外ノ自白ハ必スシモ證據ノ效力ヲ有スルモノニ非ス

○訴訟當事者ノ一方カ訴外者ニ對シテ別訴訟ニ於テ爲シタル事實上ノ陳述ハ他ノ一方ニ對シ裁判上ノ自白タル效力ヲ有セス

○錯誤ニ出テタル自白ハ之ヲ取消スコトヲ得

(同主旨)

自白ハ法律上有効ノ意思表示タルヲ要ス從テ錯誤ニ基ク自白ハ之ヲ取消シ得ヘキモノトス

○裁判上ノ自白ハ口頭辯論ノ經過中ニ發生シタルモノニ限り單ニ準備書面中ニ存在スル自白ノ如キハ裁判外ノモノニ屬ス

○裁判上ノ自白アルトキハ其自白セラレタル事實ハ例外ノ場合ヲ除ク外法理上常ニ必ス確實ナルモノト看做スヘク裁判所モ亦自白ノ存スル限リハ之ニ從テ裁判ヲ爲サ、ルヘカラサルモノナルニ依リ此場合ニ於テ對手人ハ他ノ證明ヲ爲スノ責任ナシ

(同主旨)

裁判上ノ自白ハ例外ノ場合ヲ除クノ外法理上常ニ必ス確實ナルモノト看做スヘク隨テ裁判所モ亦自白ノ存スル限リハ之ヲ無視スルコトヲ得ス對手人ハ他ノ證明ヲ爲スニ及ハス唯其自白ノミチ以テ充分ニ證明スルコトヲ得ルモノトス

○豫審調書ノ如キ私文ト異ナルモノハ縱令當事者ノ一方之ヲ認めメスト云フモ採テ事實認定ノ材料ト爲スコトヲ得

○判決、決定書ノ如キ書面其モノハ公正證書タル勿論ナレハ乃チ某證中ニ記載セラレタル或事項即チ曾テ某氏カ刑事ノ訴追ヲ受ケ被上告會社ニ不利益ノ供述ヲ爲シタリトノ點ニ就テハ證據ト爲ルヘキモ其刑事ノ被告人等カ隨意ニ爲シタル供述ハ法律上第三者タル被上告會社ニ義務

二九	一〇	七
三〇	六	三
三四	五	七
二七	〇	二
二九	四	二
二九	六	五
二九	一	三
三〇	三	三
三〇	二	四
三〇	三	八

二九	四	一
三〇	三	三
三〇	一	八
三三	五	四
二八	〇	五
二四	一	八

- 戸長ノ公證若シハ登記ノ如キハ當事者間ニ於テハ反對ノ證據ニ依リ其效力ヲ滅却スルコトヲ得ルト雖モ第三者ニ對スル關係ニ付テハ法律上當然不成立ニ歸スヘキ原因アルニ非サレハ其效力ヲ失ハセ得ヘキモノニ非ス
- 縣廳ノ訓令若クハ戸長ノ證明書ハ當事者ノ否認ニ因リ其效力ニ輕重アルヘキモノニ非ス
- 村長カ其職務上所管ノ公簿ニ依リ調査ノ結果ヲ記述セシ書面ハ村役場ノ公印押捺ナキモ其成立ヲ認メタル者ニ對シ法律上證據力ヲ有ス
- 村長カ一己ノ想像ヲ記述シタル證明書ハ法律上證據タルノ價值ヲ有セス
- 村會ノ議決書ハ公文書ナルカ故ニ對手人ニ於テ偽造若クハ變造ナリトシテ其眞否確定ノ申立ヲ爲サス從テ裁判所カ之ヲ偽造若クハ變造ナリト認メサリシトキハ其議決書ニ記載ノ事實ハ眞正ノ事實ナリト爲サルヘカラス
- 公ノ役場ニ保存シアル圖書ト雖モ概シテ完全ノ證據力ヲ有セス故ニ下調等ニ屬シ未タ完備セサルモノニ對シテハ裁判所ハ自由ナル心證ヲ以テ其效力ノ有無ヲ判スルコトヲ得

二元	二元	二元	二元	二元	二元
〇	〇	〇	〇	〇	〇
二元	二元	二元	二元	二元	二元
四	四	四	四	四	四
七	七	七	七	七	七

- 裁判所ノ發付スル正本又ハ謄本ノ信憑力ハ法律上其原本ト同一ナリトノ推定ヲ受クルニ在リテ原本ニ對シ獨立ノ效力ヲ有スルモノニ非ス
 - 陸軍省等ノ指令ハ法律ノ效力ナキヲ以テ其取捨ハ裁判官ノ自由ナリ
 - 公正證書成立後ニ必要ノ記入ヲ爲スモ其證書全部ノ無効ヲ來サス
 - 戸籍及ヒ人別ニ關スル事項ハ當然村長カ管理スヘキモノナルヲ以テ之ニ對スル事實ノ證明ハ有效ナリ
- (同五三)
- 公正ノ證書ヲ以テ證明シタル後見人ハ法律上有效ニ認ムヘキモノナリ
 - 公正證書ノ明文ニ反對スル事實ノ證明ナキ以上ハ其公正證書ニ依リ事實ヲ確定シタルハ至當ナリ
 - 戸籍ハ身分ヲ證スル公正ノ簿冊ナルヲ以テ其記事ノ虛構ヲ證示セサル限りハ戸籍ニ依據シテ人ノ身分ヲ定メサルヘカラス
 - 人ノ身分ヲ證スル公正ノ帳簿ナル戸籍ニ依リ親子ノ關係ヲ認メタル原院判決ハ適當ナリ
 - 公證ノ形式ヲ具備セル書入證文ハ偽造若クハ變造ノ證明アルマテハ一應債務者ノ承諾上公證ヲ受ケタルモノト推測スヘキモノトス
- (同五四)
- 公正證書ハ正當ノ方式ヲ遵奉シテ作成シタルモノナリト雖モ公吏カ當事者ヨリ託セラレタル

二元	二元	二元	二元	二元	二元
五	五	五	五	五	五
二元	二元	二元	二元	二元	二元
六	六	六	六	六	六
八	八	八	八	八	八
九	九	九	九	九	九
六	六	六	六	六	六

事實ヲ證スルニ過キサレハ裁判官ニ於テ該書ノ成立セシ事實ヲ調査シ不正ノ成立ニ係ル事實ヲ認メタル以上ハ別ニ證據ヲ要セス之ヲ無効ト爲スコトヲ得ヘシ
 村役人ノ與書又ハ裏書アル不動産買入又ハ書入ノ證書ハ登記法發布以前ニ於テ戸長ノ公證シタル契約書ト同シク反證アラサル限りハ裁判上證據トシテ採用セサルヘカラス然ルニ原院カ上告人ノ提出セル村役人ノ裏書アル證書ノ眞否ヲ審究セス之ヲ一人ノ私證書ト同視シ被上告人ノ否認シタルノミチ理由トシテ上告人ノ證據方法ヲ排斥シタルハ探證ノ法則ニ違背セル裁判ナリ〔三四年五卷一〇〇頁參照〕

○公正證書ヲ以テ約シタル事項ノ變更ヲ證スルニハ必スシモ公正證書ヲ以テセサルヘカラサルノ法規ナキヲ以テ如何ナル證據方法ニ依ルモ妨ケナシトス

○戸長ノ公證アル地所建物書入金子借用證書ハ公正證書タリ故ニ相手方ノ否認ニ因リ其效力ヲ失フモノニ非ス

(同三〇)

當事者ノ否認ニ依テ公簿ノ證據力ヲ抹殺シ得ルモノ、如ク判斷シタルハ不法ヲ免カレシ、村役場備附ノ印鑑ハ單ニ其印鑑提出者ノ否認ヲ以テ信憑力ヲ失フモノニ非ス、戸長ノ證明書ハ當事者ノ認否ニ依リ其效力ヲ左右セラルトモノニ非ス

○戸籍吏ハ戸籍簿ノ記載事項ニ關シ事實ノ判斷ヲ爲シテ證明ヲ爲スノ權限ヲ有セス故ニ出生年月日ニ關シ戸籍吏自身ノ判斷ニ依レル事實ヲ掲

二六	二七	三三	三三	三三	二元
二	〇	五	三	五	九
三〇	五〇	一九	一四	四〇〇	六五

載シタル書面ハ何等ノ證據力ナシトス

○公文書記載ノ事項ト雖モ法律ノ規定ニ依リ公吏若クハ官吏カ特ニ無資力ヲ證明スル爲メニ作成シタル文書ニ非サルヨリハ之ヲ以テ争ニ係ル無資力ノ事實ヲ認定スルニ足ルヤ否ヤヲ決スルハ事實裁判官ノ自由判斷ニ屬スルモノトス〔第八節三四年一卷一頁參照〕

(同三一)

事實裁判官ハ官吏若クハ公吏カ法律ノ規定ニ依リ一定ノ方式ニ從ヒ作成シタル公正證書ノ性格ヲ有スルモノ、外公文書ナルト私文書ナルトニ拘ハラズ自由ノ心證ヲ以テ其眞否ヲ決シ得ヘキモノトス

○公正證書ト雖モ其内容タル約旨ニ付キ事實裁判所ハ自由ナル心證ニ依リ其事實ヲ判斷シ得ヘシ

(同三二)

土告人カ地租改正ノ際相當吏員ノ職權ヲ以テ調製シタル一村ノ圖面ニ錯誤アルコトヲ主張セシト欲セハ先ツ行政手續上圖面ノ訂正ヲ求メサルヘカラスト論告スレトモ原院ハ其圖面ニ記載スル道形ヲ誤謬ナリトシテ非認シタルニ非ス從來道數アルコトヲ證スルニ足ラストシテ之ヲ排斥シタルニ過キス之ヲ排斥スルニ付テノ理由トシテ地主總代ノ陳言等ヲ以テスルニ於テハ縱令公文書ト雖モ司法裁判上之ヲ取捨スルヲ得ヘシ
 村助役カ證明シタル繪圖面カ粗製ニシテ其記入間數ニ少差ナキヲ保シ難キ場合ト雖モ該圖自

三	三	三	三	二七
九	三	一	〇	〇
六	三	元	一六三	

體ヲ真正ナリト認ムルトノ説明ハ相當ナリ
 公正證書ト私署證書トノ中ニ記載ノ金高符合セサル場合ニ於テ其何レカ事實ニ適スルヤヲ定
 ムルハ事實裁判官ノ自由ナリ
 公正證書記載ノ事項ニ付キ事實裁判所カ證人ノ證言又ハ其他ノ狀況證據ニ依リ之ト反對ノ事
 實ヲ認ムルモ不當ニ非ス
 戶長カ職權上認證セル證書ナリト雖モ信用スルニ足ラサル理由存スルトキハ之ヲ排斥スルコ
 トヲ得
 公正證書ハ形式的確實ナリトスルモ尙ホ實質的不確實ナルコトアルヲ免カレサルモノナレハ
 裁判所ハ其記載事項ノ裏面ニ存スル事實ノ眞否ニ付テハ自由ナル心證ヲ以テ之ヲ判斷スルコ
 トヲ得

- 代人ノ作リタル證書ニシテ本人ノ名義ヲ用ヒサルトキハ必ス無効ナリ
トノ規定ナシ
- 計算書ハ證書トシテ提出シタルモノニ非サルトキハ作製者ノ如何ニ由
テ效力ニ消長ヲ來スモノニ非ス
- 銀行ノ頭取及ヒ株主總代兼ノ肩書ヲ附シテ取締役支配人之ニ連署シ銀
行ノ印章ヲ押捺シタル證書ハ完全ナル契約書ナリト認メナカラ之ヲ無
効ノ契約ト認定スルニハ確實ナル反證ヲ舉クルカ又ハ他ニ相當ノ理由
ナカルヘカラス然ルニ該銀行ノ考課狀ニ該契約ヲ締結スヘキ議決ノ記

二八	一	二〇
二九	九	三
三〇	一	一〇
三〇	三	一九
三〇	三	一九
二五	一	七
二六	二	九

- 載ナキヲ唯一ノ理由トシテ該契約ハ株主總會ノ議決ヲ經サルモノト爲
シ該證ノ契約ヲ無効ナリト認定シテ判決ヲ下シタルハ探證ノ法則ニ違
背シテ事實ヲ確定シタル違法ノ裁判ナリ
- 計算書中自己ニ不利益ナル部分ヲ認メ利益ナル部分ヲ認メサルモ之カ
爲メニ自認不可分ノ原則ニ反スルモノト云フヲ得ス
- 相手方カ認メサル私證書ト雖モ裁判所カ他ノ證據情況ニ依リ其真正ヲ
認ムル上ハ之ヲ採用スルコトヲ得
- 對手人ノ否認スル私署證書ノ取捨ハ裁判所ノ自由ニ屬ス
- 契約證書ノ占有者ハ單ニ其占有ノ事實ノミヲ以テ契約ノ當事者若クハ
其代理者タルコトヲ證スルニ足ラス
- 私署證書中其記名及ヒ名下ノ印影ヲ記名者ニ於テ眞實ト認ムルトキハ
縱令其用紙數葉ヨリ成立ツトキト雖モ一應ノ推測上證書ノ全部カ記名
者ノ承諾上成立シタルモノト看做スヘキモノトス
- 證書ノ成立ヲ認メサル者ハ其解釋ヲ爲ス必要ナク從テ之ニ付キ意見ヲ
述ヘサルモ舉證者ノ解釋ニ同意シタルモノト云フヲ得ス故ニ裁判所ハ
其解釋ニ付キ舉證者ノ意見ニ羈束セラレサルモノトス
- 證書ヲ以テ眞正ナリト爲ストキハ之カ記載事項モ亦眞正ト爲スヲ當然

二六	二	一六
二六	三	七
二六	四	七
二九	二	五
二九	二	五
二九	四	五
二九	四	五
二九	四	五